川柳塔

創刊大正十三年　通巻八二二号

日川協加盟

特集・第１回川柳塔まつり

No. 822

十一月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。

■締切　11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は左記のとおりですので、よろしくお願いします。

★個　人　一口　二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。

①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円

②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　11月25日までに本社事務所へ

〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。十九回の歴史を持つ全日本川柳大会、十回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

「源　流」　坂本　柳峯――片岡つとむ　共選

「すんなり」　小松原爽介――荻原　柳絮　共選

「姿」　森本　清子――近藤　季男　共選

「ナース」　小出　智子――越郷　黙朗　共選

「海」　ちば東北子――仲川たけし　共選

参加費　2000円（投句料・「平成柳多留」第3集代）

賞　平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・世界経済広報センター会長賞・全日本川柳協会会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切　平成7年12月30日（土）

発表　平成8年6月・第20回全日本川柳熊本大会

参加方法　所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求くだされば送ります）

〒530　大阪市北区天神橋一丁目北1―11―702

社団法人　全日本川柳協会

電話・FAX（06）352―2210

感謝の二日間

橘高　薫風

第一回川柳塔まつりと銘を打って今までの総会と句会に前夜祭を設け、二賞表彰を六賞に拡大して催しましたところ、北は弘前から西は唐津までのお仲間のご参加を得て百七十名を越す本社句会を持つことが出来ました。地方との緊密な交流という所期の目的を果せたように思います。地方の方に来て良かったと思って頂けたかどうか、来年も是非参加したいと思って下さったかが肝心ですが、来年はまた構想を新たに充実したものにして行きたく思っています。

アウィーナ大阪での前夜祭は、東野大八さん夫妻のご参加を得ました。大八さんは、麻生路郎先生の時代の「川雑川柳まつり」に触れ、千日前北極星でのすき焼パーティーの思い出を語られましたが、その年は石曽根民郎氏のお顔も見え、句会の済む頃「路郎のファンだが宴会だけに出るファン」という岩崎愛二氏も来会され、須崎豆秋作詞の「川雑川柳まつりの唄」を炭坑節の節で唄い、男も女も踊る。葭乃先生はじめ婦人友の会の人たちは浴衣姿で興は一入深まったものです。私はその思い出を聞きながら、大八さんの言葉こそ私の期するものであったのだと頷いたのでした。

路郎先生が特別課題の選をし、優秀句の作者の所属する支部に持ち回りの大楯を授与されたのも、作品の向上と支部の栄誉顕彰とを併せ考えられたのです。路郎精神をつぶさに見て来た私は、少しずつそれを現実のものとして行きたく思っています。今年は川内家叭笑会の大熱演の河内音頭が宴会に弾みをつけて好評を得ました。

アピオ大阪での総会は同人諸氏の活発で真摯な質問が飛び交いました。それも昨年の総会の二倍ほどのご出席のたまものと思われます。印刷費や郵送費の値上げにともなう雑誌経営の困難さを、五年間会計部長として尽力下さった春城武庫坊さんから収支の報告あり、引き続き来年度予算案を新任の榎本吐来さんが説明して、印刷費の節減と同人増加運動へのご支援を強調されましたが、同人の積極的な推薦は社を挙げての運動に致したく、大方のご協力をお願いします。

六賞表彰の記念句会は予想以上に盛り上りました。総会終了時の近づくにつれ地方からの同人お仲間の到着、昼食をはさんで午後一時までには、まるで潮の満ちるように、しずかに豊かな趣きで自然に席が埋められて行きました。それを見ながら、私の心も潮の満ちくるようで熱い力を貯えさせて頂きました。

賞状を読み上げ、川柳塔社主幹橘高薫風と声に出しましたとき、私の名で出す第一号が若い同人、三十五歳の小林一夫さんであることに深い感慨を覚えました。二十一世紀へつないで貰える若者たちを育てることの困難な課題もまた頭をよぎるのでした。

受賞者の皆さんおめでとう。遠来のお仲間たち、ありがとうございました。

座右の句

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華　（薫風）

私の句

冗談がほんとうだからおもしろい　土橋睦子

川柳塔　十一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　感謝の二日間……橋高薫風…(1)
痩身のつぶやき……西出楓楽…(2)
川柳塔（同人吟）……橋高薫風選…(4)
自選集……(42)
川柳の群像　亀山恭太……東野大八…(46)
■古川柳　柳籠裏二篇研究（二十七丁）……(48)
水煙抄……西田柳宏子選…(52)
秀句鑑賞「同人吟……波多野五楽庵…(50)
　　水煙抄……浅野房子…(76)
大空のこころ(58)……橋高薫風…(77)
〈同人特集〉「私の句」(3)……(78)
渺湖抄……小出智子選…(82)

「痩身のつぶやき」

西出楓楽

これは明らかに差別である―とつねづね思っている。「○○ダイエット」「××痩身法」「部分やせ」お茶、石鹸、乳液など、女性週刊誌に減量法の紹介のない号はない。その手の本も沢山出版されている。なのに、太る方法については、お目にかかれない。

もちろん、太ることによって生じる病気や障害があり、減量の必要な人もあるだろう。しかし、そんなに多いとも思えないし、痩せていることによるデメリットだって、いっぱいある。

万葉時代は、高松塚古墳の壁画のような、しもぶくれのずん胴が、美人の条件であった。かの「涙、紅水の如く滴り、汗、香玉の如く流れる」と長恨歌に詠まれた楊貴妃も、小柄で脂肪のたっぷりとのった、豊満な体型だったそうだ。近年、スリム指向が若い女性から熟女にまで、猫も杓子にも及んでいるのは、マスコミに踊らされている部分がかなり大きいと思う。その証拠に、ほとんどの男性は、少し太目の女性がお好みなのだそうだから…。

■川柳こぼれ話「川柳と女性」……田中正坊…(85)
茴香の花……八木千代選…(86)
「噂」……西口いわる選…(88)
一路集「束縛」……白石春嶺選…(88)
「添える」……小林妻子選…(89)
初歩教室「元気」……吉岡美房…(90)
各地柳壇（佳句地十選／仁部四郎）……(92)
第一回　川柳塔まつり……(106)
前夜祭・平成七年度同人総会
各賞表彰記念句会
柳界展望……(114)
■句会だより　岩出川柳会……小倉アサ…(115)
十一月各地句会案内……(117)
■編集後記……(118)

座右の句
月見草ひとりの湖をもつひとに　（智子）

私の句
願いごとする間がほしい流れ星　山口三千子

ないものねだりは人の常、健康だが生れて以来ずっと痩せている私は、相反する体型にあこがれる。太った人達は何をしても悠揚迫らず、その体内にゆったりした刻が、流れているように感じられる。ひょっとして、一日が私より長くてトクなのでは…とひがんだりしてしまう。

こんなことで、次のような句を見つけた時には、心の中でエールを送る。そして、マスコミに見捨てられた少数派の悲哀をかこつ。

痩身も良し荒波をすり抜ける　緑良
体重計がフフンと笑うほど軽い　はるお
激やせの夫に怖い夏は来ぬ　公乃

ところがある日、健康雑誌が〝もっと太りたい〟という特集を出しているのを、新聞広告で知った。内容は、虚弱体質の改善策／あなたは、なぜやせているのか／太る食べ方／太る薬はあるのか／などなど。これは、私の福音の書とばかり早速に買い、胸躍らせて読んだ。記事はとても参考になり、反省点が沢山あって、たやすく実行出来ることも多い。

しかし、ちょっと待てよ。この本のお陰でどんどん太ると、嬉しいけど困ることもある。やはり自然体がよさそうだ。私の年齢では、増えた肉は全てお腹周辺―となるだろう。そして服のサイズが変り、手持ち分は全て買い替えが必要になってしまう。そうなると今度は、夫が激やせになりかねまい。

橘高薫風選

尼崎市　春城年代

世界一長寿国とはおそろしや
災害のさら地に秋蝶もつれ合い
恋そめし頃ありありと虫の声
敬老の日と思い出したり忘れたり
のど飴で老いの渇きを和らげる
寝たきりにならぬ呆けぬと言い切れぬ

堺市　桑原道夫

蜉蝣のごと魂を遊ばしめよ
タクシーの中で女にもらう飴
青年の鬣を処女見てしまう
秋の風　虫の糞から乾きけり
女から落ちしへアピンすぐ錆びる
壺焼に砂の混じれる団欒や

鳥取県　新家完司

日本海へ漬物石をいただきに
腰を庇って五十二歳の川遊び
草の魂は草刈機を呪う
震災の傷見せられて沈黙す
たぶん明日も今日とほとんど変らない
皮靴を履き常識を尊重す

横浜市　菱田満秋

活きのよいうちにと鰺はひらかれる
若死にをみな過労死のように言う
停年が猫の昼寝の場所をとる
婚姻も離婚も三文判で足り
涼風を神経痛も待っていた
菊花展　大日本へひたらせる

守口市　森川　まさお

手持無沙汰医者が立寄る盆休み
ものぐさな蟬は隣の枝に飛ぶ
一足早い秋の田舎でカレー食う
痩身に恃むものあり吾亦紅
この頃の海を誰かと見たいもの
秋は嫌　月の白さも蟋蟀も

宇部市　平田　実男

読み返すうちに高鳴り出した胸（路部賞受賞通知）
歩がないと勝てぬ将棋も人生も
あとで酒　議事進行の早いこと
七人の敵　支えにもなっている
アルバムのこの頃素直だった妻
夫婦坂　今日は私が杖になる

鳥取県　乾　喜与志

ポンコツになったエンジン検査室
白寿まで行けるでしょうかお姉さん
青春に戻る散髪屋を帰り
さざ波や卒寿の足をチャプチャプリ
団体に溶けこんでいる独り者
善悪を越え忘却の大笑い

和歌山市　堀端　三男

一級河川県境過ぎて名が変わり
一縷の望みあるからエール送ります
何気なくシャネルの風をくれる女
尖るなよまあるい月に笑われる
試されてるらしい疑問を投げて来る
六方を踏む花道もなく喜寿迎う

五所川原市　斉藤　劦

青年Uターン案山子も派手を着る
稲の穂が素直に垂れていく平和
生前はりんごを好んだお肌艶
こけし一対あり一人旅の部屋
校長の講話覗いている蜻蛉
農学論好きで哲学論も好き

島根県　堀江　正朗

ごろり寝て闇六十年の旅日記
大切にされすぎている身に不安
傷心を包むおいしい妻のお茶
大阪のちんどん屋さんと握手して
時たまに歳を忘れた背伸びして
土手の緑を真紅に夕陽沈むのか

寝屋川市　江口　度

炎天の売込み喫茶でて喫茶
鳴かぬ日の記録のばした雨蛙
風送るように鈴虫鳴き競う

松虫は胡瓜　鈴虫茄子の声
市民税納め自転車もってかれ
まつたけ届くダイエット繰延べに

唐津市　山口高明

シンプルに足元決めて秋の街
食べずとも生きております政府米
倖せの見本が寝てる砂の風呂
出身を聴けば堂々施設です
泥棒の部屋に一冊紳士録
太陽が昇らぬ窓に機の音

大阪市　神夏磯典子

満たされてぼんやりする日多くなり
約束がどしゃ降りになり試される
受け皿を妻は大事に持ちつづけ
教えないのに揃えて上がる孫の靴
お守りのように心に亡母抱く
祖母の味　使わぬレンジ　冷凍庫

豊中市　田中正坊

秋立ちぬ常温でのむ純米酒
秋灯下「西行花伝」読み終る
生きてきた生かされてきた五十年
ＤＡＫＳのネクタイ父のダンディズム
名月にあすのいのちをふと思う
ぎやまんに火の酒みたす白秋忌

松原市　小池しげお

介錯を頼んで妻の傍で寝る
告白をして仕舞わねば血が濁る
古希一つ過ぎて上手に酒を飲む
大根を播いたら妻の誕生日
ちぎれ雲　養子のようになる倅

尼崎市　田中薫

人死んで花火の赤を鮮やかに
赤とんぼ来て哀という文字書かせけり
生きながらえてわが鼻に西日ただれる
旅かなし流れ易きは真昼の星
秋の樹に虚しきものの育ちける

藤井寺市　吉岡美房

反省と謝罪　今年の夏も暑かった
抜けるよな天へ拳を突きあげる
残心は月の光を浴びて立つ
銀やんま亡母の便りをもってとぶ
しみじみと飲めばしみじみ月が出る

奈良市　宮口笛生

金魚みな死んで二学期始まりぬ
雨の暇　昨年の今日の日記みる
俺はパンお前お粥の老夫婦
一週間の命へ別の蟬が鳴き
松茸松茸　中国産に韓国産

高槻市　川島　諷云児

蛇口全開　人の噂は気にしない
羅針盤狂い始めた夫婦舟
怠けると妻が教育的指導
転勤をするたび軽くなるいのち
自叙伝がようやく書ける年齢になる

鳥取県　谷口次男

毒を消す哲学一つ持つ強さ
人間に特別は無し法律書
同情は要らぬ金ならいくらでも
大会の特別席が気に食わぬ
わたくしもメダカも地球守る会

弘前市　小寺花峯

カウンターに一人の女外は雪
会者定離トンボが止まる葱坊主
ボーナスと思う朝から二日酔
宝くじ当たる仮説の夢芝居
逆立ちをしてもこぼれぬ消費税

青森県　田中叶

人恋し灯がふたつ消えひとつ点く
黙って僕にホースの水を頭から
むかしの妻の声で公衆電話から
よく眠る妻僕よりは生きるだろう
なんとなく九月午後から社を休む

竹原市　小島蘭幸

柱時計は止まったままのふるさとよ
コンクリートジャングル赤とんぼが飛ぶよ
盃の中にいるのは師か父か
三十年経ったらやさしさが分かる
黙っていると黙っている秋だ

米子市　林荒介

いのちを配る朝夕の新聞
雑魚だから群にならねば生きられぬ
スクラムを組めばわたしも強くなる
枸橘の棘の意見を聞いている
洗い髪　白をまとうて今日おわる

米子市　林瑞枝

煌々と光る星ありちちの恩
有り体を述べると崖に月が出る
遙かなものとなったちちたちの帽子
右脳には魔法の辞書をインプット
秋のイメージの花咲く赤蜻蛉

米子市　政岡日枝子

音楽会のように咲き出す秋の七草
昔の傷に触れずに愛を深めてる
暈された返事の尻尾つかんでる
引きずっている名が前へ行きたがる
集会にひとりのピエロ派遣され

鳥取県　鈴木公弘

風ばかり抱いて曲がった唐辛子
秋ですよ爪は尖っていませんか
蒼天や大ぼら吹いてみたくなる
懺悔している居酒屋の賑やかし
たんこぶの役立つことに気づかない

寝屋川市　岸野あやめ

坊様の男臭さも浮世かな
Uターン出来んで波にさらわれる
何故ビール飲まぬとこわい眼をしはる
今日もまた作るひとりの卵焼き
引越し屋さんに見られちゃ困る品

島根県　小砂白汀

敗戦忌　残飯同士笑い合い
遠耳と遠耳けんかでないけんか
無一文にできたはたったの子が六人
オクターブ上げて鴉が秋を泣く
預り料取られそうなり低金利

弘前市　佐治千加子

吊り橋がゆらりと夏は逝きにけり
百日紅　亡夫と見上げる七回忌
尾骶骨むかしの愚痴を吐きたがる
正論を言えば言うほどきしむ椅子
夕茜　遠ざかりゆく故郷よ

西宮市　牧渕富喜子

見た目には変りない日と映るらし
仕とげ得し何ひとつ無し空の青
何事もなかったような鍋の位置
何もかも許されそうな茄子の色
日の入りをここで見るのも縁だろう

和歌山市　西山幸

絵日記の絵も少しずついじけだす
不器用にわらい話を溜めている
昨日を思いあしたを思い秋刀魚焼く
出納簿　現実だけが確とあり
桐一葉落ちてこの世をくりかえす

和歌山市　木本朱夏

唐突にこすもすが咲く女の膝
ホッチキスで止めた男がちぎれそう
蜘蛛の巣に引っ掛かっている夏の恋
不意に幕上がり喜劇にしてしまう
面いちまい脱いで手紙を書いている

尼崎市　春城武庫坊

戦記読む泥にまみれた秋夜長
秋を呼ぶ土鈴の音を買いに行く
ベランダに座った秋が動かない
芒揺れ忘れた歌を思い出す
落日の光束ねる懸命に

八尾市　宮西弥生

めぐりめぐる季節に女は輝きぬ
うまい空おいしい水よと夏がゆく
思い出は乾いた時計のまま止る
三姉妹生活を写した顔でいる
風当りきつい人の世に夢一字

八尾市　高橋夕花

黒かみも晶子のごとき血の失せし
歳月に私なりの面を彫る
白桃はするりと剝けて平和だな
うっすらと紅はく友のデスマスク
殊更に秋のドラマを大切に

羽曳野市　榎本吐来

気配りの一つ放っておけと言う
一国の総理を料理する茶の間
飲めぬ子の先案じるも親ごころ
温顔が呆けの兆しと案じられ
マイペース六十路の視野に柿熟れる

下関市　石川侃流洞

欲増えた余生へ光陰矢の如し
勲章に色分けされた人の価値
美しいだけでは蝶も蜂も来ぬ
夫婦独楽一抜け二抜け空回り
二人四脚　名残がつきぬはしご酒

東京都　山口新子

ポテトコロッケ物憂い人に買われゆく
病む父へ日記のようにハガキ出す
見送った手の置き所抱きしめる
ストローの殺意　氷に分け入って
胸の傷わたしが通り抜けた跡

西宮市　林はつ絵

後や先　漏れる充電だとしても
妻自身まん中におく妻の椅子
狂わぬのはすこし阿呆になれるから
老いの日々のんびり株の下がろうと
戦災の話で急に近くなる

鳥取県　土橋睦子

お経よりカラオケ好きなご住職
炎天の梅干し向日葵笑ってる
兜虫　孫の日課に疲れだす
郷の灯を恋い病窓に夫といる
看護して夫に溜息など見せぬ

鳥取県　大角幸代

クロワッサンぽろぽろ愚痴のようこぼれ
言葉にならぬことば拍手に込めている
赤い靴はいてそれから迷い道
自惚れの心にさむい雨が降る
いつわりを書くには紙が白すぎる

鳥取県　大角正道

やさしいやさしいお母さんの笑顔
森にいるただそれだけで満足だ
俺も息子も猿の仲間だと笑う
清水こんこんようやく秋を迎えたり
今日も素敵な雲に出逢った帰り道

熊本市　永田俊子

蛍袋に女の妬心ためている
水底に白玉の真実透き通る
政治家を変色させる酸性雨
高嶺の花と高嶺の椅子を男恋う
せめてもの慰霊碑の影踏まず行く

羽曳野市　吉川寿美

椅子深く足を組んでる自尊心
諍いはよそうよ秋の陽が落ちる
溜息は独りを託つ影法師
病窓を幾めぐりせし草紅葉
点滴の病夫と大事な刻をもつ

吹田市　古川喜美子

雲ひとつないというのも恐ろしい
パリー祭エッフェル塔は伸びに伸び
フリーエージェント私もやってみようかな
ゆたかな世うちわの風のなつかしく
颱風一過おもちゃの電車走り出す

大阪市　西出楓楽

負けそうでビールの量は減らせない
にわとりも牛も聴いてるクラシック
失敗談　大げさにして媚びている
毒舌の毒が自分に回りそう
オウムではないが瞑想ぐらいする

伊丹市　山崎君子

蟬しぐれ手品のように消えた朝
ジャンボくじ娘の夢も共に買う
月あかり名残りの花は夕顔か
友の手はまだ艶々と梨を剝く
うぐいす張りの廊下わたって秋に逢う

大阪市　桝本蕗児

旅はよし行く先々にある匂
旅の朝このまま蒸発出来たらなあ
オオクワガタ私にあんな値はつかぬ
子が離婚　父も持ってる離婚歴
男にはオヤジと呼んだ人が居た

松江市　柳楽鶴丸

八月十五日男の幽霊出て来そう
夢枕に十八歳の美青年
五十回忌　元気で迎えた生き仏
性格が正反対の妻といる
僕の人生に迎合の二字はない

砂川市　大橋政良

いろいろの欲を額に貼っている
氷山の一角でした五十年
ぐうだらの手で日めくりの今日を剝ぐ
年金とどこまで歩けるでしょうか
窓際の椅子に噂がつきまとう

弘前市　中山雅城

一進一退　達摩はじっと我慢する
地吹雪に石を抱いてた北の屋根
木を植えて友好都市が結ばれる
熔岩と背中合わせにあるいで湯
月見酒ススキのように揺れてくる

黒石市　相馬一花

人柄がからりと変わるほど飲ませ
夫には黙り他所ではよく喋る
お隣にだけ麗人が酒をつぐ
ご先祖にそっくりなのは禿げ具合
血統書付きの駄犬を買わされる

十和田市　小笠原敏人

見てほしい人がいますと娘の電話
この人と言われて父の物分かり
娘に候補　嬉しいものやら淋しやら
子を縛る権利などとは履き違い
帰り荷に心が弾む里帰り

仙台市　川村映輝

リハビリのつもりで歩く万歩計
曽孫の産声待っている卒寿
初サンマ故郷からの宅急便
九十を越えると外出止められる
通るたび近所の犬に吠えられる

町田市　竹内紫錆

コーヒーもいけます湧水の調査（市民大学演習）
現代の関所は磁気をくぐらせる
写生句の巧さ　右脳　左脳
大統領に似た顔ガムを噛みはじめ
猛暑でしたかとりちぎに秋刀魚くる

静岡市　安本晃授

旅心落ちつく先のない枯野
黄昏の造花に迷う秋の蝶
侵略の罪を知ってる兵の靴
千のドラマ祭り囃子に組み込まれ
再起する明日を見張る庭の石

静岡県　薗田漠沓

絶え絶えに山門近く残り蟬
勧誘の美人に心ちょっと揺れ
山の子の蔦ブランコに揺るもみじ
暑さなど知らず神社の横に住む
総裁選に横槍しごく者も居ず

富山市　舟渡杏花

秋霖が男を遠いものにする
ここまで追い詰めてしまった鬼面の朱
うしろ姿　盗まれている充実感
紙コップ　ポロリ洩らした氏素姓
豆大福が好き人間がもっと好き

富山市　酒井輝

ささやかな誇り塵芥車と生きる
なれるなら子に選ばれるママになる
結論を末席だから軽く変え
関東の揺れまだ残る老いの膝
嫌いでも居ないと困る友もある

富山市　島ひかる

合掌の手からこぼれている戦
ふるさとで待つと返事に書いておく
月のこと息子と話し尽きぬ夜
手鏡へ自問自答をくり返す
来年のことを言ってる風の盆

羽咋市　三宅ろ亭

筆勢が語る友の健康度
受けて立つ戦い多少の余裕あり
文化祭　並ぶ菊より野辺一輪
寺豪勢　寄付一覧の札を張る
われときて遊ばぬ雀多すぎる

京都市　都倉求芽

闇討ちのつもり明け方の核実験
日銀の決め球は年金者殺し
これでもかこれでもか朝顔対木槿
仏さまもやはり灯明が頼りですか
富士よ怒れ悪の限りをした裾野

京都市　松川芳子

ながながと話してあきぬ姉妹
口だけは達者ですわと先手打ち
呼んでみて母の熟睡たしかめる
言いたくない聞きたくないと反抗期
ふる里の歌が恋しい月見草

京都市　山海友熙

のっぺらのようでも壺の向き主張
ある時の笑顔で秘密かくされる
京の町　通り名唄で道標
地蔵さん優しさ漂う道標
玄関に狸の夫婦　客迎え

奈良市　米田恭昌

ガリバーにはお猪口のような大茶盛（西大寺大茶盛　二句）
回し飲む茶碗の口紅も大茶盛
秋夜長　空のボトルが並ぶ書架
松茸の隣うるさい換気扇
冷や奴いつも愛想のない顔で

生駒市　北山悟郎

終戦に大和魂玉砕し
五十年波乱万丈我が命
五十年ミンミン蟬が告げている
忠魂碑　冷えた世間の風を受け
生き抜くに義肢が軌みに軌んでる

大和高田市　岸本豊平次

老い二人家計簿に白い頁出来
上中下あるから見栄をはる羽目に
草引けば額に汗するほどの庭
振り向けば携帯電話のもしもしだ
笑っても泣いても地獄なら笑お

天理市　飯田昇

毒舌の嵐を煽る茶碗酒
泥舟と知りつつ乗ってみるも策
農薬に未来案じる茄子の色
琵琶の音に男心は揺れ動く
年金がデフレの海で立ち往生

奈良県　長谷川春蘭

蜩にせかれて余生すぎ行くか
生き残っているだけのこと日も西に
口癖の昔は昔　冷奴
ハンカチがさっと乾いて用なき日
咲き疲れたか朝顔の小ささよ

奈良県　田中紀美代

お喋りの口を封じに蚊がとまる
通帳におしめりほどの預金する
飛鳥路に赤い線引く曼珠沙華
歳の数　多めに言える日のゆとり
温泉の予約済ませて夏終る

和歌山市　山田高夫

仮りの世をご破算にして北枕
他人ごとと思い見送る霊柩車
常識という厄介なのし袋
道順に自然と足が向く飲み屋
時間とのいくさ終った定年後

和歌山市　福本英子

爽やかな風に一日家出する
紅葉の案内汗を拭きながら
今のうち虹をはっきり見ておこう
縄梯子下ろしてくれて先に逝く
耳にタコできた愚痴だがもう聞けぬ

和歌山市　北山好笑

砂に書く文字から愛が洩れていく
許すとか許さぬとかの仲でなし
人情がからみ眼鏡に色がつく
裏側をだけ見る人の冷たい眼
花言葉　知らぬ女に貢ぐ花

和歌山市　山口三千子

同感と相槌打ってからの乱
種袋開けば息吹きもれてくる
書斎まで作った家に子は住まず
孫悟空出そう層雲峡仰ぐ
富良野エリア蝶々になってシャッター押す

和歌山市　玉井豊太

土曜日も筋書きどおり朝をでる
軍配を上げるに母は間をもたし
家出した子が突然に戸を叩く
信心へ遠い神様苦にならぬ
やさ男に私が支えだと思う

和歌山市　青枝鉄治

汚職への誘いないまま職を退く
輪の中が鬼の撒き餌に乱される
サザエさんの笑い地でゆくのは我が家
定退の日から優しく時きざむ
有給をとればリストラ待ち受ける

和歌山市　池永正雄

ライバルに負けては居れず眼鏡拭く
低くとも頂上に立つ優越感
カタカナの看板増える城下町
ハンカチで美しくする別れの詩
鉢植の姫なんとかがかわいくて

和歌山市　桜井千秀

金持ちのしぶちんえらいなと思う
まほろばの湖に散骨のぞむなり
自己愛を溜めると花は匂わない
良妻賢母　男みじめにするばかり
楽しいときも淋しいときもひとり言

和歌山市　田中輝子

曼珠沙華　少女の頃に戻りたし
娘の嗚咽きいてる秋が舞い落ちて
風船を割って空気を入れ替える
崖っ淵のように投函する手紙
海に誘われ素直になってくる話

和歌山市　堀畑靖子

運勢は低めパワーを貯めている
盆暮れに会うだけになる過去になる
悪臭を放つ過去あり彼岸花
不器用で余分な力入れすぎる
セーターの着やすさそんな仲になる

和歌山市　玉置当代

孫三歳オーレンジャーにかぶと虫
甘口のカレー孫へのおつき合い
趣味多彩　彼女ただ今燃えている
核のある限り平和はまだ遠い
温度差の違い対立する議論

和歌山市　榎原公子

リフォームの利休ねずみは亡母の色
恥をかきましょうよおつきあいします
温度差が著しくて溶け合えぬ
ああ夫婦　百に一つはあう意見
野にあってこそ大胆な主義主張

海南市　三宅保州

一日中テレビも妻もよく喋る
お喋りは女のオペラかも知れぬ
後席に座ると私語をしたくなる
NHKでニュースを確かめる
紳士録　意外な人が載っている

和歌山県　小倉アサ

いつからの思い線香花火抱く
一身上の都合で咲かす花もある
喜劇続出メカには弱いのも女
息切れの謎解けてくる句読点
焦り過ぎた報い遠景ばかり描く

神戸市　山口美穂

毎日が日曜というのに忙しい
震災の傷ぬぐっても拭っても
しゃべるだけしゃべらせてからの意見
お月さま被災地をどう見てござる
菊の香が本当の秋運んで来

西宮市　門谷たず子

槌音のあちこち高し秋の天
水もガスも出る倖せのおままごと
これも倖せ二人で一つ用が足り
故里の話が好きな蕎麦枕
いもうとの手術あとから秋深む

西宮市　秋元てる

虫干しに着る当てのない藍微塵
キョスクの土産ぶら下げ任地から
孫の絵のひまわり壁に咲き続け
ふんばったままの空蟬秋に入る
河骨とふさわしからぬ名を貰い

西宮市　西口いわる

美人画の淋しそうなも艶となる
わたくしを置き去りにして夏がゆく
なんとなく母が恋しい秋の風
眼差しがやさしくなった老いたのか
酒好きのほんのすこしは溢れさせ

西宮市　山本義子

定年も十年経つとみな仲間
このさきの峠もきっと助けられ
四捨五入　切られた同士輪が温い
まだ生きる証　手かがみ放さない
旅さきで見る満月にある安堵

西宮市　亀岡哲子

若やいで吉本ばなな読む九月
ほたるぶくろ支えるものもなき風情
大声で喋る夫と居て無口
蟬の羽曳く蟻の顔　稲光
それぞれに金脈のあり七五三

西宮市　奥田みつ子

バラ咲いて散って答の出ない道
カーテンに夏の残像　電話鳴る
モジリアニの女となっている秋思
更地ばかりになった街並　虫と居る
雲走る火の見櫓にカラス鳴く

宝塚市　中田純次

天体のリズムの中に神をみた
諸事万端リズムに乗った日はたのし
墓地も買い自分史も書き先ず安堵
台風の眼からのぞいた天守閣
われもまた地球市民だムルロワへ

宝塚市　丸山よし津

眉ていねいに描き一日が始まりぬ
何もかも電気仕掛けで説明書
爽やかに生きたいだけで欲は消え
稲光　鍵っ子ひとりテレビ消す
花瓶一ぱい菊があふれる講演会

宝塚市　嵯峨根保子

燕の子巣に戻そうと人が寄り
足許にむらがる鳩と平和ぼけ
円卓に主座あり六人の我が家
生涯学習　机と向かい合いながら
さばさばとしすぎて恋が実らない

川西市　氏林洋敏

はなむけの言葉心に残らない
お名前は存じてますと軽い世辞
豪邸に住んで表札見当らず
お隣の工事にじっと耐えている
日曜日夕べになると鬱になる

加古川市　吐田公一

別姓もいいが何だか他人めき
ことごとに妻は誓詞を楯にとる
まだひとりですかと位牌問いかける
気を使う職は避けたい二度の職
働いた汗を喜ぶ風が吹く

岡山市　井上柳五郎

日の丸の旗も平和に揺れ動き
死への距離　戦友の訃が近くする
災いへいのち保つに怯えもつ
横やりの本音はとうに読まれてる
声高によいしょは言わぬようにする

頑張れと言われた途端へばりだし
跛行して影もきれいに跛行する
フィクションが時に潤滑油の役も
一筆箋　深い言葉に揺さぶられ
皆様のご期待にそい辞めました

岡山市　時末一灯

ほとぼりが黎めたら吹こうシャボン玉
万華鏡どの布裂れも紙屑も
オウム 核 秋の詩人に成り難し
人恋し小便小僧が声掛ける
がんばって優しい言葉待ってます

岡山市　川端柳子

食欲が出て汗が出ぬ秋だなあ
有難く無事で暑さを越えました
入歯に眼鏡　補聴器つけて柩まで
面倒なことが嫌いな喉仏
勿体ない三度の飯に事欠かぬ

倉敷市　田辺灸六

萩活けて余生の眉の静かなる
S盤のタンゴ聴いてるエゴイスト
よちよちも女　鏡の前が好き
天国の渡り廊下に虹が立つ
骨拾うやれやれと言う顔を見た

倉敷市　小野克枝

贅沢は敵どっちみち縁がない
代人のほうが余っ程うまいです
別嬪に写り葬儀に取っておき
二言目またじいちゃんの口癖か
株式がまた上がったり下がったり

笠岡市　松本忠三

検診のバスに乗るさえ場所を選り
好き嫌いせずに食べよと骨粗鬆
宴会の音頭　詩吟の声でとり
メダカの学校一年生に若がえり
一姫を愛でてひ孫を抱き上げる

岡山県　二宗吟平

四面楚歌　日本政府は亀になる
点滴の追加　看護婦さん無言
嫌なことばかり残った脳の裏
ごもっとも意見を合わす妻哀れ
よく食べてよく寝て呑むかやせ薬

岡山県　荻野鮫虎狼

メンバーを外れはまった蟻地獄
美人とは程遠くなる丸い鼻
底の無い笑い袋の中に母
骨太の男の背なに陽が丸い
弾んでほしい毬をしっかり抱いてやり

岡山県　山本玉恵

広島市　森田文

空澄みて日本列島文化祭
立ち上がる雲とファイトを分かち合う
この奥に蓮池がある好きな道
秋ひとつ躊躇いがちなふじばかま
次にくる波に気付かぬ蟹夫婦

廿日市市　林野甦光

ゴミ袋の底に文化の屑を溜め
もう伸びぬゴムを伸ばしている落ち目
折を見て同じことを聞いてみる
清涼剤それは逆転ホームラン
孫近頃つくり笑いがうまくなり

竹原市　時広一路

生かされていますゆっくり湯に入る
美味いお茶飲みたいものよ二人きり
カタカナがこんなに増えた半世紀
飲むななどいうから僕の黙秘権
天災という名で人間試される

竹原市　古谷節夫

お隣に寂しがり屋の犬が居る
陽の恵み四季を知らせる花の色
泥水を被って社長の目に適い
見逃したカーブを今も待っている
目を入れたダルマへ髭も付けておく

竹原市　森井菁居

熟年が群れるマヒナのコンサート
しのび泣き聴くサティアンの月あかり
しあわせ彩で結納が来る秋が来る
ひとすじの愛　大輪の花をつけ
秋の詩を二人で拾う素晴らしさ

竹原市　岩本笑子

一斉に手を振るニラの花が好き
日本のリズムとなって四季の花
花活けていやな時世を忘れよう
立ち止まって橋のなげきを聞いてやり
町並みの古さと山の深緑

竹原市　石原淑子

鈴虫や月見茶会に興を添え
米寿とや　まだまだほんの一里塚
母の老い丸ごとかかえ秋の天
コーラスが蟬から虫に移った日
不覚にも弱音をポロリ電話口

美祢市　安平次弘道

びっくり箱あけて他人になりました
花いちもんめ花の化身になりました
魂胆を見抜くと変る風の彩
階段を登ると花野かも知れぬ
子を産まぬ女が増えて行く怖さ

柳井市　弘津柳慶

逆風へ父の恐い顔がある
その答とうの昔にできている
家族皆殺してまでもオウム教
干渉は御無用　核を実験し
ヤアヤアと握手の陰に野心あり

広島県　藤解静風

ムルロアの風が死ぬ核実験
被害と加害　日本のこころ交差する
自分史の喜怒哀楽が縞模様
ひまわりの一つが僕に背を向ける
こんにゃくの屈託のない裏表

鳥取市　春木圭一郎

飲むほどに美人の数が増えてくる
君と飲む酒が一番美味しいよ
団欒の夕餉の酒もいいものだ
二日酔いそれでも晩は飲んでいる
秋深しちびりちびりと本と飲む

鳥取市　武田帆雀

一つだけ人の言わないことを言う
柔と剛　東のボスと西のドン
誤字　脱字　字足らず深手負っている
口よりも行動啖呵切ってみせ
ドク君に手を振る幸よ多かれと

鳥取市　小谷美ッ千

服を脱ぐ後ろ姿は油断する
男と同じ匂いをさせて風が吹く
密約がありちりちりと秋深む
首討たれゆくのにシャツを白く着て
哀しみの胸にも深い天がある

米子市　石垣花子

端はもう風化し出した一枚岩
頑丈な杭に似合った縄をなう
鬼伝説の山も可愛いキャンプの声
こんなにも少ない灰になった老母
頑固だから大黒柱守り抜け

米子市　光井玲子

起きぬけの水に五臓を洗われる
さわやかな笑顔をくれる秋の天
遠い記憶　亡父の口ひげ怖かった
油断すればすぐ悪妻になる私
いで湯湧く話に荒野ときめいた

米子市　青戸田鶴

大文字にやっと出逢えた京の夜
仁王さまもストレスためていらっしゃる
円い瞳にみつめられたら逆らえぬ
一日の重みを思うこの頃だ
へんてつのない階段に思い出が

米子市　木村富美子

捨てられぬ望みがあってまだ死ねぬ
名も知らぬ香水だけどへつらわぬ
うるむ眼で亡父の煙も見届けた
重荷だと思えば肩も痛くなる
駆足の青年の日は悔いばかり

米子市　金山夕子

習字の筆でくっきり描ける父の顔
十把一からげしゃしゃり出る訳にもゆかず
私のリズムにはない目白押し
ほいほいとその気になると躱される
また一人クラスメートが逝く　寒い

米子市　野坂なみ

朝のよろこび両手に受けて漕ぎだした
灯台はどの漕ぎ手にも差別せぬ
庭の木や石と話が長くなる
幸せが逃げないように網をはる
戦後五十年　平和のつけが来たようだ

米子市　新正子

縄のれんくぐるとみんな若者だ
花婿のオムツの頃を知っている
団体のオバタリアンが来る　恐い
秋深し　無言電話が増えて来る
何もない幸福　虫が鳴いている

米子市　白根ふみ

尖った芯もまあるくなって眠りだす
若者がさまよう夏が凍りつく
美しい姿になるぞ羽化すれば
母が逝く　それから里が恋しくて
亡父の虫亡母の虫なくふる里は

米子市　澤田千春

坂のくぼみで運命線をじっと見る
旅先でいつもまつわる赤トンボ
やすらぎをくれるあの友幸せか
息とめて絵にしておこう夕茜
香水が若いわたしをつれ戻す

米子市　川上より子

赤襦袢　父母に着せ酔う一家
テールランプの赤が魔よけになっている
標準語で言われた礼にこくがない
世話かけた話は書かぬ殿の日記
雲水の草履を脱がすはたの音

米子市　中井ゆき

明と暗　回り舞台の上にいる
慈悲一杯　背中に瀬戸の海かえる
風の盆人も流れる坂の灯よ
木犀よ紫苑よ庭に母匂う
すすき野をだまされぬよう分けてゆく

倉吉市　最上和枝

幾日も濡れぬ雑巾騒ぎ出す
威厳などないが親父の咳払い
親を見て貰った嫁が風変える
楕円球子を産み詩も詠んでいる
メンバーが欠けて喜劇が始まらぬ

倉吉市　松本よしえ

赤ちゃんの名前でわかる親の夢
親の世話しない世代が親になる
メンバーの一人が何時も遅く来る
付けまつ毛外し風呂屋に忘れて来
親友が時々痛いことを言う

倉吉市　野中御前

あなたには通用しない騙し舟
世渡りが下手で尻尾が重くなる
定年と同時　故郷の農をつぐ
振り向けばあそこで燃えたことがある
お伽ばなしの種が切れたおばあさん

鳥取県　土橋螢

魂もいっしょに眠る秋だから
焦らないじっくり露の乾くまで
それきりの人を煙に巻いている
戦争に敗れた傷の深いこと
生きているのは魂の抜け殻か

鳥取県　土橋はるお

面白いことが言えたらなと思う
若者にじっくり判るまで話す
二学期のコンピューターが呆け気味だ
地球儀の中に我が家もあるはずだ
クラクション鳴らして妻を焦らせる

鳥取県　林露杖

月見れば月　星見れば星　夜のロマン
滔々の流れ刻々同じからず
風邪三日癒えて喜雨あり大根蒔く
風邪に臥て見た夢の吾未だ若く
仰臥してミイラの如き手を翳す

鳥取県　津村八重子

満潮にのれどさからう風も吹く
すばらしいファッション夏の風にのり
肩三つたたき別れは口にせず
思い出の軍靴今だに捨てきれず
旅立ちに先ずはぶらしを先に詰め

鳥取県　田村きみ子

キノコヨーグルト好きで毎日食べている
嫁さんの香水ちょっとお借りする
蛇口から幸せそうに水が出る
人間が好きで金魚も大好きで
青春を手繰ると戦だけになる

鳥取県　乾　隆風

本を読む暇はあっても髭剃らず
まつたけを触る女の顔を読む
ほとぼりが冷めても古傷は疼く
親亀の池に子亀はもどらない
刑務所のまわりは秋が深くなる

鳥取県　江原　とみお

間違えた道を哀しや股のぞき
炎天の蟻一匹もしりぞかぬ
円の軸に酒樽を据えておく
俺に似た泥人形を買ってきた
魂の汚点を秋は見のがさぬ

鳥取県　松下　たつみ

噂には強い女のサングラス
憎まれる言葉も用意して立場
子には子のルールなるほど滑り台
心機一転　髪型かえただけのこと
無人寺もったいなくも虫の声

鳥取県　羽津川　公乃

公害を抱いた誘致になりそうだ
豊作に米の順位がまた下がる
人気度は爺ちゃん優位変らない
ミシンまで夫に頼るメカ音痴
団体を迎える冷めた茶碗むし

鳥取県　さえき　やえ

同じ目の高さこころを開いた子
金借りにころし文句でやってくる
ほっとけぬ人がほっとけいうている
娘がかえる口にこうやく貼っておく
安いくつ高いくつよりはきやすい

鳥取県　西原　艶子

満月が味方のようについてくる
月満ちて欠けて女の愛に似る
ひとり泣く部屋はこころの隅にあり
父母の尖ったわけは子へ言わぬ
しあわせを望む子の瞳に負けて母

鳥取県　上田　俊路

霧の中還らぬ島へ鐘を打つ（北海道旅行　2句）
団体さん去って摩周湖霧が晴れ
史書片手往く街道にロマン湧く
修羅越えた男の描く絵が赫い
万歳で送りそれから会ってない

鳥取県　西浦　小鹿

顔のない政策が出る演説会
応援歌唄ってうしろ走ってる
月明り昔の女が通りすぎ
キリギリス畳の上に死んでいる
材木が箸の長さに切れてゆく

鳥取県　石谷　美恵子

保護色がなかなか脱げぬ自己嫌悪
阿吽の呼吸　会得するのはまだ遠い
今だから言える騙したのは私
哀しみの深さノートは白いまま
そこにある夫の日記が気にかかる

松江市　舟木　与根一

辛うじて米価据え置き祭り笛
取り柄ない田圃で米はよくとれる
コストには触れず今年も稲を刈る
掟守り蟷螂の雌動かない
弥次馬は棄権したこと棚にあげ

出雲市　石倉　芙佐子

止まり木で妻は愉快な木偶になる
妻でいて妻でなき日の水鏡
三界に露の命の置き所
帯きゅっと締めて私に活を入れ
半衿の白さ情念ゆらりゆらり

出雲市　富田　蘭水

出来高を野菜とじっくり話してる
屁りくつをつける強者の核実験
検診で来年までの夢もらう
この時計私に似たか遅れ出す
傷心の日の紫陽花は大きすぎ

出雲市　竹治　ちかし

出生地　我　満州と書く誇り
父がしたような咳して吸う煙草
現実と理想が僕と妻の距離
寄せ書きの夢が褪せてた同窓会
風一つ吹けば壊れる平和です

出雲市　尼　れいじ

大阪と出雲がだんだん近くなる
良い人でしたなどとは知らぬ烏鳴く
亡母の夢見てすまないと亡父想う
落葉ではいもは焼けない小さな庭
捨てきれぬ恋に哀しい紅をひく

出雲市　園山　多賀子

身の程を綴る八十路の相聞歌
てのひらの温み女の私有物
忘られた誕生日です爪を切る
登り切ったてっぺんにある余命表
記憶の中の影が追従笑いする

出雲市　吉岡　きみえ

旅ごころ誘って秋の雲うごく
蛇行しても目標だけはもっている
若者の街だ何かが起きそうだ
おしおきの涙　納戸のうす明かり
年金で食う食卓のさみしけり

出雲市　板垣草丘

温顔は隠岐に香川に日御碕（栞先生を偲び）
眉画いたついでに総理の目も画いた
獅子舞いが着たこともある妊婦服
朝顔が晩まで咲いて秋を告げ
席詰めて人の温みが苦にならず

出雲市　伊藤寿美

無常かな笛吹川が過疎を縫う
紋白蝶の恋はきらきら陽の真下
補聴器にしのび込む秋きく独り
古時計の振り子が亡父の音で鳴る
聖戦という洗脳もあった過去

島根県　松本文子

花びらの影は踏みつけないように
これ以上は望まぬ花束が一つ
一石を投じる為に生きている
雨の音いつも一人で聞いている
名月や命を忘れそうになる

島根県　藤原鈴江

自信過剰とうとう折れた足の骨（入院　3句）
快いはずの秋風身にしみる
病床でわが人生をかえりみる
コスモスがかばってくれる荒れた庭
いつの日か良き日を祈る無神論

島根県　石飛水煙

出雲弁　誰はばからぬ母の声
国民にわからぬ新党また生まれ
明日知れぬ命　鮭が帰って来る
帰らぬ児ありて玩具じっと待つ
保護色の如くに女服を替え

島根県　佐々木鳳笙

留め袖の叔母が囁く操縦法
トーテムポールここらに椰子がほしい庭
ある日ふと蜘蛛の立場に立ってみる
程々に呑むブレーキが効きかねる
足して二で割ると理想の女になる

香川県　木村あきら

損得を捨てると浄土見えてくる
ケンカには負けぬが涙には脆い
ネクタイを少し派手めにする傘寿
竜河洞　自然の水琴窟をみる
文明が進み地球を駄目にする

香川県　成重放任

休肝日破って友のせいにする
踏みしめた大地に母の温かさ
蜩の声も暑さに遠慮がち
くちびるの乾きをいやす人恋し
一本の糸に暮らしを託す蜘蛛

香川県　川崎　ひかり

脇役が光ると強い風あたり
千年杉　老母があやかれますように
男もつらい女もつらい均等法
時雨降るいっきに秋がかけ抜ける
どう見ても時代遅れの老父の靴

香川県　池内　かおり

乗り継いで名医に会って来た次第
傾いて行くのに理由などは無い
地球儀の中　大変がまだ続く
上司から丸見えになる損な位置
分け前で揉めるほどには財も無し

松山市　白石　春嶺

建て替えた方が安いと言う大工
どの首も疲れて折れる終電車
税務署で意外や意外茶をよばれ
ときめきが冷めた家裁の控え室
裏口が実は表になる質屋

西条市　片上　明水

銀行へ寄った話は知らぬ妻
予期せざる儀の毛筆の便届く
アルバイトらしい行儀のよい神輿
化粧壜　色が変って秋を塗る
顔ぶれが揃うと鍋の味になる

今治市　越智　一水

打水へ夕風を呼ぶように撒き
打水へ石の光よ夕風よ
九条はああ人類の道しるべ
官官接待　税金　湯水のよう使い
退職後　三割引きを妻と追う

今治市　矢野　佳雲

定年で退く日の式は簡単に
物騒だから迷彩服を着て出よう
家がそこにある踏み切りで待たされる
男と女シーソーをぎしぎしと漕ぐ
一蓮託生　頭並べている目刺し

高知市　北川　竹萌

小細工で世の中狭く住む男
朗らかに俺は正攻法でゆく
大根を人並に蒔く好季節
酒供養　帰りの道のまるい月
許された二人に月がまんまるい

高知県　赤川　菊野

憧れはパールバックを読んでから
新しいドラマに出合うパスポート
アクセルとブレーキ交互に幾山河
愛された記憶も遠い朱の裏地
返り血を浴びる覚悟で矢を放つ

北九州市　梅田宣司

もうあとがないぞないぞと蟬が鳴く
もう一人の俺が一番気にくわぬ
ほっとしたらしい満月が欠けてゆく
一灯を残して闇を深くする
大正を脱皮出来ない自我がある

福岡市　横地東川

護摩を焚く読経柱も焦がさない
五十年遺族の家を一人継ぐ
汗を君拭かねば停年浮き上がる
祈らねば老いては叶わぬことばかり
七十年母校で桜だけに会う

唐津市　田口虹汀

不能とは凱旋門が言わせない
選句終えて同人の苦と安らぎと
一本の糸が命よ博多独楽
あふれ出る大銭小銭ボランティア
人間を信じて馬が従いて来る

唐津市　久保正剣

ペアウオッチ夫婦茶碗と違うペア
大臣の失言妻も同意見
ムルロアの波を騒がす核挽歌
若い寡婦　翼の生えた靴を買う
ニュールックお前のヘソは見たくない

唐津市　仁部四郎

いもづるを一皿として終戦日
生煮えの不戦決議も噛んでみる
地球儀は正面ばかり見せ回る
バスツアー護国神社は教えない
きっちりと着て美しいユニフォーム

唐津市　浜本ちよ

丹精の青梅亡夫に話しかけ
ブランドを張り込み容姿元のまま
夫頼り子や孫頼り女老い
新聞は先ずはクイズを解いてから
何不自由無いが白髪の増え続け

大阪市　津守柳伸

SLにポーズ津和野の鹿威し
蜩ととても風雅に鮎の骨
中流で外国産の土瓶むし
青空が招く朝寝も魅力です
秋風へおしゃれセンスが堰を切る

大阪市　町田達子

エアメール山の空気に触れている（スイス）
世界の美石　今日は私によく喋る
掌に受ける水晶のパワー
往き来の顔みんな優しい彼岸寺
嵯峨野路に秋燃える日もやがてかな

大阪市　井上白峰

千羽鶴いまだ一羽も羽搏かず
趣味一つ持って病苦に耐えている
散り際の美学を知らぬ水中花
子の意見理解はするが気に入らず
妥協することを覚えて老いていく

大阪市　小糸昭子

お母さん家風は二人で作ります
家風には合わぬが孫を生んでくれ
小簞笥に内緒話を詰めておく
もう傷はつけずにおこう余生なら
たこ焼をつまんで余生論じてる

大阪市　河井庸佑

足るを知り分相応と欲出さず
人間の脆さまざまざ見せつける
勢いで越せない厚い壁に遭う
待つことの出来ぬ男で落ちた穴
衝動的動き掌中の玉落とす

大阪市　本間満津子

しばらく間　ぽっつり　ごめん　それで済み
優しく呼べばやさしく返りくるこだま
そやそやでないと変人やと言われ
天寿全う紅葉静かに地にかえり
どこか遠くで蟹の季節になりました

大阪市　上田柳影

淀の川　水の彩から秋深む
年金を支えに父の句三昧
肩書きがひとつあがった顔の艶
一二〇キロで走っていた殺意
明日への支えをくれる縄のれん

大阪市　板東倫子

奥の手は勝手つんぼと言う保身
すぐ寒くなるのに秋の情が好き
夫婦別姓　家族とは何だろう
狡さかな妻に反発せぬ男
優雅とは哀し江分利満氏逝く

大阪市　清水利武

犯罪の後へ法律ついてゆく
ロボットに代わってほしい夏夜勤
胃癌との戦に負けて戦友は逝く
平成に鬼より恐い人多し
核実験　日本外交無視される

大阪市　藤田頂留子

こおろぎに本を読めよとすすめられ
まん中と当人だけが思いこみ
おもわくが火花をちらす会議室
決心のかたさで親をだまらせろ
スーパーも衣裳貸します七五三

母形見浴衣が似合う年となり
真四角な楷書ばかりの父の筆
パン跳ねてコーヒー入れて今日動く
盆灯籠　亡き父母の影通り過ぎ
耐えること覚えて孫は社会人

堺市　柿花紀美女

関白を隅で守っている平和
燃えつきた顔を残して妻眠る
おいと言う視角にいつも妻がいる
よそ行きの言葉で妻が切るたんか
ユニホーム二軍の汗は見てくれぬ

堺市　一瀬福一

浴びるほど薬のんでも電池切れ
横文字が溢れ日本は植民地
帳尻が合うか合わぬか腕次第
大台を割ると殺気が満ちてくる
二兎追った訳ではないが何もない

高石市　浅野房子

古希過ぎて告白を聞く同窓会
お役人扇子を閉じてノーと言う
風鈴をうちわで鳴らす熱帯夜
一言を言えば薬のひとつ増え
知ったかぶり仕入れの元の耳学問

豊中市　井上直次

グローバルになって松茸食膳に
ファックスで孫が漫画を書いてくる
ようやくに軌道に乗ったわが余生
ハイリターン　ドイツ国債買うてみる
体力があるから困る痴呆症

豊中市　月原方郎

炎天を怯まずに行く好きな道
風鈴に母の想い出話し合う
老齢のはしゃぎを見せて百日紅
年寄りの居眠りをする夏の葬
ぬか漬の茄子でよろしき秋になる

豊中市　三宅つえ子

政治家は無味乾燥の絵空事
国力もあふれぬほどが丁度良い
子の無理を嫌な顔一つしない母
もう久し星空を見たこともなし
山門がぎいっと閉まって夏終る

池田市　岡本吉太郎

自分より人が気になるお人好し
気にしてた墓まいりすみ秋近し
なるようにしかならないと思う日も
手探りの残務せいりにノイローゼ
夫と子の分まで生きると思う日も

箕面市　坪田紅葉

相続の絡み冷たい他人顔
僧籍も今はグルメの舌を持ち
子は巣立ち夫婦二人に猫と住み
本籍は異国となった孤児悲し
損得を言えば押せない保証印

箕面市　椎江清芳

蛍火ほどの想いを残し夏ゆきぬ
机拭いてさあスランプを立て直す
若い日の視野狭窄のある机
濁っても大河堂々たる流れ
私の影は意外に弱虫だ

吹田市　山本希久子

戦争を知る知らないに深い溝
地球より国家こころは五大国
老人の映画見つめる目はわが身
秋は秋　誘いのかかる京都 奈良
好きなことしてるから元気ですハイ

吹田市　瀬戸まさよ

大町に涙と怒りで祈る朝（龍彦ちゃんの遺体捜索）
前ぶれのこの一筋が秋の風
お供えはいちじくばかりつづくなり
申しわけに咲くちさき花ほめにけり
手術したもの二人　墓詣り

吹田市　栗谷春子

汗うれし夏の伊吹の八合目
二十一世紀マルチメディアで句を創る
戦争も核も理屈が多すぎる
あの世でもう評判のミッチー節
駆けっこはいやでも孫の参観日

茨木市　井上森生

波風も立たず笑いもなく二人
人生の終りに近くおつきあい
呆けたら亡母を訪ねて歩きそう
無人島に行くわけでなし旅支度
倶会一処うれし私もお仲間に

茨木市　島元ふみ

住み慣れた巣に手を振って門出する
米研いで明日も強く生きていく
努力とは何だ昔の物語
目覚しはいらぬ早寝に早く起き
表現のらしいに心晴れ曇り

高槻市　井上照子

ヘソ整形　学割のきく時代とは
どう見てもこれは私に遠い味
月見団子　予約してくる下戸の夫
台風のこぬ心配もありにけり
タクシーをためろうている月の道

守口市　結城君子

寝屋川市　柴田　英壬子

傷温む年々歳々いわし雲
中天に満月おわします安堵
愛はガラスしっかり摑みすぎて割れ
本に倦いて蘇州の唄を口ずさむ
本番の香りひらかた菊人形

寝屋川市　堀江　光子

老いらくの今日も目先の事許り
転寝へ誘いのかかる盆踊り
滝の汗　絹のハンカチ役立たず
わが姿重なり見える火取り虫
萩を描く誘いそろそろ心待ち

枚方市　海老池　洋

五十年前は団扇で耐えた夏
残念の形で帰る影法師
灯の欲しい生きる道死への道
紙コップ程度のお役ならたてる
風景画ここに苦しい島暮らし

東大阪市　森下　愛論

束の間の蟬に早起き迫られる
揺れ動く心へネオン追い打ちす
大ジョッキ泡の小言もグイと飲み
賞罰ナシゆったり棺には入れそう
饗鑠と八十路へ歩く万歩計

東大阪市　指宿　千枝子

ふるさとは台風銀座されどよし
初恋に破れ姉さん嫁き遅れ
街路樹よおまえも森が恋しかろ
りんご梨かじったあの日もう来ない
ひまわりの花見ずに夏終りけり

交野市　福崎　しげお

無人駅降りれば旅に出た気分
心地よい錯覚夢はまだ若い
千鳥足　踏み絵のような水たまり
老骨が燃ゆる敗戦体験談
継ぎ足してわびし老醜恋談義

藤井寺市　田中　透太

柘榴の実はじけてからの運不運
泥水の味を知ってる喉仏
矢印の通り歩いて損ばかり
気休めにかけた電話でもめている
お隣はどんな人かと聞かれても（マンションへ引越し）

藤井寺市　福元　みのる

言い勝って見ても淋しい老いの背な
近道をして怠けた分を取り返す
空っぽの灰皿今日も未帰還か
留守番の好物先に買う土産
嫁の手紙の余白は孫の絵で埋め

藤井寺市　中島志洋

福耳に暗いニュースが多過ぎる
再会の二人短い秋夜長
信じていいのですねと念押され
円満に見える夫婦の裏ばなし
旬の味熱燗添えて差し向い

松原市　玉置重人

不言実行そんな男にあこがれる
夕顔がぽっかり暑うおましたな
便利屋のようにお父さんお父さん
善人の悲しいほどの一本気
冷蔵庫のぞけばどれも胃に悪い

八尾市　吉村一風

店開き先ず水撒いて笑顔から
いつからか小魚逃がす釣りを真似
花の色鮮やか嘘はひっこめる
仏だんに話ない日の二三日
光ることなく定年を惜しまれる

八尾市　片上英一

ドヤの街くにを浮かべるコップ酒
元祖だすうちが本家やいう暖簾
じいちゃんが乃木大将になっていた
瓢吉よワセダワセダに燃えた日よ
温泉や羅漢羅漢や雲の峰

八尾市　高杉千歩

母の忌へ瀬戸大橋は霧しぐれ
蘭の精　画布に匂うて秋深む
因習に泣いた昔が糧となる
終列車　百のドラマが眠ってる
大正の生き残りです姥月夜

八尾市　宮崎シマ子

コスモス色に染まっている野の小径
震災にも酷暑にも耐えひがん花
軽くいじめて夫の老いをくい止める
口あけて寝てます心配ないのかな
老兵に敵も味方もない酒だ

岸和田市　芳地狸村

ローブ借り女モスクの顔になる（クアラルンプール回教寺院）
ザビエルの像が哀しい教会跡（マラッカ　セントポール教会）
サルタンの誇りが光る装飾品（ジョンホールバル王宮）
背中しか見えぬマー様拝んでる（シンガポール　マーライオン公園）
旅四日　日本料理がなつかしい（シンガポール和風料理店）

岸和田市　高須賀金太

息を抜くコツがなかなかつかめない
考えがまとまり出して秋静か
アバンチュールそんな勇気はありません
日本刀のようにサンマ光ってる
千手観音　無駄な手は一本もなし

岸和田市　原　さよ子

自信ある答えは歯切れよく弾む
計算のないかあさんの温かさ
古希になりまだ喜寿までの夢を追う
古希きてもだんじり祭り血が騒ぐ
あこがれの人の面影抱いて古希

岸和田市　古野ひで

この山を越えねば明日が始まらぬ
残暑きびしひとり暮しの冷奴
お隣の仔猫にじっと見つめられ
澄み渡る空へ心も晴れ渡り
果てしなく戦友偲ぶ亡父でした

岸和田市　寺田甚一

放言陳謝だんだん日本なめられる
嫁姑二足草鞋で気をつかい
思い出のメロディー歌手もともに老け
折々に活入れに孫やって来る
年金でお酒が飲める有難さ

岸和田市　島崎冨志子

まだ童話信じる孫とよい月見
秋の味　中国産の松茸で
聞き流す言葉を風が押しもどす
泉州の子亀　元気に波に乗る
倖せな話は耳にためておく

富田林市　片岡智恵子

恋さ中　受付嬢のいい笑顔
衝動買いしてストレスが倍溜まる
平均寿命のびてふたりの余命表
泣きたくて泣けぬ男の乱れ打ち
子育ての小わざ裏わざママの日々

河内長野市　井上喜酔

駅の雨ご親切にも妻の顔
あの風がまさか事件を起すとは
空腹をたっぷり味わう二日酔
落ち込むと無口になって骨が抜け
飛び込んでいくのは母の胸ばかり

和泉市　西岡洛酔

ブランドで構え世間に疎まれる
マイペース唯それだけで陽が落ちる
ウーロン茶　下戸隅っこでかしこまり
万歩計　今日のピエロは勇ましい
スランプの日々文机に埃積む

大阪府　八十田洞庵

暁闇の地球に鬼火迷うてる
執念の核に地球はこわれぬか
海に出てあっさり彼を許せそう
碑の下から怒る声を聞く
亭主運ボクの妻からどう見てる

堰を切る残った命語り合う
八月十五日北の浜辺で石を積む
羅漢堂出れば現世の陽が匂う
背の丸さ哀しき限り影といる

弘前市　一戸ツネ

倖せが大きく鼾掻いて居る
瀬の音と流れて心澄んで来る
師の言葉　何時いつまでも胸に住み
友がまた河の流れのように逝く

弘前市　蒔苗果林

方便の嘘も男の処世術
陰口に治まりつかぬ腹の虫
頓首して詫び状を書く団子虫
コップ酒　泣き笑い浮く人生譜

弘前市　岡本花匠

夏バテで緩んだタガを締めなおし
したたかに飲んでかいてる大いびき
招かざる客に予定を狂わされ
才能は自慢するほど色あせる

十和田市　阿部進

富士と住む老夫婦へ温い故郷だより
時の流れいのち大事に老いふたり
FMのコーラス森に聖らけく
ピカソと魁夷　青の世界が火花する

富士宮市　渥美弧秀

風鈴のガラスの音は透き通る
瓦礫地で蟬が鳴くからなお暑い
公園に孤独を埋める椅子がある
墓そうじ一部始終の詫びを言う

西宮市　菊池トミエ

水少しあれば暮せる日々だった
舞い終えて柔らかく手のひら伏せる
突然の雷鳴　天が地に落ちる
亡兄の夏　五十年経っても終らない

芦屋市　黒田能子

遺産なぞ息子の代に脆く消え
ハンサムより話術のうまい人がもて
蓋とれば亡母と語れる梅の壺
老醜を見せぬ女優の逞ましさ

伊丹市　小熊江美

右肩の上がる思想が抜け切れぬ
包装は簡便が良い美辞麗句
追憶の糸口見つけた冷し飴
曖昧と言われてもええ大阪弁

川西市　松本ただし

雨足を下に眺める峠茶屋
病妻の世話する薬当てにされ
病む妻の介護の恥部へ未だ女
居眠りをしても昼寝の出来ぬ俺

大阪市　北勝美

少年の夢を果した特攻隊
裏切らぬ愛に抱かれてまだ生きる
鶴橋と分かる匂いが鼻にくる
日の丸の罪が重たくなってくる

大阪市　寺井東雲

名月を湯舟に浮かべ虫の声
酒タバコ飲まぬ来客肩がこり
覚えたてマイク通せば歌になり
ハイキング飽き凝り出した富士登山

大阪市　松尾柳右子

一人言自分に言うて寝る時間
夏ばての予防大事と食べ過ぎる
澄んだ目に嘘があるとは気がつかず
お若いと言われただけで有頂天

大阪市　玉置英子

借金をカンフル剤にする夫婦
体力の測定きっちり年齢が出る
新米で茶漬さらさら秋平和
年金が付く還暦が来てしまい

大阪市　川端一歩

難聴の耳がこそばい褒め言葉
身の内に言うことときかぬ皮下脂肪
ディナーショー果てて一人の灯に帰る
寡婦四十七年　人生とは女とは

大阪市　稲本凡子

植えられて若木の楠の楠らしく
収入がへってそろばんまでにぶり
反省はまずしていない速い風呂
披露宴　照明あびて姑となり

大阪市　渡部さと美

台風の目の中すっぽり繭の中
時折は水の揺れ待つ水中花
麻原が写ると私　目をつむる
春がいい秋の別れは辛すぎる

大阪市　大河未佐子

蓑虫になりたい時もあるくらし
水屋裏　夏のごきぶり枯れている
運動会　子のVサインあちこちに
老姉妹にぎりはわさびぬきにする

大阪市　奥田良子

伸ばすだけのばした髪を切る転機
煩悩が写経の筆を進ませず
今更に父母の在さぬ夜の星
銀行の崩壊　薄氷をふむ思い

堺市　黒田真砂

似た声にふとふりかえる墓まいり
秋の夕陽ぽとんとおちる瀬戸の海
高松のビルのはざまの屋島かな
満濃池の讃岐山脈のんだいろ

堺市　近藤豊子

今は平和こころが少し寒いだけ
警策の音はあなたの返事だろ
赦されてそれから深い罪になる
うちの子に似た声がした夜店の灯

堺市　山本半銭

終りがまた始まりになる四季の彩
悲しみを包み直して秋の空
うれしさは秋の味覚と仲よしに
コスモスの揺れと遊んで庭掃除

堺市　中野欅子

虎の威を借りバンザイで締めくくる
坊さんとそろそろ仲良くしておこう
貝集め一つ拾って一つ捨て
神様も時々見てる金の音

豊中市　江口明光

枯れるには間のある尼とお茶を飲む
満月に人魚の群舞　黄金の波
いいですかきみのとなりにすわっても
六年後　金婚式で新世紀

豊中市　滝北博史

ふる里は北斗南斗も顔を見せ
荷車の歌の里にも軽トラック
法師蟬　宿題せかす母と子に
定型は郵便だけが定規あて

豊中市　湯浅馬洗

御近所にも聞かす風鈴軒に吊る
温泉も酒も薬の楽しい夜
起き抜けに朝顔の花先ず数え
暑い窓に置いて涼しい夏すみれ

豊中市　稲葉眞郎

山たのしこんな実もあり花もあり
デパートのお鍋売ります料理法
松茸も新鮮味なしどびんむし
初孫さんの泣き声がする隣から

豊中市　辻川慶子

地も海も汚されたまま秋に入る
笑わねばさびし笑うとなお淋し
ベランダのカミキリ虫を値踏みする
さるすべり傍の会話は美しい

豊中市　吉田あずき

読むのんはしんどい捨てるのん惜しい
恥ずかしさ素面で妻に礼をいう
ひっそりと老いひとり逝く看とられず
風車　秋風見せる秋祭り

箕面市　岩津ようじ

くださいな乾く心にモデラート
ポケットに小銭　散歩に寄るお宮
恙ない暮らしに文句言う不埒
背丈伸び孫レッスンへチェロ抱え

吹田市　茂見よ志子

茨木市　堀　良江

よい歌がたんとあったね幼い日
月まつる母の居ませしときのまま
このつらさ明日の今頃終ってる
根まわしのその根まわしがあったとは

茨木市　藤井正雄

扇子ばたばた乗り気のしない話聞く
情報過多仕分け上手な美人秘書
メロン切る決断をする客が来る
盆踊り団扇をつけた寄付がくる

寝屋川市　平松かすみ

誕生日同じで元気うれしがり
外出の夫へどうぞごゆっくり
お嬢様ですかとインターホンから
電話なら便利　奥様お留守です

枚方市　二宮山久

決断へ必ず妻の意見聞く
子育てもおえてしばらくない喧嘩
嫁がせた娘の部屋に一人いる
嫁がせて息子と慣れてきた暮し

枚方市　前たもつ

かまきりのあの落ち着きはなんだろう
胸に森　育たぬままで老いてゆく
森林に水滴落ちて誕生日
一本のこよりに殺意感じる夜

東大阪市　安永暁子

プレゼントに花言葉よし不如帰
急ぎ足　夕餉の菜を地下で買う
根回しの口裏合わす悪巧み
違和感はないとは言えぬ義歯の白

八尾市　山下美津留

乾杯を派手にしといてすぐに消え
子も甥も就職地獄抜け出せぬ
母と妻　姉妹のような行楽日
新名所「ミオ」を見に行く天王寺

岸和田市　岩佐ダン吉

莫山の反骨の筆　真似てみる
敗戦に悔いなし頬もゆるんでる
変節のたんび萎れていくようだ
公的の資金うちにもくれないか

岸和田市　藪野けい子

闇の中　福を求める善光寺
悠々と趣味に生きて平穏に
ダイエット食欲がありあしたから
我が町に破たん銀行みぢかなり

岸和田市　三輪通彦

世話好きで苦にはならない多事多忙
老いてきて顔も動作も亡父に似る
百歳を生きて屈託ない笑顔
首相から五十年目にお詫びする

岸和田市　田中文時

医者の身で害を承知で吸う煙草
ガラス張りでは死金の接待費
通販でなけりゃ手の出ぬ本がある
年老いて妻を亡くした背の丸み

岸和田市　井齋一齋

一本のネジの緩みをネタにされ
金貯めて極楽浄土に行くつもり
捨てた村祭り太鼓が気にかかる
手綱まだ緩めちゃならぬ人がいる

富田林市　松本今日子

もう秋だ秋が来たよと通販が
内閣改造　我が家は何等変りなし
故郷を持たぬ私の気らくさよ
雷鳴と仏に触れ合う高野山

河内長野市　植村喜代

ほめられて金木犀が匂いたつ
釘一本抜けたからとて慌てない
耐えたからと誰も喜ぶものはない
サイパンは旅で覚えた若い娘等

和泉市　岡井やすお

危ないと感じながらも高金利
就職難おれも苦労をしたと父
バテ達磨起き上がらせる秋の風
五階良し今日も足腰鍛えられ

大阪府　籾山隆

ハンガーにだらりとしてる父の服
すぐだせる個所に名刺は入れておく
メルヘンの世界に遠く人面魚
アカシアの匂う大連　訪ねたし

京都府　稲葉冬葉

新駅の駅長さんはそっくりさん
完璧な人は居ないと茶を啜る
私をやさしくさせる萩の花
名月やひとり見ている摘み食い

奈良市　天正千梢

男やもめ片づきすぎてかなしいな
明日を信じ歩き続ける万歩計
三六五日　顔色替えているお山
孤独なポストだよ栄転と言われても

大和郡山市　坊農柳弘

恋破れ月下美人と差し向い
煩悩を断ち切れなくて一人旅
人生のフリーキップへ喜寿の坂
年上の妻もいいのは若いうち

和歌山市　福井桂香

太陽を恨んだ樹から立ち枯れる
バルサン焚いてアウシュビッツもかくあらん
恋人も郵便受も白いまま
合鍵が少うしずれてきて夫婦

和歌山市　宮口克子

その理由触れずお酒を酌いでくれ
後戻り出来ぬ吊り橋よく揺れる
あなたとの仲がだんだん遠くなる
言い分はある狐にも狸にも

和歌山市　細川稚代

疑似恋愛繰返してるナルシスト
釈然としないがお茶にしませんか
懸命に生きた歴史を持つ寝顔
ちぎり絵の色褪せてきた清展

和歌山市　岩本美智子

鼻の差でクレオパトラになれぬ孫
生きた証のこしたくあり残したくなし
入退院　弱音はかずに月仰ぐ
手弱女を弱いとおとこ思いこみ

和歌山市　田中みね

こんな時　友の支えがある強み
結局は出番もなくて会終る
長電話　猫が呆れて背伸びする
こう見えて意外と出来ぬ口答え

和歌山県　西口忠雄

呱々の声やれやれチンコでよかったわ
つまりそのこうしてああしてこうなった
ダンス好き奥さん他人に抱かれてる
筆持てば僕は明治で御座候

岡山市　花田たけ志

平凡な暮らしに出番は降って来ぬ
お願いの笑顔が肩にのしかかる
正直者　怒らせている泳ぎ下手
危なげがさっぱり見られぬやわらちゃん

倉敷市　井上富子

体質改善　僕も女房も肥満体
故郷へ私を繋ぐ墓がある
ドライバーへさわりとくねる萩の花
閉経期　女の壁が堕ちてゆく

岡山県　小林妻子

不況ひしひし折れない箸を削っとく
お地蔵よ今に野菊が咲くんだよ
どの罪のおしおきだろう白内障
老人の眼鏡に助成金がある

岡山県　矢内寿恵子

コスモスも芒もゆれる我が挽歌
種なしの葡萄確かな主義をもつ
活年の自負鮮やかに絵の具皿
公約はご破算でしたダルマの目

岡山県　池田半仙

雷が補聴器の邪魔して困り
病窓で見るは四角い景色のみ
ぼやくからぼやき返して論になり
九月風少し秋の味がのり

岡山県　岩道博友

能力を試す一石投げてみる
旅行プラン昔話が釣り合わず
責任転嫁　備考欄が空いている
戦後五十年　遺髪の形見も埋められる

広島県　田村新造

夜の寒さ興安嶺に風渡る（興安嶺逃亡記）
投降の白旗ならぬ汚れシャツ
黒河脱走口が裂けても洩らすまじ
捕えられ道が開けたのも運か

鳥取市　岩原喬水

カラフルな下着女神になったよう
五十年　大和魂まだ消えぬ
音頭とり肌に火の粉を浴びている
老化して煩悩だけはまだ燃える

鳥取市　前田一枝

年毎に親戚の顔減って来る
ポケットに彼の温もり隠しとく
若者の陰で年金生きてゆく
人違いすみませんではすまぬ顔

鳥取市　西村黙光

老化現象お茶だお菓子だ排泄だ
久しぶり雨と会話を欲しいまま
まに受けた単細胞の勇み足
秋の天　呑ん兵衛たちが姦しい

鳥取市　美田旋風

喜怒哀楽を体重計に知らされる
夏の夜の花火　仏も見て帰る
いやな過去　底に沈んで水が澄む
つまずいた石が座右の銘となる

倉吉市　野口節子

思いやる心で埋める世代の差
御隠居さん庭石だけを褒めて去ぬ
人形になれぬ真っ赤な血がさわぐ
世渡りににがい薬も飲まされる

倉吉市　米田幸子

ああ無情オウムの牙にひっかかり
残り火がくすぶり合っている余生
土用干し亡母の小袖がしゃべり出す
雨風を凌ぐでっかい父の傘

米子市　寺沢みど里

持ち慣れた袋とかるい旅に出る
街路樹の切れた辺りで折り返す
ゆずれない位置で羽織の紐結ぶ
盆送りその後味の置きどころ

米子市　菅井とも子

通院の顔が揃った旅行前
本場所を見てから相撲のめり込み
朝の顔たしかめながら鏡拭く
赤い羽根つけて募金箱を過ぎ

米子市　田中亜弥

秋ですよ煮豆コトコト火にかける
迷路の僕に影不安げについてくる
屋根裏の亡母の簞笥をまだ愛し
順番に番号札をわたされた

米子市　茂理高代

根から出た噂葉ばかり切らないで
濡衣を干せばピンクの色になる
秋風が母の匂を連れてくる
秋の夜少し淋しく月を見る

鳥取県　太田幸枝

深手おい涙も出ない血も出ない
涙もろい男毒舌ばかり吐く
ロウソクの揺れで仏と対話する
眠るまであれこれ明日の事ばかり

鳥取県　幸家単車

望むなら地獄の途もガイドする
湯煙の中から魔女が招いてる
香煙に遺影の父が笑みもらす
ぜいたくなペット香水つけている

鳥取県　西川和子

出後れた花に実りの秋が来る
まあまあの出来に乾杯しています
合掌をすればやさしい風に合う
明るさが取り柄ころころ世を渡る

鳥取県　石尾かつ乃

スタートした頃はライバル居なかった
なんとなく体が動く朝の気温
体力と時を無にして終電車
手枕に浅い眠りの風が吹く

鳥取県　黒田くに子

いい返事貰ったらしいいいお顔
口紅をぬるおばあちゃん楽しそう
楽しいことにまだまだ畑作れます
健忘症　夫の忌日は忘れない

出雲市　板垣夢酔

同類で慰め合っているお酒
連結器いたわりあって雨の旅
海　黒くなって音から咲く花火
吹き出した汗がうまいと言うビール

出雲市　岸桂子

あと幾日と思う身内がなおつらい
夏萩が頭を垂らす葬の庭
世の乱れノストラダムスが蘇る
一雨がほしいと思うネギを抜く

出雲市　小白金房子

涼しさへ明けし墓参の花手桶
怠けてはいないが雑草せき立てる
苔を着た地蔵と語るもみじ寺
真直ぐに生きて大きな陽を拝む

出雲市　久谷まこと

子の為に尻尾出してるかくれんぼ
落ちこんでいるから笑顔欠かせない
心変りしたか乱れる蟻の列
器量良し素顔は鏡だけに見せ

出雲市　小玉満江

聞き流すつもり心はなまり色
腕時計はずし静かに心電図
お茶うけはやっぱり団子を先に取り
秋風やバーゲンの服似合わない

島根県　堀江芳子

誕生日　八十三はもうほろり（正朗誕生祝）
暑さには負けぬつもりでいたカルテ
声かけてもらう嬉しさ歳思う
血液の浄化　腹など立てぬよう

香川県　工藤吟笑

練塀で囲み人情うとく住む
急がねば何かに追われそうになる
米作り男に野心などはない
明日吹く風にあまえた罰当り

香川県　山地マツヱ

初孫に小さくなってる愛煙家
金策が駄目だったらしい靴の音
北の地で祖国を恋うた敗戦記
娘の秘密匂う日記の頭文字

香川県　新川マサヱ

縄電車　夕焼空へ発車ベル
骨粗鬆　歩け歩けと追られる
盆の客　帰りは手作りシソジュース
弟の若葉マークの横に兄

松山市　宮尾みのり

意志表示せめて座布団裏返す
5の並ぶ子だった今に案じられ
3と4の子でいいママになっている
エプロンのままの奇遇で繕えず

今治市　野村京子

炊きたてのご飯ふっくら妻に似る
人を指す癖の右手でポケットへ
ピーマンの顔に似ている羅漢さま
そして秋　髪　栗色に染めました

高知県　小澤幸泉

父の夢見事に破り息子の船出
要するに眠り足らぬと言っておく
核と老い神のみ業か悪戯か
沈黙の青春まだつづく息子は二十歳

（前月分）

鳥取県　西浦小鹿

明日までの距離をはかっている夕陽
お守りにグラウンドの土持っている
虹までの距離をはかっておきましょう
深海魚あつめわたしを照らし出す

自選集

虫すだくひとりの旅路　山の宿
がら空きの駅に落ちてた週刊誌
鐘の音に茶店も仕舞い支度する
飛石が少し濡れてる秋時雨
大声で話す声飛ぶ魚市場

黒川紫香

弥次郎兵衛ゆれ人間の弱さ知る
速球で勝負エースとしての自負
妻の度胸でわが家のピンチ救われた
竹踏みを日課に欲のない余生
町内の雑務　余生を追って来る

小西雄々

明日はいい絵が描けそうな夕日落ち
歩き初め母が手を添え笑顔添え
竹槍と大和魂では勝てぬ
安物とわかる香水匂わせる
やまびこが期待どおりにかえらない

小林由多香

多情仏心　蟻を踏みつけないように
人ぎらい　だから人にも嫌われる
悪口で試されている老いの耳
歳月や娘が亡妻の齢を越す
へそ曲げて向日葵　顔を陽に向けず

工藤甲吉

旅に居る夫は今日を知る遊び
秋静か根来の山は静である
マヨネーズかけたら食欲だけ進み
米の値を一番知ってるお隣さん
気がかりな女が知ってる秋の雲

児島与呂志

川上の流れも葦は気にかける
鈴鳴らしつづけて桃はどんぶらこ
流れ着いた桃に運命変えられる
流れ流れても水草にある絆
流れながら海へ手紙を書いている

八木千代

漫画家の手塚治虫に魅せられる
平和への決意シベリア捕虜が言う
五呂八の百年記念のうた作る
健やかに老いることだけ考える
川柳に手塚治虫を入れて読み

奥谷弘朗

躊躇うてもたつく足に気付かない
両脇を支えてくれる手に甘え
秋更けて五体は満ちる音を出す
早朝の和歌浦五体満ち足りる
水平線円く五体を確かめる

野村太茂津

積立預金まだまだ生きているつもり
身体労われ有難しなさけなし
うやむやにせぬ律義さを辞めさせず
写真屋の自信一枚撮っただけ
褒められも頼られもせず独り生き

金井文秋

レストランもったいなくも食べ残し
戦後五十年今も覚えている軍歌
良い孫だ作句の時間寝てくれる
僕に似ず正確な腕時計
野球シーズン終わりテレビに用はない

野田素身郎

嘘ついた悔いが段々重くなり
その先を妻が話題を変えてゆく
恐れ入りましたと舌を出している
もう一本ビールが欲しい便りくる
お見合いへ親が気をもむ無口な娘

有働芳仙

ゆずられた席へ素直がまだ出ない
家計簿に詮ない義理を言いふくめ
はっきりと言えぬしこりが胃にたまる
手を抜いたことは誰にも言うでない
潮引いてどっこい人は生きている

遠山可住

空財布お守りだけは拝んどく
無差別に流れる若者にも困る
勤め出してから孫　酒好きの兆し見え
敬老が済めばいつもの年寄りの日々
国勢調査員　役目果した五十年

藤井明朗

嫁においでやさしい風が待ってます
敗者復活　私をひろう神がいる
饒舌な鳥に噂を盗まれる
安物の傘が音信断ったまま
正論を吐くと相手にしてくれず

波多野五楽庵

カタカナを飛ばし読みする事に慣れ
釣れなくてよし凪いでいる海が好き
ハイポーズ癖が斜めに空を見る
結論に達した顔で出るトイレ
軽々しく言うてはならぬさようなら

月原宵明

文字離れした若者のキーホルダー
無細工で清物石になる運命
脳髄を酒で洗ってるから惚けぬ
ぬるま湯の中で若者直下型
もう五勺今日もうれしいことがあり

恒松町紅

風呂敷を持ってる妻にたよりきる
浅漬けのすきな新家庭を思いやる
賽銭箱の音をむなしい音と聞く
高齢化という言葉に反発してる
コーヒーの香りをしばらくわすれてる

正本水客

反旗より笑い袋の紐を閉じ
理数科に長けてもオウムになるまいぞ
爺むさい仕草を孫に嫌われる
案山子とも知らず日暮れの声をかけ
口惜しさをバネに明日へ挑まんか

久家代仕男

賞品のボールペン皆干からびて
だんごもすすきも皆スーパーで
胃袋も肺も私と同い年
診察は至極簡単　俺も㊀か
入門書だけは沢山持ってます

松川杜的

幸せなことに後ろに眼がないの
しばらくはよい夢をみる陶器市
温泉の下駄に付き合い方があり
よい天気忘れた傘はわすれられ
花束を作るたのしみだけはある

小出智子

下町の風に生まれて風になる
この人と浦島になる遠い刻
いちにちの仕上げ日銭の新世界
銀行の看板赤く塗りかえる
オキナワの金網にいる青い鬼

高杉鬼遊

美辞麗句そんな祝辞は聞いていず
即決でオウム消せない法治国
何故私だけが駐禁挙げられる
政治家も賢い奴は喋らない
豊漁も過ぎれば油代も出ず

西田柳宏子

睦み合う心なごやか趣味の旅　藤村〆女

ガイドさん見えない所も説明し
艪の音によしきり鳴いて湖静か
ひとときの幻想を追う舟遊び
柿たわわ近江路の秋暮れやすし

増田竹馬さんを悼む

鮎二ひき夫婦のように描いたひと　橘高薫風

蜆汁膳も九月に入りけり
木犀と百米の匂いに居
もう覚悟出来たらしくて風呂へ行く
極楽も怖し出口はありませぬ

（前月分）

校庭にふたかたまりの蟬が鳴く　正本水客

泣きやんだ顔を走って見せにくる
白票を投じて投票所から帰る
よく笑う人だと別れてから思う
てのひらにのるほど軽い人でなし

よく聞けば諸行無常と蟬も鳴く　松川杜的

撃ちてし止まんゴキブリを妻が追う
棚経に合わせてろうそく首を振る
朝顔が凋み今日一日が終る
応挙展　幽霊の絵は見なかった

富田林市民川柳大会

と　き　**11月5日**（日）正午開場

ところ　富田林市立中央分民館
（近鉄南大阪線「富田林」から右へ100m）

宿題と選者（各題2句・午後2時締切）

「嫁　ぐ」　池　森子選
「裂　く」　波部白洋選
「美　人」　岩井三窓選
「　税　」　久保田半蔵門選
「男盛り」　梶川雄次郎選
「再　会」　橘高薫風選

会　費　2000円（大西文次なにわ柳壇百句集・色紙・発表誌贈呈）

懇親宴　3500円

主　催　富　柳　会

寝屋川市民川柳大会

と　き　**11月3日**（祝）正午開場

ところ　寝屋川市立総合センター4F

兼題と選者（各題2句・午後1時締切）

「　息　」　江口　度選
「　帯　」　河内月子選
「　力　」　岡　良三選
「　話　」　高杉鬼遊選
「　昔　」　森中恵美子選
「　森　」　橘高薫風選

会　費　1000円（秀句に賞状・記念品）

投　句　**10月31日**までに80円切手5枚を同封して下記へ

〒572 寝屋川市春日町9－9
高田博泉方　川柳ねやがわ

川柳太平記（210）

川柳の群像

亀山恭太

東野大八

「昭和36年の33歳のときです。私の仲のよい友達に山田白童という人がいました。住吉大社の一運寺という大石内蔵助の墓のあるお寺で、天野屋利兵衛の一族が建てたんだということですが、白童さんはその寺の住職の息子さんで、俳句の雅号がつまり白童です。

このご親戚に川柳塔同人の本多柳志さんがいられて、その方が川柳もやってみませんかといわれた白童に、ついてくれば飲ませるという約束でついていったのが堀口塊人さんのやっていられた川柳文学の句会です。

そのときのメンバーは近江砂人とか山田菊人さんとか偉い人が沢山行っておられた。岸本水府さんと塊人さんは、何かちょっと仲たがいされていたみたいですが、砂人さんとは非常に仲の良い間柄。さて生れて初めて行った句会なんですが、受付でみんな雅号を書いていられるので、前の人が『太』という字がついていたので、本名の恭三をそれにつられて恭太と書いたんです。これがついに終生恭太で定着してしまった。自分ながらいい号だし、傑作だと今も思っています。

その句会の席題は「運賃」というので、

運賃をこめてざるそば高くなり　恭太

と初めての句が入選、白童は全没でした。

この会で二十分ほど塊人さんがお話されたが、それがすごく気に入って、塊人調の句を『なめらか調』というんですが、これも気に入ったんです。つまり塊人さんは私の最初の先生ですね」（『川柳春秋』平成五年七月号・この人に訊く・亀山恭太から抄録）

亀山恭太、本名恭三、昭和3年8月27日大阪生れ。高校教師。前記が川柳作句に入る動機となる。「番傘わかくさ川柳会」同人を経て、38年番傘川柳社本社同人となり、副幹事長を経て平成元年二月から幹事長となり、平成5年2月まで『番傘』近詠選者となる。

昭和56年わかくさ川柳会から『川柳句集・出会い』を出版。平成2年10月胸部大動脈瘤の手術後、車椅子生活を三年つづけ、同5年10月6日逝去、享年六十五、法名柳賢院釈恭太。遺作に『川柳入門Ⅰ』がある。

筆者とは数度顔を合わせているが、初対面から意気投合、『番傘』旧本に〝堀口塊人を語る〟を眼にした直後だけに、なめらか調の塊人調の句と、難解な前衛川柳派批判で、明るい柳談のひとときを過したことは今だに忘れられない。

その折の柳談がそのまま第一句集『出会い』の中の、つぎのエッセイである。

「日頃よく使うやさしい言葉があるのに、好んで難解な熟語を使ったり、口語体でよい内容をわざわざ文語体の句にしたり、『泣く』の方がピッタリなのに、『哭く』と書いたり、『色』でよいのに『彩』という字を使ったり、そんな必要もないのに、『顔』と書かず『貌』と書いたり、どうも近頃、川柳を難しそうに作ろうと思ってる人達が増えてきたようであ

る。できるだけやさしい言葉を使って、小学生にも読める句にしたい、などと思っている。

啄木などは特別の例外で、明治以後の短歌や俳句では、難しいことばが常に使われているようである。子供の頃から短詩型の文芸は大好きだったが、なぜこんなに難しそうに表現せねばならないのか、いつも思っていた私は、現代川柳を知って飛びつくように入会したのは、その気どりのなさが、自分の好みにピッタリだと思ったからである。

ところが、今その川柳もまた短歌や俳句と同じ道をたどろうとしているのだろうか、シーザーならずとも、『川柳よお前もか』と言いたい心境である」（わかくさ昭和54年7月号）

さすが永年、市立生野工業高校で教鞭をとった、高校の先生らしいと、右のエッセイの趣旨を直接耳にして、こちら大いに共鳴して、どうも難解な前衛川柳派は、漢字の意味性にこだわりすぎる、と応じたことだ。

彼はまた先の川柳春秋の〝この人に聞く〟で、次のような作句のコツを披瀝している。

「塊人さんがお達者なころの句は、いまの句に比べるとみんな、なめらかですがね、『わかくさ』で教えをうけた木幡村雲先生の『見つけ』も大切なんです。この方と塊人さんのお二人がわたしの師ですが、その教えの基本は、『なめらか調』と『見つけ』が合体したのがわたしの先生でもありました。

村雲さんの句に

茶の稽古わが子におじぎしてよばれ

が、いわば『見つけ』の見本の句ですね。

モカとなら溶けて悔いなき角砂糖

も、村雲さんの有名な見つけの句ですね」

彼が達者で近詠選者になったころ、

「エライもん引き受けたな。あれは重労働だよ。早いことやめた方がいいな」

と真顔でいったら、あんたらしい言葉だよと苦笑したもんだった。右の対談でこの件について彼はつぎのように述べている。

「―誌友近詠の選をしていますと、毎月毎月全然上達されない方がかなりおられます。失礼な言い方だが、なぜこんなに上達されないのかな、という感じを持っていました。これは結局、言葉だけで句を作っていられるのじゃあないか、川柳とはこういうもんだ、と思っておられるんじゃあないか、ということから、つい選評のエッセイに『川柳が下手になる方法』というのを書いたのです。

これには五箇条あって、第一条は『教えたがりに習うこと』、第二条は『柳誌を見ながら句を作ること』、第三条は『平素他の柳誌を読まないこと』、これらはみな句作が下手になるだけです。第四条は『決断力を持たず、無難な句を作ること』、第五条『言葉だけで句を作ること』、以上が川柳が下手になる作句心得帖です。

近詠選をしていると、月並みという句ばかりがズラリと並ぶでしょう。没にするわけにはいかない。仕方なく採りますので、作者もこれでいいと思ってしまうわけです。だから毎月柳誌を見てもおもしろくない。無難な句ばかり並んでしまう。うちの息子がそこで、『父ちゃん、こんな句ばかり並んでてよう売れるな。もうじき川柳は滅ぶで』とこんなことをいう。思うにある程度、冒険が大事ですね。ちょっとあくが強すぎて、それで没になるぐらいのほうがパッと伸びます。読んで退屈するのは『見つけ』不足からです。水府先生は『スケッチ川柳からはじめよ』が持論で、好きだった古川柳は『鶏の何か言いたい足づかい』『れんこんはここらで折れと生れつき』、これが川柳だといわれていました。この川柳味が『見つけ』でしょう」（以上対談中要約）

地下鉄の風に四季ある勤め人　恭太

わが生涯と鍾乳石の一センチ　〃

まあそんなこと言うなよ僕も日教組　〃

昔の字ですと生徒に注意され　〃

▼次号は「**中島　国夫**」

柳籠裏三篇研究（二十七丁）

七久保博・岩田秀行・紀内恒久
西原　亮・瀬川良夫・青木迷朗
佐藤要人・八木敬一
鈴木倉之助　故岡田　甫

356　**恋の盗は大どふをこへる也**　雨譚

七久保＝「恋の盗」はひそかにする男女の逢引をさす。

この句では、遊女に間夫ができたが、元来は家貧しくして苦界に沈めた身、その間の借金を済まし落籍となると莫大な費用がかかり、長年月とても待ちきれないので、敵前逃亡よろしく脱廓したというのである。

首ッたけはまってどぶをこして逃げ　三四24

大どぶをこすのか今の芥川　天六和1

大どぶをひょいとして来たいい女房　天五天1

あのかかあ元大どぶも飛んだやつ　三九33

岩田＝「貧の盗に恋の歌」から、「恋の盗」という言葉ができたのかと思っていた。その他は賛。

青木＝賛。「大どふ」はオハグロドブならん。

佐藤＝賛。大どぶは青木説、つまり、大門口からの脱廓ではなく、塀を越え、大どぶに踏みこんで吉原田圃からの逃亡と思う。

八木＝同。本句、例句があるということは、実際オハグロドブを越える脱走があったのであろう。

鈴木＝賛。「大どふ」はオハグロドブ（当時この用語なし、明治になってからならん）です。

岡田＝同。しかしオハグロドブの名称は江戸後期に出て来そう。宿題としておきます。

357　**家根ふきも井戸掘もした堯の聟**　梅舎

七久保＝謡曲「堯舜」から詠んだ句である。舜は中国上古の伝説上の帝王で、儒教の聖人の一人とし、史記によれば、父が後妻の子象を愛するがゆえに、虐待されながらも、親に孝行したことが堯帝の認めるところとなり、二女を与えられて、後に王位についた。

やねふきも井戸ほりもしたみかど様　二三26

青木＝賛。堯の聟＝舜。

岡田＝賛。

358　**壱分で飛び上がらせる程わらひ**　雨譚

七久保＝遣手への祝儀金であるおきまりの一分を詠んだ句で、三会目には有無をいわせず引ったくられる慣行になっていた。

かんらからとぞ答ひける三会目　傍三1

壱分の金があれ程におかしいか　玉6

青木＝賛。

一トたび笑むと壱歩取る婆ァなり　天五春2

八木＝賛。実際は三会目まで待たないでやった事も多かったようだが、川柳では三会目のようだ。

岡田＝賛。

359　**野がけ道家をさがして火をかりる**

七久保＝「野がけ」とは、現今行われるピクニックのことである。

主題句はその一風景で、一服しようと思ったが、あいにく火の用意をしてないので、近くの農家にとび込んで「すみません、どうぞ火を拝借させて」と頼んだのである。我慢出来ぬほどめったに吸いたくなったのであろう。

すい付けてけむをいただくのがけ道　二20

青木＝賛。当時は火打石の火を蒲の穂に点火させるのだが、点火させるまでがなかなかに容易でない。外出時の喫煙は専ら火を借りるより外なかったのであろう。

たれながら火をかして居る野がけ道　篭三8

鈴木＝賛。昔の道中で一番苦になったのは時刻とたばこの火であろう。

野かけ道けぶを出し〳〵一人かけ　明五松1

吸付けて連れにおつつく野掛道　明三桜4

娘の火借りて野掛のやかましさ　明六桜2

岡田＝賛。

360　**まつすぐに言ッて貞室落をとり**　雨譚

七久保＝吉野山での貞室を詠んだ句。「落をとる」の落ちは好結果の意で、見物人などに受け、拍手喝采をあびること。

松尾芭蕉も『笈の小文』の中で「かの貞室が是は〳〵と打なぐりたるに、われはいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたる、いと口をし。おもひ立たる風流、いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり」と残念がっているのでも、貞室の句がいかに素晴らしいものであったか判るのである。

青木＝賛。安原貞室の、

これは〳〵とばかり花の吉野山

を踏まえた柳句に、

おれハ〳〵と斗むこ花の山　天六仁2

佐藤＝賛。「まっすぐに」は、一ひねりして技巧を加えぬ意か。感嘆した気持をそのまま口にしたごとくの意でしょう。

鈴木＝賛。「まっすぐに」佐藤兄のおっしゃる通り。

岡田＝賛。

361　**大工来て雪をかひてるきうな事**　素鳥

七久保＝大降りの雪にあって未だ建て始めの屋根がポシャリゃしないかと心配で駆けつけ雪かきをしている様を詠じたもの。

岩田＝小生、座敷牢と解していました。雪の居続けに業をにやした親父とうとう出入りの大工を呼んで座敷牢の算段。仕事の足場にまず雪かきというのは、チト、うがちすぎの気もするが。

雪かきでぶつとむす子ハ傘でうけ　七20

瀬川＝礎稿に賛。あるいはすでにポシャリときたとも考えられるが。

佐藤＝岩田説に賛。息子は吉原で雪の居続けという状況を諷す。

水をもる程雪をかく急な事

雪の朝親仁大工につもらせる　宮四17　五一24

岡田＝同。座敷牢。

阪神文芸祭作品募集

資格　阪神7市1町に在住または本部を置く会に所属する方

作品　川柳（雑詠）1人2句以内

投句　投句料1000円を添え、11月30日までに、尼崎市東難波町5—21—8　文芸祭実行委員会へ

秀句鑑賞

同人吟　波多野五楽庵
―10月号から

智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角に人の世は住みにくい。夏目漱石「草枕」の一節だが、句会選者も秀句鑑賞もその任を与えられればこんな気持ちになる。まして川柳は一句一句が精魂こめたその人の命だと思えば生易しい気持ちで選が出来る訳もなく、頭を悩ませることになる。バッサバッサと切り捨てる訳にもゆかず、阿ることも出来ない。いっその事悪者らしくどなたも手を付けたことのない自選句作品の鑑賞にしようか、と思ったが、若輩の私がとてもおそれ多くて神域に踏み込むことも出来ない。いつかは薫風様にでも御一考いただきたいと念願している。自選句へ発表の皆様の句には、味も匂いも満ち溢れているが故である。会員の皆様もじっくり味わって見て欲しい。必ず心の糧になるはずだ。私の句は除外してあとの皆様の句は素晴らしい人生の羅列だからでもある。

伝統川柳、現代川柳、情念川柳、私はどれもが好きだ。それぞれが私を魅了してくれる。

たそがれの訃やまたひとり又ひとり
舟渡杏花

切々たる哀しみが湧いて来る。またひとりと数えているうちに自分もまたそのひとりになってゆくに違いない無常感、そこには神の摂理だけが存在する。「や」の助詞がこんなにも大事に人の心を打つ。助詞の使い方一つで生きもし死にもする事を教えられました。

負け犬の尻尾が道を掃いてゆく
土橋はるお

観察力のするどさと表現力の上手さ、道を掃いてゆく、だれにでも表現できそうだが、尻尾の敗北を見事にまとめた観察力がこんな表現法もあったのかと私の心も広がってゆく。

色即是空　少し酔わしてくれますか
小池しげお

この世の万物は形をもつが、その形は仮のもので、本質は空であり不変のものではない。仮の世の仮のいとなみをしている、となれば酔いたくなるのも当然のことである。口語体の中に余韻の寂しさが漂うて泣かせます。

泥んこの過去を告白出来ました
嵯峨根保子

これも口語体のうまみである。元来川柳はあまり奇にとらわれず表現する口語体の文芸であった。だから苦しい事を詠んでも、根底にはほっとする温みが流れているはずだったのである。村上浪六は体を見ずに心を見よ、と教えてくれました。告白した後の心。私にも読めそうな気がするのです。

生きんかな　近遠乱視ひっさげて
小砂白汀

意欲！しかも二つも三つも眼鏡を懐に入れて貪欲なほどに自分の物にしようとする。知識と見聞欲、それが人間の力と言うものです。そこには人間として生まれた価値観と意欲が満ちていて清々しさをあたえてくれます。

〝生きんかな〟川柳塔のみんなが輪になって生き続けましょう。不滅の川柳と一緒に。一気に詠んだリズム感がうまい。

フランスパンよ言いたいことがあるのです
小島蘭幸

そうなんです。言いたいことが沢山あるのです。フランスパンよ、あなたには罪もないだろうけれど、フランスと言う名が付いた以上は甘んじて私達の抗議を受けなければなりません。第一に皮が固い。第二には買い物籠

に入らない。第三に一度には食べきれない。それに比べると日本のアンパンの優しいこと。いいえ私はムルロアのことを言っているのです。パンに抗議をする風刺の上手さ。

最後には私も燃えるゴミですか

三宅保州

なんと言う達観、なんと言う未練。達観と未練が見事にうつし出されて諦めが浮んできます。それを諦観と言うのでしょうか。辞書を引いたら、あきらめてゆうゆうとしていること—とありました。この場合は他人に問う疑問符ではなく、自分に聞かせている諦め、したがって上にゆく語尾ではなく、下へ下がる語尾なのだと思います。川柳にも音符があることを教えていただきました。

のど仏につかえた夢が出てゆかぬ

田中亜弥

とかくつっかえやすいのど仏。ましてやのど仏に取り付いてしまった夢はしばらく場所を変えようとしません。本来夢は忘れやすいのですが、忘れられない夢もあるのです。ほろ苦さがいつまでも残る夢、それは悔悟と言う名の夢だったのでしょうか。夢をのど仏につかえさせる発想のうまさ。

埋み火を小出しに女面を打つ

岩本笑子

埋み火は女の業だったのでしょうか。能舞台に立った事もある私には番組の数々に想いを走らせて女面を探し出しています。舞台では面の気迫と舞う人の魂魄が織り重なって幽玄の世界をかもし出しますが、なんと言っても面の持つ心が大切なのです。業を込めれば業になり、情を込めれば情になります。情を秘めた埋み火、しかも小出しにしてゆく埋み火。情念が鑿を振るわせます。

何を弱気な好きで始めた道じゃない

田中みね

一転して舞台は狂言と変わりました。弱気はいけません。しかも好きで始めた以上はやり通すべきです。壁があろうと、川があろうと、踏み越え踏み越え、それが道と言うものです。いいですね！こんな句は。私にもこんなアドバイスをしてくれる人があれば、でもこの句は自分を叱っている感じがする。私のひがみでしょうか。

無理したらあかんが無理もせなあかん

稲本凡子

ここまで来たら付き物が落ちたような気持ちになってしまいました。関西弁の絶妙なアクセントが実によくマッチして句の内容を盛り上げてくれる。もしこれが津軽弁だったら川柳になってくれそうもない。脱帽。

ゆるしておやり役者はあんたがずっと上

一瀬福一

中八であるが音律がいい。「ゆるしておやり」に思いやりがあり、作者の人柄が目に浮んで来る。川柳は人なり、と言う言葉がぴたりとあてはまり、じんわりとした温かさが影絵のように浮んでくる。こんな句を見ていると自分の才能の無さにひしがれてしまいそう。

残り火を哀しいなどと言うものか

松本今日子

期せずして今回は口語体の句が多くなってしまった。故意に選んだのではない。川柳の原点はここにあったのか、と思っているのである。二度、三度と声を出して詠んでいるうちに共感できる、共鳴する何物かが私の心をゆすぶってしまう。哀しい強がりが、残り火が燃えつきる時が来るまで言い続けられるだろうか、そう出来たらいいな、とつぶやく。

割り切ったはずの過去から果し状

梅田宣司

過去から来る果し状はだれでも一度は手にしたことがあるはずだ。私も今過去と言う重い果し状をつきつけられている。果し状は小さく私を傷つけ、また過去へと去って行く。いつまでも輪廻の尾を引きながら。

西田柳宏子選

富田林市　藤田泰子

夏の夢まだ醒めやらぬ百日紅
手加減はしない　てまりを弾ませる
同情をされたくないので笑ってる
鈴虫の棲む草むらを刈り残す
稔りなど期待はしない種を蒔く

高槻市　傍島克治

本心を隠して笑顔で話合う
斬新な意見は白い目でみられ
親切な仕草のかげに鬼ひそむ
門灯にやもり見つけた山の宿
口ほどに怒っていないと見透かされ

芦別市　斎藤房子

花になり蝶になりして余白積む
触れないでわたし尺玉抱いてます
北の四季鮮やかに盛る神の匙
一位の実ポトリと未来信じます
一坪の庭　饒舌に四季の詩

西宮市　古谷ひろ子

ひと言を返しそびれて眠れぬ夜
ある時はスクラムも組む嫁姑
清貧の味もわかって老い豊か
颯爽と世に出て友を見失い
虚も実も質さずひとり茶を点てる

柏市　上鈴木春枝

聞かぬふり見ぬふりもして妬いている
ひらがなが似合うごめんなさいの文字
充電へ三十分の昼寝する
ジグソーパズルの一片持ったまま家出
旅鞄　旅の記憶があたたかい

八尾市　鷲見章

ナース愛して私も青春カムバック
来世また一緒と妻も若かりし
墓地購うて終の住居とするつもり
若者の町　老妻と異邦人
秋夜空あれは父星母の星

今治市　塩路よしみ

淋しがりやで人間が好き雨が好き
愛されてうしろ振り向くこと知らず
小さい小さい幸せ掬う銀の匙
好意とは別な視線にとまどいぬ
自分史によくぞつかえた妻である

長岡京市　山田葉子

落ちてゆくものは落して身繕い
赤ちゃんを囲んで心がとけている
鎮まるまでわたしの心撫でてやる
親切に甘え心がうずき出す
近づくとあなたの渦にのまれそう

岡山市　中嶋千恵子

時流れ苦い体験　身を助け
ステージに立てば開花の晴舞台
妥協せぬ原色過去を物語る
嘘も方便ああひとときの善に酔う
遍路旅　煩悩払う鈴の音

松江市　浦辺静江

助手席をはらはらさせる交差点
過疎となりのぼり賑わう秋祭り
無駄口に気が散りテレビ見損ない
お互いに息抜き同士笑ってる
休み増えへそくりそーっと顔を出す

静岡市　佐藤次枝

地球汚染　誰が責任とるつもり
半世紀　被爆　心の傷癒えぬ
侵略とはっきり言えぬ偉い人
過去の罪　曖昧にして五十年
ライバルにとられる前に拉致したい

豊中市　石川勝

いつからか妻が繰り出す変化球
大望は忘れていないカタツムリ
悪人に履かれる運の悪い靴
ノルウェーの鯖を疑い深く買う
どこへ行く妻よそんなに着飾って

今治市　越智青園

肩パットそんなに無理をしなさんな
カタカナ語一つ覚えて若返る
綻びから漏れる秘密につぎを当て
ほどほどに枝をいじめて華道展
コスモスが揺れて女を意識する

岡山県　福原悦子

揺れるだけ揺れて妻の座守りぬく
心まで繕い合うている夫婦
合掌の花かげ深く亡母が居る
清濁を飲んで夫婦の城守る
振り上げた拳に父の情がある

松山市　丹下　美津子

勝った子も汗と涙の甲子園
一言が千に返って来る火の粉
善人の席へ火の粉が降って来る
女ばかり泣いて笑ってたわいない
冷戦三日わたしの口もむずがゆい

唐津市　市丸　晴子

余白には花の蕾を埋めておく
猫の額それでも実る梅五キロ
消し炭がまたいぶり出す終戦忌
核　フロン　痛みに耐えている地球
渋滞の先に厨の母が佇つ

八尾市　村上　ミツ子

としよりを働かせるという情け
斜めからみると裏までよく見える
噂よりひどい真実隠れてた
知らぬ間に噂の渦の中にいる
水やりを忘れ自分は三度食べ

島根県　武島　ちよえ

逆風にあう度炎えるものがあり
秋いっぱい拾うポケット小さすぎ
綻びをねぎらってから暇を出す
無器用に母と妻とを演じきる
土壇場で口火を切ったのは女

藤井寺市　高田　美代子

座り心地はわたしに合った古い椅子
立ち止ったついでに息をととのえる
かわるがわる励ましている老夫婦
逆さ回りの時計とナツメロを唄う

寝屋川市　後藤　黎之助

出来不出来口には出せぬ孫集う
信金の利子も頼りにできぬ秋
昨年より暑いあついと古希と喜寿
古希近し何から捨てる昨日今日

今治市　白石　サダ子

ダイエットこんどは皺が気にかかり
百日紅　天に向って応援歌
休日はバラ一輪と夢語る
七転び友の引く手で起きあがる

枚方市　濱田　良知

二十一世紀だ横一列に並ぼうや
残り時間　夫婦揃わぬちびた靴
鼻の汗ネクタイで拭く癖がある
節々にガタが来てから弾み出す

鳥取市　石上　悦子

呼び捨てにされず育った長女です
性分も俺ソックリと父困り
夫には父似の人と決めていた
親となり親に詫びたい事ばかり

大阪府　原　美恵子

へそ曲り多分私に似た息子
無農薬ほんとだろうかきれいすぎ
朝ドラを見てから掃除機洗濯機
笑い皺いっぱい老いが美しい

青森県　西谷鐵郎

この指に止まるトンボの居る不思議
人並に生きて季節の秋刀魚焼く
差障りありそうなので貝になる
否応なく納豆ばかり食わせられ

大阪市　一本勇太

勝鬨に酔えぬ男に明日がある
アドリブが一杯つまるラムネ瓶
吊り橋で確かに押したのは味方
夕顔が咲く正解がまだ出ない

兵庫県　安達厚

屑籠に日々のおごりを叱られる
孫が来るたびに碁石の数が減り
炎天下　夕焼け雲に雨ねだる
早起きが隣近所の邪魔になり

寝屋川市　籠島恵子

曼珠沙華　老母の想いが秘めてある
退屈も絵になっている日向ぼこ
待たされて何か期待をしてしまう
あるだけの花瓶に生けてうれしい日

岡山県　福原辰江

悪いとこばかり私に似てしまい
音たてて崩れる運命の中にいる
乾いたらおいでと故郷の川が呼ぶ
雷がいつか鳴らない父になり

羽曳野市　芦田絢子

堂々とつかれた嘘にうろたえる
これしきを何で内緒にせんならん
一人芝居に喝采贈る鳩時計
古希傘寿　涸らしたくない女いろ

尼崎市　軸丸勝巳

土地神話崩れ親亀子亀こけ
銀行に活断層の地図がない
性善説　高い利息を疑わず
筆不精　葉書一枚辞書がいる

伊丹市　樫谷郁子

戦死せし兄に謝る終戦日
明日もまた晴れのマークの熱帯夜
炎天下　稲株豊かにこしひかり
病む夫へ残暑きびしく蟬の声

寝屋川市　太田藍子

赤ちゃんへ寄ってたかってアババのバア
産直の梨があっちこっちから
急いてはるらしい木魚が忙しい
言い過ぎてからの無口を繰り返す

兵庫県　円増純子

齢のせいなどと自分に甘くなる
ふる里へ溶け込んでゆく踊りの輪
紅を引く女の顔になりたくて
ハイハイと返事ばかりが調子いい

尼崎市　尾宮弘治

大器晩成　夢見て生きて来た不覚
仮設住　暑いと愚痴る子を叱る
帰郷して俄庭師で盆終る
地震から喧嘩別れの縒り戻る

日立市　加藤権悟

逆境の狭間にたえて来た夫婦
忍従の背中に母の跡がある
百歳のブランコ温い風がおす
玉砂利を踏むと聞えてくる軍靴

和歌山県　中後清史

年だとは認めたくないハイキング
お向かいの声が飛び込む俄雨
背く日があるかも知れぬ子の寝顔
納得はせぬが相槌打っておく

岡山市　藤原一平

砂浜も見たいと思う深海魚
よく笑う女で涙もよく流す
石一つ投げて波紋に問いかける
今日もまた辞書一つだけ持ち歩く

大阪市　尾崎黄紅

ポアしろと言われそう老い黙ってる
あれで名医か三年も通ってる
これはこれはと握手してくる嫌な奴
奉安殿いちど覗いて見たかった

鳥取市　岸本宏章

赤とんぼやはり平和な空がいい
選挙戦かかしも連呼聞きあきた
美食してやせる薬を飲んでいる
農村へ鎌鍬持たぬ嫁が来る

熊本県　高野宵草

地雷掘るように球根掘りあげる
客送る門扉を閉じて背伸びする
ままごとに漫画化されたママの影
お土産に京都訛りが聞こえそう

大阪市　三浦千津子

母に似た人に優しき真似事を
満たされぬ心のままにただ無言
老いの身にラテンタンゴの歯切れよさ
生き下手で速い流れに逆行し

徳島県　安宅美代子

妻が描く未来図僕の影もない
欲しいだけ上げた肥やしに根が枯れる
人生の苦労も知らぬ不仕合わせ
実印がこんなに軽い家屋敷

海南市　谷口義男

忠孝が風化してから来た平和
肩書が取れてゆっくり渡る橋
妻の手の中で踊れば家平和
正論を寄ってたかって叩き出す

和歌山市　木村親踭

秋祭り太鼓が里へ呼び寄せる
ひとりなら荷物まとめて来ませんか
寅さんの老後気づかう苦労性
不景気の愚痴だけ夫婦一致する

唐津市　山口ふさ子

励ましの師の声を聞く盂蘭盆会
秋確かトンボ飛んでる甲子園
不幸など笑い飛ばして生きてます
朝顔の一つ二つと千も咲き

尼崎市　田辺鹿太

正論をかざせば風は横なぐり
煙突の高さと父をダブらせる
胸のすく啖呵は肚にしまっとく
締まらない顔　貧乏が板につく

横浜市　清水潮華

喜んでよいのか道をよく聞かれ
無添加の表示で価格倍にされ
最低の金利　借金したくなる
半年もお店の前の道工事

鳥取市　藤ふうこ

ふるさとの一枚岩にほたる飛ぶ
岩清水味方あつめて海へ出る
美人いいナ還暦なのに今も華
顔見世を観るときめきは歳忘れ

砂川市　武田正美

満たされて明日の夢に酔っている
謀反ばかり考えているシルエット
震度3くらいの恋では驚かぬ
頂点の自信くずれる日の懺悔

鳥取市　山本崇

張り出した絵より大きな二重丸
深水の息づく女性絵を語る
墓まいり虫も一緒に拝みだす
炎天下昼寝もしない蟻の列

豊中市　藤原桂子

ガン告知　是非を話した遠い日日
戸を開けてやさしい朝の風に会う
しあわせを知ってるように月が満つ
流れ星　願いのことば出てこない

鳥取市　谷口百合子

さっぱりと化粧落として今日終る
助言一つ薬にならぬ気性持ち
伸びて来ぬ花に薬を差してみる
美しい花の根元に毒がある

秋冷えへどないしてるか震災地　犬山市　森　正

七癖も妻の愚痴には尻尾巻き
負け戦ひっそりひそと女郎花
二人とも騙しだまされ五十年　鳥取市　近藤秋星

敬老の日に釣り好きの家に居ず
儲かっているのに医者の無愛想
豊作が自然に出来たように言い
運動会扁平足がよく走り　富田林市　山原昭水

特級より二級が好きで秋を呑む
あの時のあの一言で強くなり
再会は昔のままのコーヒー店
少年にもどり輸入の亀を飼う　静岡市　小木久子

あてもない幸運ひそと待ち続け
高すぎるプライドわが身追いつめる
夏休み首相気軽に握手する
汗拭いてウインドの秋眺めてる　今治市　中村好恵

なよやかなコスモスが好き風といる
たった二人の意見が合わぬ晩御飯
初なりのトマトいびつなのも供え
断ち切れぬ愚痴を枕が聞かされる

痴漢せよ言わんばかりに肌を出し
いい素質持っているからきつく言い
一芸に秀でて我儘許される　堺市　吉本菁風

それからの神戸に港の灯が冷える
珈琲の話を西陽待っている
タクシーよ一度値下げをしませんか　堺市　久保田元紀

最近のニュースは雷さまも負け
この服は昔はゆったりしてたはず
楽焼きに思いをこめて書いた顔　大阪市　川久保睦子

柱から柱へ伝うちどり足
たまり場で背すじを伸ばす万歩計
最善を尽し素直に老いましょう　堺市　神原文

オシッコがひとりで出来た児の自立
いい湯だなすこし幸せすぎないか（下呂にて）　八尾市　大内朝子

泣き顔を見せては負けるコンパクト
いい朝だラジオテレビはつけずおく
子へ便り癖は追伸追々伸
唐辛子まぜたジョークがとんでくる　羽曳野市　徳山みつこ

島根県　安部　美恵女

松食虫が海を渡って隠岐までも（隠峡の旅）
飽食になれて不足の子を叱る
豊作へ主婦のやりくり笑みが洩れ

豊中市　岸田　知香子

夏バテに自己過信した悔い残る
ガレージに秋が来たよと赤トンボ
満月も復興の街照らしてる

大阪府　澤田　和重

よく家を空ける妻だが信じてる
匙投げたはずの娘に労られ
曖昧な返事　移り気みぬかれる

和歌山市　吉村　さち子

縦横を確かめ脆い橋渡る
満ち足りて見ればすべてが美しい
満更でないと鏡のほめ言葉

松江市　松本　知恵子

山鳩が啼いては思う娘の生活
二番手の気安さ軽く返事する
帰省せず娘は氷河期の中にいる

大阪市　川原　章久

姑が待つ噂話と置き薬
煩悩の消えぬ夜長の秋の月
幽霊が煙草吸うてる映画村

尼崎市　的場　十四郎

夏帽子深く被っているピンチ
真実を話せば解けるもつれ糸
無力さを知ってひたすら種を蒔く

松江市　小西　素子

生き甲斐があれもこれもと背伸びさせ
ひと握りほどの幸せ噛みしめる
トンネルを早く出たくて本を読み

大阪市　中田　あい子

ひとり居は鳴く蟬の音にあわせ起き
愛という言葉に女弱すぎる
迎え火に仏を知らぬ子らはしゃぎ

茨木市　久保田　恵美子

人生観かくも変えたり派手な服
訪販がぼんやり立っている暑さ
品のいい顔した犬に吠えられる

寝屋川市　冨山　ルイ子

友の輪から知らず知らずに逃げている
不意打ちの平手に耐えてきた心
心今も少女のままに古希の友

島根県　菅田　かつ子

糸通す横でばあちゃん待っている
虚栄かな造花は棚で咲きつづけ
ご機嫌のいい朝そうか年金日

静岡市　松下正枝

ご来光神々しさの中に立ち
薪能はるか漁舟の灯がぽつり
地球上　四季ある日本住む冥利

尼崎市　河津正治

仮設にも慣れて自信の夜が更ける
相槌をうまく合せて肩たたく
読経する自分に聞かす声しとど

寝屋川市　森　茜

みちくさが長くて皺を深くする
里芋のちょっと煮くずれ柚子を添え
大声でどなっているよ寒い鬼

広島県　森川抜智

復興の仮住宅へ犬はこび
長い髪赤いシャツ着て男です
老いらくの恋かも知れぬ夢で逢い

寝屋川市　坂上高栄

盆帰省　友の情けに酔いしれる
七年の我慢　三日の蟬時雨
親ばなれ子ばなれ心の準備する

大阪市　鈴木トヨ子

塒に帰る鳥達が良き明日を呼ぶ
プレミアで生きる余生を感謝する
出世には遠いがひとりの職に生く

鳥取県　岩崎みさ江

少し良くなると忘れる薬包紙
うす煙　思い出だけにした手紙
夢弾けた土地に泡立草が揺れ

島根県　松本聖子

宍道湖へ景観そえるしじみ舟
朝靄を一気に押し分け漁舟
コスモスとトンボじゃれてるうちの畑

八尾市　村上剛治

悪友が妻をおだてるので困る
吹溜り身を寄せ合ってあたたかい
決心がついてお酒が旨くなる

和歌山市　楠見章子

みんな留守　電子レンジの世話になり
物忘れあれそれこれで済む話
ホテルから戻り手足をのばす風呂

羽曳野市　川田晋

孫去んだ後へとへとの夏休み
宅配を預かるだけのおつきあい
ヘアバンドした妻　妙に若くみえ

和歌山市　津村武春

亡妻の香を想い出してる午前二時
出迎えてくれていましたしじみ蝶
活造り鰺の不敵な面構え

昇格を餌に息子が飛ばされる
医者の言う通り生きても味気ない
大阪で生れ育って故郷がない

大阪市　和田和風

帰省子にリズム狂わす盆の家
漁火が海に戻って盆がゆく
抱き心地　抱かれごこちが孫と合い

島根県　森茂美

仕合せな頃の写真は世帯じみ
切り捨てた未練が風の噂きく
酒の量減って夫の空元気

八尾市　平川幸枝

グアム　ハワイ次はパリ行くアルバイト
一本を治せば別の歯が拗ねる
例外にからきしだらしない念書

綾部市　藤田芳郎

カメラ構えて被災地の明るさばかり
クレヨンで海蒼く塗る大人たち
満月を夢に怯える深海魚

宝塚市　永田暁風

まあまあと近所が裁く痴話喧嘩
眉に唾つけ政治家の話聞く
達者だけ取り柄の妻が有難い

寝屋川市　北岡波留吉

残すもの何一つなし風来坊
黄昏て明日の世間が少し見え
振り向けば道草ばかり食っていた

宝塚市　黒台伊佐武

呆け防止がてらの囲碁が強過ぎて
遊びでも鋭い勘が生きている
ニュールック　アンバランスで胸を張り

唐津市　山門幸夫

この辺で生き方変える登山靴
山の風　枯葉の上がやわらかい
満月にすすき夫に温い酒

神戸市　向井泰子

湯の宿に一身決める星仰ぐ
百円のみくじの吉に夢がある
夢食べていた青春が懐かしい

寝屋川市　宮崎菜月

私にも言わせておくれと影がいう
故郷のまつりは子供の日にかえし
肝心な時にことばが出てこない

島根県　福間博利

孤独感バーを一段さげてみる
放言がひとり歩きをして困る
再婚へ亡妻の記憶が壁となる

久留米市　鶴久百万両

宝塚市　飯西ミサヲ

ハイキング予定通りに落伍する
死ぬ日まで達者で居たい万歩計
羨まし蜘蛛は一夜で城築き

兵庫県　西井つや子

おしゃべりに生気が戻る農仕事
泥んこの男明るい笑顔持ち
よろこびも悩みも増えて孫育ち

鳥取市　植田一京

失ったものが大きく見えてくる
円満に生きる相槌打っておく
親らしい親になるのはむつかしい

熊本市　北川一進

好き同士有無も言わずに集まった
初めての医師の笑顔にほっとする
露天風呂男の方が遠慮勝ち

和歌山市　福重美子

瓦一枚私のもある善光寺
てのひらの庭にも秋をくれた虫
休憩はトイレで休む忙しさ

旭川市　朝倉大柏

子どもより扱いにくいのが一人
思い出がたくさんあって草むしる
不細工に刻んだ顔が父になる

福岡県　本田忠男

子の火の粉払った父が火傷する
綻びを縫うて上座に母座る
勝った賭　話が大きくなってくる

尼崎市　森安夢之助

影法師　私の姿を嗤ってる
孫が来て取られた僕の指定席
忠告を蹴って梯子を踏み外す

和歌山県　中村君枝

秋風に乗って古里祭り笛
元気ある内が花よと旅カバン
本調子やっとリズムを取り戻す

岡山県　富坂志重

近道を探して回り道ばかり
行き先は青空　私の靴軽い
世話人を集めて神は酒を飲む

鳥取市　坂田和歌子

雑音が頭の中で動かない
滲み出る灰汁を私に置きかえる
ケラケラと笑う運命のエンドレス

東大阪市　今岡貞人

冷奴　胡瓜きゅうりの日がつづき
ホールインワンえらいことをしたもんだ
余生なお試行錯誤を繰り返す

鳥取市　岸本孝子

寝たきりはいやです薄い味にする
不覚にも虫の居所まで読めず
流行かぜひき人並の顔をする

倉吉市　山中康子

陰で咲く花にも匂う自負がある
小さい胃に七年越しの飯加減
涼しさをもらえば次の欲がでる

河内長野市　橋本弘美

思い切り甘える一病楯にとり
お隣のめんどり昼も夜も鳴く
走らなくてもいいのにいつも走ってる

今治市　渡辺南奉

うそほんといつか自分を見失う
神様のいたずらトビがタカを生む
へんてこりんなうれしさ祖父になりました

兵庫県　大谷幸次郎

虹を追う青春の気はまだ失せぬ
慶に弔　年金の糸千切れそう
かけ違い釦も穴も気付かない

尼崎市　野瀬昌子

校舎抜けこっそり煙草吸う芝生
山上の遺跡のろしを揚げた跡
声だけは年を取らない電話口

羽曳野市　山本たけし

暑くても雨がなくとも風は秋
二度の職　破格で買うてくれた腕
われは虎　息子近鉄　孫ガンバ

松江市　松浦登志子

乾電池とりあえず一個かえておく
結び目を接着剤で固定する
一年を祭りのために生きる奴

新潟県　高野不二

父は下戸娘はうまそうにビール飲む
烏龍茶飲み飲みビールじっと見る
飽食のつけ病院に払ってる

鳥取県　原みさを

先頭をいつも走って噂ずき
特賞の絵わからぬ良さを観てかえる
絵日記の広い余白は何だろう

和歌山市　古久保和子

まっすぐな胡瓜　平和と勘違い
デパートの袋は見える方に持つ
驚草が揺れる飛び立つかもしれぬ

松江市　鵜飼陽子

いとおしむ無償の愛で子は育つ
パレットへ人生の色出してみる
ピカピカの背中でおどるランドケル

高槻市　乙倉武史

風雪に耐えて動ぜぬ顔の皺
エスカレーター横目階段老いの意地
無理をせぬようにと便り締め括る

今治市　渡邊伊津志

人指した指の先から目がかすみ
砂文字の炎を波が消しに来る
風渡る海の広さに人許す

箕面市　木村天弘

見栄張った派手なふるまい底が見え
邦人より派手な応援野茂コール
破綻した派手な銀行経営者

八尾市　生嶋ますみ

結び目を確かめ合うてフルムーン
保育器の宝　元気にのびをする
義理ひとつ済ませて帰る月あかり

吹田市　西岡豊

熱血のビンタがとんだ青春記
子や孫が揃うてはしゃぐ海の宿
逢いに行く胸の鼓動に月冴える

堺市　たにひらこころ

情念をすっぽり切って竹人形
越前岬いかの丸焼きかぶりつく
東尋坊に立つしっかりと手を握り

唐津市　山門タミ

無農薬自慢の紫蘇はバッタの巣
スーパーに旬を忘れた野菜たち
蜩は早や旅立ちかまだ暑い

岡山県　国米きくゑ

花も実も付けて炎天下の雑草
トンネルの向こうに広げている空想
傘の中　裏切者の居た不覚

河内長野市　大西文次

雑用の中に昼寝も入れてある
父の日の父ちぐはぐに釦かけ
皺くちゃの顔で嫉妬もないもんだ

倉吉市　山本玲子

方言が旅の楽しさ倍にする
冗句だと言っては居るが棘もある
気さくな小指　安請け合いをして困る

弘前市　相馬銀波

ポリシーのわかる男に旗を振る
建て前が面子と義理に潰される
癖のない笑顔に緩む僕の螺子

寝屋川市　瀧本八十八

核実験　地球たて皺深くなる
孫可愛い抱き癖つけて祖母帰る
夢の中　亡き父母の絵を描いてみる

静岡市　中西　雅

クーラーにへそをとられてかぜ薬
行く先をデンデン虫と見る平和
心まで緑に染めた山の道

出雲市　浜　圭三

ガラス戸に張りついている雨蛙
庭の雨きっときれいな海へいく
反骨も褪せてひたすら生きている

大阪市　岡本久峰

親を恋う捨猫吾も母恋し
うらぶれし姿さらして父の墓
亡き戦友を涙ながらに雪の葬

札幌市　三浦強一

美しい思い出ばかり遠花火
夫婦別姓わり勘で飲みにゆく
孫が来て先ず冷蔵庫開ける知恵

東京都　清原悦子

一人身の母は何でもしてしまい
道草をしたら私のグチも減り
この家の名キャッチャーはやはり妻

兵庫県　倉垣恵美

ヘルペスの痛みよ神のいたずらか
寝ていてもスイカ欲しいと返事する
紅しょうが母の章を語り継ぐ

和歌山市　和田美寿子

山の路しいたけきのこ笑ってる
孫達が携帯電話を持つ強み
さりげなく話したことが致命傷

愛媛県　安野案山子

複雑なパズルのように嫁姑
他人から言われたくない臑の傷
がむしゃらの一本道に落し穴

唐津市　浜本治幸

珍しい日の丸がたつ過疎の村
戦後五十年敗者復活戦を生き
何をする心算だったか空仰ぐ

今治市　村上久美子

老母送るまでは幸せ演じ切る
寝そびれてとなりの憎い大いびき
雑魚は雑魚なりに名もある意地もある

唐津市　宗　弘

謙遜が過ぎてチャンスが逃げて行く
定年を境に繕う破れ傘
親馬鹿の送る野菜の高値かな

寝屋川市　井上すみれ

本心のつかめぬ友と四十年
辻褄を無理に合わせて綻びる
晩婚の結婚指輪よく笑う

尼崎市　長浜澄子

金太郎飴みたいな夫の安堵感
良心の裏まで見せるかつら剝き
一病を得て神妙なループタイ

尼崎市　松下比ろ志

締め切りはない神と私の時間
名木にも無駄枝が出てほっとする
孫が来てパパの昔を聞きたがり

八尾市　與田明

正直へつけ込む貧乏神もいる
大漁節唄ってガイド勤務中
やりなはれ理屈は後で付けられる

池田市　藤井計光

短命を所せましと蟬時雨
花蘇芳　垣根のうちから顔のぞく
過激派が虎視たんたんとＡＰＥＣ

米子市　猪森すみえ

山肌の傷拭きに行くちぎれ雲
過疎の村　案山子もほしい選手権
気象庁信じて濡れた午後の雨

羽曳野市　酒井一壺

鳥たちへ自由の森を残したい
印鑑を押す時だけの机です
初めての長の机をなで回し

八尾市　神原まさと

高級と知らぬラッコの毛づくろい
可愛いが男嫌いの犬らしい
自動ではないに扉のあくを待ち

高槻市　江原秀夫

塾通いの子等に代って地蔵盆
渋滞のバスの怒りが背にひびく
人柄がいいと言われて断われず

愛媛県　中居善信

出世レースに痛い汚点を持っている
窓際でぼんやりしてることに慣れ
輪廻転生きっと私は猿になる

島根県　槻谷仲子

短パンでセクシー若さぴちぴちと
別居して嫁と仲良く語る盆
挨拶にぼやく暑さも峠越す

鳥取県　橋本多哥由

大の字になって太陽あびている
鶴を折る千羽の鶴に賭けてみる
恋人の言葉に耳を疑った

鳥取県　高尾京

故郷に名所名物よみがえり
炎熱に水召しませと墓まいり
にわか雨　金が降るよと言う農家

西宮市　池田善守

菊師の手　娘に着物着せるよう
菊花展　金賞皆にあげたいね
乾杯に新たな力湧いてくる

東京都　松本冬虻

月並な顔して怖いことを言う
外国の研修旅行で鬱になり
不景気のトンネルついに行きづまり

大阪市　中井正秀

酒代はいるが医者代いりまへん
作るから使いたくなる核とガス
火曜日が休みでデートままならず

高知県　百田幸

捨てきれぬ欲　生き甲斐として稼ぎ
夫には聞こえて欲しいひとり言
めぐりあい花はとどかぬ位置で咲く

河内長野市　水谷笙子

ちぐはぐの強い意見に押し切られ
無器用に夏を過してまた肥り
アンパンに似た嫁さんが税上げ

鳥取県　山本正光

陽のめぐみコスモス天に向けて咲き
悪知恵も売ってる自動販売機
へそ出したハイカラさんが闊歩する

鳥取市　山口しげる

運命と綱引きをする手術台
能書きの多い薬を買っておく
とんがった言葉へ笑顔盾とする

松江市　安食友子

殺虫剤　情け容赦を忘れてる
泥舟があれから狸怖くなる
はらはらで孫の宣誓聞いている

鳥取県　藤山弘子

ポイ捨ても知らぬ存ぜず平気です
ピカピカに磨いてばかりカーマニア
床磨き亡母と会話をしています

鳥取市　杉本孝男

人情味ないのが出世頭だな
いい嫁と言われ家庭に縛られる
座右の銘どん底だから生きてくる

羽曳野市　麻野幽玄

一日の祭へ三日の日を潰し
酔うたふり寝たふりをして庇う老い
三度までは笑うてすんだボケのミス

倉吉市　田中八太朗

借金があるから元気なのかもよ
酒飲みが嫌いなくせに酒は好き
へソ出したヤング見ました横目です

損得を考え前に進めない
いつまでも消えぬ恨みも罪だろう
堺市　宮本かりん

しぶうちわ七輪揃い秋刀魚焼く
六十路すぎ私の生きざまみえてきた
堺市　志田千代

娘の涙どんな薬より苦い
ホッとする次は疲れがドッと出る
福岡市・井崎ミサ子

よか話聞きたい朝の蜘蛛を追う
よい姑になれそう今日の足袋あらう
高槻市　芦田静江

浮き沈み心は時を記憶する
同い年ボケの程度を比べ合う
泉佐野市　内田倫子

夫婦別姓わたし夫の姓が好き
空腹も千人針も風化する
大阪市　勢理客トミ子

死ぬ勇気持っていじめに負けている
話すだけ話してこれは内緒です
寝屋川市　太田とし子

現住所　高槻有馬活断層
噂の根細いが強くよく伸びる
高槻市　小林一閑

孫のようなナースの注意ハイと聞き
夜のクモ朝なら逃がしてやるものを
富田林市　欄智久

春秋の巡って早き花紅葉
夫婦仲スッタモンダで来た七十路
岸和田市　亀井皎月

廃車積む鎮魂曲か虫の声
とつおいつ悩みに揺れる影法師
大阪市　池田一男

こどもニュースにうなずく今朝の満足感
見極めて身軽の中に立ち上がる
貝塚市　池田寿美子

実験の理不尽世論に火をつける
アアしんど酷暑過ぎたら台風禍
秋田県　湊修水

心の窓開けてあげたい自閉症
散歩する一人昔と話して
尼崎市　岩倉キク子

仮の世と思えば無念晴れて来る
ライバルを次々作ってまだ呆けぬ
豊中市　みきわきみ

ふろしきは母が包めばやわらかい
どこまでを秘密にするか胸ボタン
藤井寺市　鴨谷瑠美子

羽曳野市　安芸田　泰子

毛虫焼くいささか罪の意識持ち
病名をかくす笑顔がつらすぎる

沖縄県　杉谷　一栄

炎天下イルカのショーに涼もらう
手土産の箱がきれいで残しとく

鳥取県　権代　康女

ああ夫婦ふんわり出来たにぎりめし
自由とはこんなものかとあくびする

米子市　木村　春枝

反発と妥協日めくり繰り返す
誉められて我慢のつづく松の枝

鳥取県　橋谷　静江

里帰り老母の愚痴を聞く役目
居酒屋へより道する日金曜日

大阪市　平井　露芳

リストラをやる身　何時かはやられる身
草魂の魂抜けて辞める破目

泉佐野市　大工　静子

カルガモのように並べて孫帰る
旅好きの亡夫あの世の友は誰

羽曳野市　西村　りつえ

百日紅に負けじと夏も無事にすみ
エリートで草臥れ知らぬ道を行く

出雲市　原　章峰

サンゴ排卵　兵のいのちかも知れぬ
選別機から無駄口が落ちてゆく

米子市　池尾　保子

チャンネルを回せばこわいものばかり
冷蔵庫西瓜一つが場所をとり

大阪府　もちづき　遊美

ローマ法皇いつまで祈る来ぬ平和
このニホン支えた若者今老いぬ

米子市　服部　朗子

ふりだしに返り素直な顔になる
筋ならぬ評判のこし幕下ろす

大阪市　亀井　円女

深夜でも笑顔をくれたナース達
オペ受けて見えないものが見えて来る

鳥取県　山内　芳江

ネクタイを外し居酒屋盛り上がる
鬼の去ぬ間の洗濯が良く弾む

和歌山県　久保　ふみえ

親馬鹿を絵にして見たい孫の世話
古里の音色を運ぶ虫の声

尼崎市　中澤　向西

戦中派　進軍ラッパ吹きたがる
じいちゃんがコツコツ貯めたお墓です

唐津市　岩崎　實

できすぎて倒れた稲のまだ青く
しっかりと触れて子育て五男二女

唐津市　松本　圭

ピアスした男が踊る炭坑節
井の中の蛙連れて海へ行き

広島市　藤川　幻詩

名付け本　立ち読みしてるマタニティー
図書館で孫を遊ばせ叱られる

和歌山県　上岡　正直

忌明けまで仏画と話す日々でした（母死亡）
高笑いあの人悩みないのかな

東大阪市　松山　隆

十年余　北の訛りの置き薬
検眼の眼鏡原色透けてくる

兵庫県　北川　とみ子

盃の底へ本音を置き忘れ
倖せとはっきり言えぬ母の背な

大阪市　宮本　信幸

こおろぎの澄んだ初音にクーラー停め
当節は地味から派手に年を取り

鳥取市　冨山　雄幸

金婚の笑顔を皺が語り出す
潮の華シベリア哀話抱いて舞う

和歌山県　杉山　精子

母の掌に触れると和む愛児の瞳
ほうじ茶が恋しくなった季の移り

唐津市　福島　紀一

信じない人も神には掌を合せ
鳴き砂に聴き耳立てて一歩二歩

兵庫県　玉田　三重

甘そうに見せる隣の渋い柿
揺れる舟承知で乗った共稼ぎ

高槻市　執行　稲子

火祭りに男の強さ見て安堵
一石二鳥　落葉で樹々のよみがえる

松江市　佐野木　みえ

不眠症　羊百匹数えても
花柄のエプロン　リッチな気にさせる

千葉県　大川　晩翠

身拵え明日は雨かとホームレス
テレビ見る何処にもいかず旅気分

島根県　三代　朝子

セットした髪をのれんがわるさする
嫌なこと忘れ明日へ夢つなぐ

熊本県　大川　幸子

どこがどうとは言えないが素敵です
平等にすればやさしい掌の温み

和歌山市　松本三九

意気投合していて空気ぬけている
陰干しになってひたすら生きている

泉佐野市　河原崎礼子

長びいた風邪におしゃべりたまってる
病室のパジャマは少し派手にする

富田林市　中井アキ

虹の風今度吹いたら飛び乗ろう
遠くまで来てくれた人無口なり

河内長野市　木太久正一

熱帯夜　世界の天気聞き比べ
誰が為に政治あるのか低金利

交野市　山川日出子

高速で大阪城が五秒見え
広島弁笑った友は阿波なまり

和泉市　中川楓

叩いたら埃が舞っている背広
古くなったパパと充電するツアー

尼崎市　吉永伊三郎

枯れ枝に蓑虫揺れて秋暮れる
女待つ男を照らす秋の月

米子市　鹿島繭

傾いた窓からみてもいい景色
張りすぎた意地につかれがみえてきた

弘前市　櫻庭順三

鐘乳石　昔むかしの鼓動あり
今日の修羅　硫化水素に締め出され

兵庫県　高見末野

鍬の柄に汗滲ませて大根蒔く
敬老日　古希の私の誕生日

兵庫県　中野とよ子

ぴったりの去年の服が着られない
バスの旅おはこが一つ飛んで出る

静岡市　大村正雄

顔いろを見て冗談と言い直し
夢で逢う人は昔の若いまま

静岡市　増田扶美

茶に染めた髪に悲しい母の目よ
蛍　鮒　夢を育てた川はない

島根県　岩田三和

川柳でこころは元気まだ米寿
ファンから悲鳴がおこる土俵ぎわ

鳥取県　山口ゆうた

もてあますビール一本ちちろ虫
車椅子押してあげたき虫時雨

今治市　野村清美

両方へ義理を立ててるヤジロベエ
いじめでも笑いの渦の披露宴

宅急便ぶどうの中の長なすび　枚方市　森本節子

ピーナッツをかみくだきつつ小言いう　鳥取市　田賀八千代

秋の夜ふと人生を読み返す

記者魂炎えて真実曲げられぬ　米子市　小塩智加恵

雨恋し二日続くと陽が恋し

腰痛という爆弾をもって旅　橿原市　西本保夫

親ゆずりとあきらめ自慢する頑固

干からびた絵の具も捨てる気になれず　東京都　瀬戸京子

甚平と赤い下駄買い孫を待つ

孫去りし湯舟で金魚のねじを巻く　米子市　林風子

風紋の砂となりたい石一つ

九段坂　砂一粒にも亡父います　佐賀県　木屋広一

亡き友の育てしさつき剪り惑う

久方の恩師はなんと保険屋で　鳴門市　八木芳水

真直ぐな瞳　本当の事を言い

ローン済み屋根のいたみが急を告ぐ　明石市　小川酔月

ソロバンで昔気質を押し通し

いまもって悟りきれずに今日を生き　十和田市　阿部喜久江

米寿でも女ですもの薄化粧

夏休み終ってホッとしてるママ　姫路市　服部一典

ここに居る人達みんな縁がある

我が余生　何を目的生きようか　相生市　中塚礎石

針の山歩けば鬼も妥協する

スケジュール一つ残して明日へ生き　岡山市　山磨行子

孫五人　元気印が宝もの

はばからず夫婦で語れる月参り　大阪市　今西静子

ベランダに蜂来て花の息づかい

流れ星罪深い子が誕生す　出雲市　加藤スズコ

蟬が鳴くよい事あった昼下り

お盆ですためらいなくて買うメロン　岡山県　土居ひでの

心乾いてオアシス捜す旅に出る

お隣と名月を賞で酒を愛で

粗大ゴミ傷跡偲ぶ古簞笥　尼崎市　向井末貞一

はしごする医者の薬は飲み切れず　鳥取市　津村静枝

満腹の雀案山子に一休み

満天の星空願い届きそう　和歌山県　吉田武治

夏の旅　冷えた茶粥が恋しゅなり

断水でやっと気付いた天の恩　出雲市　川島和歌子

感激の握手で終る甲子園

亡母想うかすかに見える昼の月　熊本県　増田一乗

流行が若さをかもすリュック負い

孫の声遠くへ去った夏休み　熊本県　岩切康子

腹八分　旬の旨さを冷凍す

チューリップ今日が終って弁閉じる　香川県　山崎はつ恵

我を捨てて丸く生きよと月が言う

地球儀を回せば私宇宙人　仙台市　小寺九

観月の宴たけなわに月が来ず

定年前　料理習えと妻が言う

わが余生　野暮な失敗ばかりする

折れてくる笑顔に何時も妥協する　和歌山県　藤井春子

星錨あれも洗脳だったのか

失せたもの得たもの数え終戦忌　泉佐野市　稲葉洋

バージンロード自由よさらばと腕を組み

尾鰭取れば聴くだけ損な話です　阪南市　正橋正

ソプラノの叱言暑さが倍になる

調子よくみんな忘れて殻を脱ぐ　和歌山市　山根めぐみ

貧しくも家族の笑う声がある

握った手空しく解けて夫が逝く　米子市　永井三津子

弱音など吐かぬ男で頼られる

苦労した事も忘れる子の出世　鳥取市　田中友子

胎教に悪いあんたのうなり節

竹刀胼胝消えて気楽なペンの胼胝　尼崎市　立谷勇次郎

タクシーが道を間違う仮設村

五十過ぎて心のとげをうまく抜く　豊中市　上田圭津子

缶ビール妻が大目に見てくれる　高知県　桑名孝雄

あの人に夢で逢いたいから眠る　鳥取県　吉田孔美子

恋をした娘の円周を外される
健やかに今年も茸と会いに行く　兵庫県　森脇和子

残照へやすらぎくれる赤とんぼ
つまずいた石積み上げて角がとれ　大阪市　中橋恵美子

人も家も故郷私を忘れだす
入れ替えた鞄の中がなじまない　河内長野市　印藤智子

定年後　夫がいつも横に居る
わずらわしまた慕わしい老いの仲　島根県　谷岡婦美

大空に光る星あり亡夫だろか
友呼んで昨日のつづき話する　奈良市　米田芳子

一人旅慣れてうれしい墓参り
旅先に見る町起し村おこし　和歌山市　太田木管

糖尿の薬飲みつつ酒を呑む
ストレスがたまり過ぎるよ円と株　犬山市　早川盛夫

肩書きの他には何の趣味もない
音痴でも勢いで持つペアマイク　静岡市　永倉柳華

たくましく燕横切る車間距離
太陽の恵みを愚痴るこの猛暑　鳥取市　谷口侑里

親戚につかず離れず丸く生き
親戚に内科と外科の医者がいる　池田市　木村一笛

俄雨　雨戸を叩く気忙しさ
疑惑なら闇から闇へまた消えた　静岡市　三浦つね

人が皆地球を病気にしてしまい
一言を肝に納めて今日も暮れ　大阪市　乾哲静

定年の腕を買われて生き延びる
喜寿傘寿お手々つないで老人会　和歌山県　村中悦男

やる気ある手の温もりをにぎりしめ
高齢化見本はまわりに多すぎる　香川県　高橋たみ

声かけて遍路がとおる道にいる
夕方の音がきこえる裏どおり

からからと笑って落葉逝くか秋　名古屋市　藤井高子

残り火で時々辞書など照らし居る　香川県　田中ふみ

病む夫に一喜一憂　老い二人

どん底の私もひとつ夢がある　高槻市　古見萬勇

入院といわれ痛みが更に増し

面会は靴音で知る女房殿

（前月分）

気が緩む第三ボタンあたりから　宝塚市　永田暁風

眉墨の眉で決意を告げに来る

珈琲の香にしばらくのいのち乞い　明石市　小川酔月

またひとつ空地ができた隣組

灯明をつけて地震の無事をつげ

川柳塔きゃらぼく忘年句会

とき　**12月3日**（日）午前10時開場・12時半締切

ところ　てんまやホール（米子天満屋5F）

課題　場所・袋・拭く・いつも・蓋・瘤・借りる・数（2句）

会費　4000円（昼食・懇親宴とも）

第42回 八尾市川柳大会

とき　**11月12日**（日）正午開場

ところ　八尾文化会館4F第1会議室
（近鉄八尾駅下車　西武デパート東隣）

宿題と選者（各題2句・午後1時締切）

「結ぶ」　池森子選
「決心」　久保田元紀選
「頼る」　福田秋雄選
「人間」　大路美幸選
「握る」　中田たつお選
「歴史」　鳥本泰選
「見る」　橘高薫風選

会費　2000円（軽食・鉢植花・作品集呈）

懇親宴　3000円（希望者のみ）

主催　八尾市・八尾市教育委員会
八尾市文化芸術・芸能祭実行委員会

川柳塔鹿野みか月大会

とき　**11月12日**（日）午前9時開場

ところ　鹿野町営国民宿舎「山紫苑」

兼題と選者（各題2句・午前11時締切）

「化ける」　森中恵美子選
「卵」　板尾岳人選
「たたむ」　小出智子選
「命」　灰原泰子選
「壁」　尼れいじ選
「昨日」　八木千代選
「弓」　但見石花菜選
「案」　森田熊生選

会費　出席投句 2,000円（軽食・発表誌）
欠席投句 1,000円（**11月5日締切**）

投句宛先　〒689-04
島取県気高郡鹿野町鹿野1279
中原諷人方　みか月事務局宛

—水煙抄

秀句鑑賞

—10月号から

浅野房子

きのうの顔をごしごし洗面器へおとす

高田　美代子

昨日の自分を捨て、新しい明日へ羽搏く心意気が感じられます。洗面器へ顔をごしごし洗いおとすと、心まですっきりすることでしょう。

故郷の井戸に浮いてるまっか瓜

藤田　泰子

昔むかし、子供の頃、父が作った西瓜を井戸に冷やして、昼寝のあと、毎日食べていました。そして時には、まくわ瓜も。なつかしい思い出としていただきました。

人並というものさしのあいまいさ

松下　正枝

人は誰でも人並みでありたいと思っています。そして一人一人が中流意識だとか。でもその物差しは、至極あいまいなものです。そしてそれがいいのかも知れません。

犬かきで泳げる広さしか知らず

国米　きくゑ

「井の中の蛙大海を知らず」とか、人は皆、自分の手の届く範囲でしか泳げない、物を考えられないものだと思います。

夕立は大阪城を丸洗い

大西　文次

大阪城を丸洗いとは、面白い表現ですね。人間も洗濯機で丸洗いができたら、さぞすっきりするでしょう。

そっと来て喧嘩の種を置いて去に

安宅　美代子

よくある話です。ひょっとしたら、私も喧嘩の種をうっかりして蒔いているかも知れません。反省しています。

今ごろに自立をせよと妻が言う

前　たもつ

今まで奥様が何もかもして下さっていたのですね。これからの男性は、炊事・洗濯・掃除、何でも一通りはできないといけないそうです。

口下手で異議ない方に手を上げる

中川　楓

人前で立派に意見が言え、堂々と討論のできる人がいます。羨ましいことですが、反対に口下手で、思うように意見の言えない人も沢山おります。自分もその一人で、つい無難な、異議のない方へ手を上げています。

女です賞味期限は切れてます

百田　幸

女に賞味期限などはありません。いつまでも若々しい女性でいてください。

褒められたことは決して忘れない

村上　剛治

いつも褒められている人は知りませんが、めったに褒められたことのない私は、たまに褒められると嬉しくて、あの人は褒めてくれたと、いつまでも覚えています。

こぼれ種今に見返す日も来よう

長浜　澄子

私もこぼれ種、今に今にと思っている間に黄昏てしまいました。

ゴミの山お金で買った物ばかり

浅子　まつゑ

本当にそうですね。その時は、大切なお金で買った物なのに、歳月が経つと粗大ゴミやがらくたになってしまいます。箪笥の中は一杯なのに、着る物がないと歎いています。

最後に私の心に残った佳句を列記しました。

目べりせぬように私を研いてる　ミツ子

本籍は何処かと豆のつる手繰る　ちよえ

鬼瓦こんなところに落ちていた　文

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (58)

橘高薫風

昭和八年八月は特集号で、この月から巻頭二頁に「柳壇画報」を掲載、これも柳誌として先端を行く企画であった。

九月号には川柳雑誌社主催の東京句会開催が発表される。創立十周年記念事業の一環である。要項を左記すると、

日時・十月十五日（日）午後五時から九時三十分まで

会場・並木倶楽部（東京浅草雷門前）

兼題・「大空」（三句）　麻生路郎選

締切十月十日　官製はがき住所氏名明記

会費・金七十銭

路郎賞・兼題三光天位句に拾円（債券）

三光の地・人位と席題三光の句に呈賞

記念品・路郎筆記念手拭、『川柳雑誌』一年間の合本、句会発表誌

当時の句会の様子が推見出来そうである。

十一月号は東京句会記念号で、七頁に亙り記事を掲載、タイトルからして社を挙げての意気込みがしのばれる。

本社創立十周年記念東京句会

路郎主幹病軀を挺して

中央柳壇より全国に叫ぶ

柳壇画期的の一大壮挙

オールジャパン川柳大会

とある。『川柳雑誌』が川柳社会化を主唱して十星霜、幾多の難関困苦を突破排除して邁進して来たので、この運動は柳壇の指導精神をリードし着々成果を収めている。路郎主幹の提唱した柳壇三十年計画の第一期、川柳の量的発展が略完成の域に達し、本誌も創刊十周年を迎えたので、遙々東上して句会を開催、努力を続けて来た経過の報告と将来に対する本誌の使命と抱負を声明するのが目的だとする。大阪からは路郎以下十四名の同人社友、遠くは晨修（函館）不浪人（青森）五花村（白河）民郎（松本）、地元在住の岡田三面子、井上剣花坊、坂井久良伎をはじめ、三太郎、雀郎、花川洞、茶六、鞍馬、○丸、夢一仏、佐保蘭、懐窓、雨垂の諸氏ら百四十名、計百五十名を越す盛会であった。

路郎主幹の講演は、前掲の川柳雑誌社創設の目的と十年の経緯を語り、最後に「今後の川柳界の動向は三十年計画の第二期、即ち川柳の質的向上に専ら主力をそそいで、協力邁進することだ」と獅子吼して反響を呼んだ。

兼題「大空」の秀句は

（天）人を焼く煙余りに空青し　長崎林一

（地）搾取の空に大空なかりけり　大阪水車

（人）大空を見る病人の手が乾き　横浜夫柳子

席題の課題と選者は

「青年」住田乱耽選、「礎」寺井紅太郎選

「一人旅」高須唖三味選、「宮城」村田周魚選

「金屏風」三浦太郎丸選、「久しぶり」塚越迷亭選であった。

この号の編集後記は福田山雨楼が書く。

▼柳壇待望の「東京句会」が関東川柳家諸方の圧倒的な声援と賛助によって、非常なる盛会裡に開かれたことは、忘るることの出来ない感謝であった。

▼東都川柳家、各地柳友諸兄から沢山の賛辞と反響の言葉を頂き、主幹をはじめ社中一同嬉し涙を禁ずることが出来なかった。この厚意と同情に応えるべく、今後益々誌面の刷新と充実に努力して邁進することを期している。

東京句会の司会を担当したのは、この福田山雨楼であったが、戦後、川柳雑誌社の東京支部長として多大の貢献をされたのである。

私の句

六百句記念特集 (3)

〈昭和五十七年〉

泣くまいぞ化粧くずれが怖いから　稲葉冬葉
降ってわいた夢でカメラの中にいる　西川景子
亡妻を恋う眼の焦点が少しぼけ　西村早苗
教師冥利しかと抱いた伊勢旅行　原さよ子
呱々の声　人それぞれの荷を背負い　藤井春日
突然に向う岸から来る波紋　雑賀美世
とっくりが転んだように父が寝る　松岡三吉
母病んで娘が折る鶴はいつとべる　吉岡きみえ
人生の峠　歩幅を狭くする　菅井とも子
梅干しの壺を捨てるにすてられず　鈴木節子
鈴が掌に踊るあなたに逢えた日は　松原寿子
海峡の向う還らぬ人想う　赤川菊野

〈昭和五十八年〉

敗北の旗は妻子にのぞかせぬ　政岡日枝子
可能性　無限に秘めている若さ　杉本智慧子
去りぎわにだけ喝采があればよい　西出楓楽
千羽目の鶴が命の灯をともす　田中亜弥
えんぴつで書いても消せない章がある　林はつ絵
旅馴れて伊達巻き一本入れて行く　鍛原千里
巣立ちした子らへ聞かせる母の笛　妹尾春江
家ひとつ持てず島買う夢を見る　田中淑子
梅一輪ご縁頂き候て　野坂なみ
月へ近づきたくて雑草屋根で咲き　寺沢みど里
明日もまた無事の日つづけ茜雲　田中正坊
埴輪の目この世の風がくぐり抜け　田崎素秋
老残の眼に紫の山ばかり　東野大八
ありがとうございまするが口から出　高鷲亜鈍
貧乏が私磨いてくれました　中西兼治郎
台風にへちま辛抱し通した　山根いつを

極楽も地獄も集う原爆忌　阿部　柳太
角兵衛獅子　太鼓に母の影を貼る　飯田　悦郎
特訓へ母の大きなにぎりめし　高橋　幸代
釘箱の釘に悩みを持たさない　清水　健司
振り向けばとき時開く遠花火　藤田　泰子
銀行のカメラに向かってハイ　チーズ　田形　美緒
惰性の日つまずいて知る愛の鞭　岩道　博友
人生のドラマもすでに深い秋　石倉　芙佐子

〈昭和五十九年〉

人差しのゆびに指されて人が死ぬ　板垣　夢酔
まだ丸くなりきれなくて石を打つ　牛尾　緑良
若竹のひと節ごとにある気魄　杉浦　婦美子
ひねくれて聞けば佗びしい風の詩　吉田　笑女
生き場所がここにもあった屋根の草　米澤　暁明
おっさんと言うなよ今日はモーニング　土居　耕花
渡し舟みんないい顔して渡る　澤田　千春
諦めたおとこと皿の花がつお　林　荒介
どう打つかこの石明日に賭けてみる　大野　武太
飛行雲熱い想いがいま届く　奥田　みつ子
貝の風鈴　膚のふれ合う音がする　西村　芙佐女
果てるまで虹を追いたい花ざくろ　伊藤　春子
筆をとる指は紙背の深さ知る　石田　清泉
負けて持つ土に涙と汗がしむ　大矢　喜一
句碑五年喜寿金婚の旅やよし　大路　美幸
母の選った柄は後から好きになり　岡田　ふみ
届かない高嶺の花を夢に抱く　太田　亀甲
ちょこまかとするから旗を持たされる　氏林　洋敏
もう帰り来ます頃なり水打とう　上田　翠光
太陽の笑顔を独り占めにする　奥山　美智子
へそのないひがみ蛙が合唱す　春城　武庫坊
聞きもらすリンゴの種のふるさとを　春城　年代

〈昭和六十年〉

金婚へ同じ歩幅で暮そうよ　芳地　狸村
出店の灯消えて目刺の香が残る　吉永　照江
連翹の黄につらなれる不孝者　高杉　鬼遊
橋の上でためらいを消す風にあう　角野　かず子
疑いをかけた夫婦のもつれ糸　長谷川　春蘭
前向きに行く太陽を友として　崎山　美子
ウインドーに見とれて夫を見失い　竹内　花代子
日日新た取り残されてしまいそう　上田　登志実
終点の点滅へ今日しかと生き　柿花　紀美女
いつからか夫婦茶碗がつやつやし　玉井　豊太

野良犬でいたい首輪を辞退する　寺田　裕美
瞳の奥の海は信じる外はない　神平　狂虎
砂煙の中からホームインの顔　岡井　やすお
なごやかな日々に埋もれてゆく野心　後藤　正子
悪友の口の重さを信じよう　二宮　山久
たたかいのその折りおりにうむ虚像　上原　逸
職責が白髪頭に変えていき　広井　すえお
北斎の描けぬ演習富士裾野　松尾　柳右子
三叉路の一つに私の道がある　古野　ひで
生あくびこらえ名曲もてあまし　林　春栄
手を振って行くふる里に借りがない　市川　鱗魚
家計簿を揺さぶり続けて子が育ち　北山　悟郎
もう一人のわたしの嘘を聞いてやる　土橋　螢
火も水も耐えて静かな足の裏　淡路　ゆり子

〈昭和六十一年〉

昨日の陽けさの陽あした遇える陽よ　中原　汲香
追憶の絵ばかりさがす冬画廊　広本　文子
しあわせの味がわからぬままに生き　中田　白李
刑法は識らず鰯を焼く煙　仁部　四郎
親切な人が説教してくれる　新家　完司
疲れたら来いと大樹が呼んでいる　田口　虹汀
道問うた人にまた逢う旅のこと　浜本　久仁於
空間に独りおかれている鼓動　松本　はるみ
生まれるも死ぬるも一人かもめ呼ぶ　細木　歳栄
花嫁となる人と行く通り抜け　松本　今日子
前書も後書もなく人を恋う　佐藤　藤子
寝そびれて時打つ音に焦る闇　茂見　よ志子
この道も空もつづいている他人　古川　美津枝
砂に水しみ込むような安堵感　片岡　智恵子
引き出しに一つ残ったイヤリング　新開　千代子
税金の額は中流かも知れぬ　羽津川　公乃
撫子や刻々曲る命かな　金山　夕子
大海へびくともしない島が好き　小林　妻子
七人の敵から守る妻の酌　渡部　さと美
ことばの木植えて子どもの帰り待つ　さえきやえ
真実を吐けば訛りもついて来る　川島　諷云児
石頭　風の方から避けて吹き　近藤　一途
直球のサインを妻はもう出さぬ　上田　佳秋

〈昭和六十二年〉

父の手に母を返して子等巣立つ　山本　玉恵
フルムーンいで湯にけむる秋の暮　釣　遊光
地球儀を回すと平和な国がある　永倉　僕川

子と遊ぶ父に肩書きなどいらぬ　竹治ちかし
叱っても母の温みに縋りつく　小白金房子
北国の旅の終りに引く御籤　山口高明
書き足してかきたして子に遠く住む　園山よし子
平凡に老いて素朴な自負の石　桑原掬水
二　三行母の情けの鞭がある　西村かすみ
青空にチョーク一本あればいい　西口いわゑ
ほころびを繕い合うて夫婦傘　高須賀金太
ひきうすを回せば民話こぼれ落ち　田中隆二
朝帰り理由の種が切れている　一瀬福一
摺鉢の底を今昔ものがたり　江原とみお
早く逃げる子が的になる鬼ごっこ　川上より子
百点をもらって急ぐランドセル　福元みのる
彼岸まで渡る錦を今日も織る　木村富美子
蟬半分鳴いて子供の網に入る　北川竹萌
甘え癖つけて見送る蟬時雨　山田高夫
かりそめの城と思えど花の種　桜井千秀
とりどりの花それぞれに台詞持つ　三宅保
泣きにきて赤い夕陽を見て帰る　木本朱夏
子にそそぐ愛は化石になろうとも　矢内寿恵子
死ぬまでを忙しそうに生きてみる　新谷忠昭

〈昭和六十三年〉

一本の傘に夫婦の歩が揃う　井上白峰
襟足を浴衣がのぞく夕涼み　横山為子
裁かれているのだろうか寒すぎる　河瀬芳子
真実を探し続ける時刻表　吉川一郎
人々の影を綺麗にしたい月　真喜内実
鳩は鳩人には人の朝が来る　信本博子
水軍の末がならべるレジャー船　三宅一郎
笛吹けば踊る阿呆の列に僕　加藤彩人
古里は雨下駄はいてひとまわり　田村新造
歳月が天の配剤の夫婦にし　藤解静風
取りとめのない一日で損をする　植村喜代
野次だけの議員無料のパスを持ち　青枝鉄治
大臣の素顔が好きな花鋏　鷲見章
寂しくて赤い物だけ見て歩く　小村てい子
うますぎる話に眉をなでてみる　江口明光
夕凪に大漁旗が活気呼ぶ　松井かなめ
鳴き交わす虫に呟く声もあり　森川まさお
合掌をほどかないよう生きていく　白根ふみ
守られて心音ひと日恙なく　久谷まこと
一本の草にも宿る露があり　岩本笑子

渺渺抄

小出智子選

死者を送る花が競っているではないか　和歌山市　木本　朱夏
七十歳未知なるものが待ち構え　米子市　鹿島　繭
こめかみの深いところに駅がある　米子市　林　荒介
来てしゃがむ妻と十年にもなるか　青森県　田中　叶
みんな去り積み木の家のひとり言　和歌山市　野々　圭子
杭をうつ櫟林がさわぎだす　鳥取県　江原とみお
生まれては憎しみまみれ飢えまみれ　尼崎市　田中　薫
いつもぎりぎりと思える蒲柳の身　米子市　白根　ふみ
水中花が吸いきった哀しみは青い　宝塚市　永田　暁風
発車ベル握り返した手を放す　東京都　山口　新子
隙を見せると私の赤が盗まれる　米子市　政岡日枝子
あまりにも可憐な花の名を尋ね　青森市　工藤　甲吉
見ていろよ七十までに自立する　枚方市　前　たもつ
信じててもいいのでしょうか茄子の花　富田林市　藤田　泰子
孫八人揃い仏に見てもらう　岡山県　矢内寿恵子
肘を衝く癖を残して秋が逝く　尼崎市　田辺　鹿太
ソロバンを合わす何でもないことさ　八尾市　高杉　千歩
欲望のひとつに杭を打っておく　鳥取市　小谷美ッ千
寸法の合わない服に慣らされる　鳥取県　新家　完司
ジレンマが沸々秋の絵の具皿　尼崎市　長浜　澄子

人形が迎えてくれる私の部屋　鳥取県　西原　艶子
魂をなぐさめにゆく風の盆　米子市　中井　ゆき
白桔梗哀しきことは口にせず　羽曳野市　吉川　寿美
秋一枚わたしやさしくなっている　八尾市　高橋　夕花
朱が足りぬまま黄昏る夫婦の絵　吹田市　山本希久子
おじいさんと話し帰りが遅くなる　鳥取市　美田　旋風
くるま止めここは長柄の人ばしら　吹田市　栗谷　春子
何時かいつかと別居の夢を抱きつづけ　兵庫県　倉垣　恵美
憧憬の人すっきりと老い給う　寝屋川市　森　茜
俊寛のそれからを知る島の風　鳥取県　原　みさを
目薬に夫婦揃って口を開け　尼崎市　春城武庫坊
目立つよう目立たぬように輪に溶ける　旭川市　朝倉　大柏
横顔を見せない位置で咲いている　砂川市　大橋　政良
かさぶたを無理にはがしてから孤独　大阪市　西出　楓楽
赤とんぼ窓に行き交う仮住まい　西宮市　西口いわゑ
孫五歳指切りばかりさせられる　大阪市　三浦千津子
節目からドラマがひとつずつこぼれ　堺　市　宮本かりん
幾人の心赦して冴える月　岡山県　土居ひでの
ふるさとの素顔貧しい一揆の血　札幌市　三浦　強一
年金にとどいて葦が靡かない　兵庫県　遠山　可住
体調がよい鉛筆がよく走る　和歌山市　松崎　幸子
過労死か蟻が一匹死んでいる　香川県　木村あきら
何時見ても阿蘇大涅槃おごそかに　能本県　増田　一乗
老母いまも暮らしの中に木綿糸　弘前市　相馬　銀波
根回しは終って居ない試着室　米子市　林　瑞枝
有刺鉄線真紅のバラは向う側　西宮市　奥田みつ子

もう二度と桃が流れてこない川　香川県　川崎ひかり
針箱に亡母の泪がまだ少し　名古屋市　藤井　高子
思いっきりビール生れ来てよかった女たち　八尾市　宮西　弥生
花時計待っているかと聞きもせず　和歌山市　古久保和子
ぷっつりと音がしたから切れたのだ　島根県　松本　文子
好き嫌い大事に二つ持って生き　福岡県　本田　忠男
おろそかに出来ぬ命をつなぐ水　米子市　光井　玲子
母はまだ達者　反覆する谺　今治市　月原　宵明
爪を切る老母の寝息をたしかめて　寝屋川市　籠島　恵子
妥協して残尿感に耐えている　大阪市　一本　勇太
子守歌唄うと海が凪いでくる　和歌山市　玉置　当代
行く雲を追えばふるさと祭り笛　出雲市　吉岡きみえ
金が要るときは大事にしてくれる　鳥取県　鈴木　公弘
花野ゆく本と眼鏡をふところに　和歌山市　榎原　公子
岩から岩に飛べる自信が今もある　米子市　田中　亜弥
一か八か逃げてみる気の甲虫　米子市　石垣　花子
赤ちゃんの泣き声おむつ干してある　尼崎市　春城　年代
影踏まぬ距離で保っている絆　出雲市　竹治ちかし
オーデコロンくらいの贅は許される　出雲市　園山多賀子
自分史は少し暈すと良くなった　鳥取県　橋本多哥由
秋の水に浸す再生する時間　和歌山市　田中　輝子
今しばらく置いてください傘の下　西宮市　門谷たず子
雑踏の中にわたしの影を消す　寝屋川市　岸野あやめ
親馬鹿が案ずる厄年の息子　豊中市　田中　正坊
刃こぼれの数は妻への詫びの数　綾部市　藤田　芳郎
仲直り柿の葉ずしを買っておく　藤北寺市　田中　透太

水饗の琵琶湖に足を浸してる　大阪市　町田　達子
いい齢になってもほしいオモチャ箱　和歌山市　山田　高夫
ネクタイを外して深く息を吸う　青森県　西谷　鐵郎
手順よく刻む包丁研いでおく　米子市　寺沢みど里
背なを押す風がけらけら笑ってる　八尾市　澤田　千春
下手な絵を描いてひたすらひとり旅　和歌山市　大内　朝子
追風に乗る長男を解き放す　和歌山市　山口三千子
ダイエット進まぬ中の萩すすき　和歌山市　福本　英子
夏から秋へ挨拶ながくなってくる　和歌山市　吉村さち子
もともとのゼロへ力が湧いてくる　大阪市　日阪　秋子
ぶちあたり金平糖のごとく生き　松江市　松浦登志子
ふるさとの山に落ち着く旅疲れ　五所川原市　斉藤　劦
飛行機に乗れば地球を出た気持　唐津市　山門　タミ
ほめ殺しいじめ殺しもある中で　寝屋川市　井上すみれ
快適な目覚めガラスが透き通る　放方市　濱田　良知
危険水位を知ってる愛はほどほどに　米子市　小西　雄々
今日のいろ明日は多彩にするつもり　大阪市　稲本　凡子
足し算が効を奏した笑い声　岡山市　川端　柳子
いく度か虎の尾踏んで今日がある　和歌山市　池永　正雄
白状をしようかリンゴ剝きながら　鳥取県　田村きみ子
栗ご飯母の話がまだつづく　鳥取県　土橋　螢
斗酒辞せず島原生れの妻の胃よ　大阪市　上田　柳影
しばらくは睨み合ってる甲虫　和歌山市　細川　稚代
嫁の手が行き届いてる光ってる　鳥取県　石谷美恵子
なに着ても似合うと姑は可愛いね　和歌山市　田中　みね
ワープロに彼の個性が消えている　鳥取市　植田　一京

五十年妻も我慢をしただろう　大阪市　桝本　露児
開発に桃の流れて来ない川　豊中市　江口　明光
お互いに尻尾握って無二の友　岡山県　藤原　一平
乱伐の山報復を忘れない　和歌山県　中後　清史
新聞を読んだくらいで夜は明けぬ　岡山県　小林　妻子
徹子の部屋沢村貞子よく喋り　河内長野市　水谷　笙子
五十年帰らぬ人の日記読む　鳥取県　さえきやえ
裏の裏知ってアイロンかけてます　米子市　茂理　高代
秋風に蚊取線香使いきる　横浜市　清水　潮華
母が渡る河に波風立たぬよう　鳥取県　岩崎みさ江
弥次喜多に似た老いらくの膝栗毛　大阪市　板東　倫子
一国の域主とあれば草を抜く　唐津市　市丸　晴子
友だちが軍歌うたうと泣けてくる　鳥取市　春木圭一郎
空の青風邪など引いて悔いている　豊中市　辻川　慶子
お見事と言いたい蟬が鳴き止んだ　西宮市　牧渕富喜子
田畑を空にして村の運動会　寝屋川市　江口　度
へそくりが上手になって妻太り　倉吉市　奥谷　弘朗
この会も女なしでは語られぬ　米子市　青戸　田鶴
単身が野菜を値切る手を覚え　唐津市　宗　弘
君が代と日の丸学び舎に還り　岡山市　井上柳五郎
運命をあやつるポチの血統書　米子市　木村冨美子
妻の言う通りにしゃくな雨が降る　八尾市　吉村　一風
来る人がきて賑やかなクラス会　和歌山市　青枝　鉄治
正月をプラン倒れにせぬように　大阪市　津守　柳伸
手を振って友秋風の中へ消え　鳥取市　近藤　秋星
残高が減っても子等に逢える夢　貝塚市　池田寿美子

くもり空月見だんごを食べすぎる　守口市　森川まさお
父親を甘やかせたと娘が叱り　河内長野市　植村　喜代
気休め言うて支えにならず悲しけれ　大阪市　本間満津子
孫連れて赤信号は渡らない　岸和田市　田中　文時
病む妻と静かに語る団扇風　茨木市　藤井　正雄
真っ白に軍手乾いて明日の唄　岡山県　福原　辰江
婆ちゃんのメモに縁日二つ三つ　大阪市　藤田頂留子
愛情に触れると弱い涙壺　岡山県　福原　悦子
ハイと言う返事の好きな地蔵さま　弘前市　中山　雅城
遺族年金の計算をする夜長　河内長野市　橋本　弘美
万歩計朝日出るころ丘の上　仙台市　川村　映輝
愛される母をみつめて娘は育つ　堺　市　神原　文
あなたへの傾斜隠せぬ一句詠む　柏　市　上鈴木春枝
連休が明けて草臥れどっと出る　鳥取市　杉本　孝男
労ってくれる夫に従いてゆく　岸和田市　古野　ひで
足跡のない来た道をかえりみる　鳥取県　林　露杖
ストレスを互いに持って打ち解ける　鳥取市　谷口百合子

朱夏さんの句。作者のきびしい川柳の眼を通して、弔いの場の様子を率直に表現されている。諷刺とも見えるが、それ以上の深い思いのあることが汲み取れる。**繭**さんの句。六十歳と言うのとは違い七十歳となると、ずっしりと心に重く響くものがある。何が待ち構えているかも知れないと思うおのがよく生かされている。**荒介**さんの句。駅という比喩によって思いをひろげようとされている。思考の深さを駅のイメージと結び付けて、読者の心の中で思いを凝らすのも一つの鑑賞の楽しさである。**叶**さんの句。一つの事に十年の経緯がある。横にしゃがむ妻との大切な歳月ではあるが、このようにして夫婦の絆は強くなってゆくのであろう。

川柳と女性

川柳こぼれ話

田中正坊

昨年六月号の目次下エッセーで、映画・小説における男女による評価の違いについてふれ、「川柳の世界でもこういうことがあるのではないか」とのべ、「稿を改めて〝女性川柳〟について考えてみたい」とした。たまたま斎藤大雄著『情念句―女性川柳の手引き』を読んだことに触発されたもので、もし構想がまとまらなければ、この本の紹介でお茶をにごそうという魂胆もあった。ともかくこの問題にチャレンジしてみよう。

このところ川柳界に女性の進出がいちじるしいことは、改めてのべるまでもない。古川柳にさかのぼると、『柳多留』などには作者が女性とみられる句は皆無とされている。近代に入っても、大正時代にようやく井上信子や三笠しづ子の名が現れるくらいで、川柳は正に男性の文芸であった。それが今日のように急増したのは、女性の社会進出とカルチャー・ブームに関連している。

では川柳界における男女の比率はというと確かな数字を示すのは難しいが、作年、『番傘』誌が行ったアンケートの男女別回答状況では、同人が男性五三%に対し女性四七%、誌友は男女比が逆転して四九%対五一%、合計では男性五一%・女性四九%で、ほぼ同率としていいだろう。今や川柳の世界においては、かつてのように女性が特別の存在ではなくなっていることを物語っている。

斎藤大雄が言うように、「これは日本川柳史始まって以来のことで、いままで男性の文芸であったものが、いつの間には女性の文芸へと変わりつつある」とするのはいささかオーバーだが、各柳誌における年間賞や各地の川柳大会での順位賞・秀句賞を女性作家が占める率が高まってきているのは事実である。では女性川柳の特色とは何であろうか。

これについて川上三太郎は、「女性の句とは作者が女であるということではない。句が〝おんな〟でなければならない」とし、また石曽根民郎は、「女性の句は男性の感受し得ぬ句境があり、そこに女性の句のひらめきとなってくる」とのべている。

瞳の端で女の情が青く燃え
恋成れり四時には四時の汽車が出る
白昼夢　女はつねに抱かれる
菜の花菜の花子供でも産もうかな
愛咬やはるかはるかにさくらちる

○

ひとりになると女の弱さどっと出る
子を産まぬ約束で逢う雪しきり
手紙焼く女のいのち絶つように
女ひとり枕は白く明けやすき
蒼い月ちいさき乳房誰のもの

前者は時実新子の『想夫恋』、後者は森中恵美子の『水たまり』から抜いた。女性が作った〝おんな〟の句ではないかと思う。引用ついでに『情念句』から十句を紹介する。

胎動すこの子誰の子阿修羅の子　山茶子
櫛の目が通り今日から妻であり　道子
黒髪の先から業の華が咲く　悦子
晴れた日は陽炎の立つわが乳房　瑞枝
裏切りの妬心　真赤なバラ狂う　スエ子
わたしいま女の秋を通過中　葉
もの言えば毀れる壺があり女　茂子
あの人はもうかえらない砂時計　方子
きのうなら赦せた手鏡を伏せる　芙巳代
月おぼろ老いた女の　花結び　うめ

はじめにことわったように、『情念句』の中途半端な紹介に終ってしまった。次回にはこれを枕にして論考らしきものを書きたい。

女性コーナー

黄香の花

八木千代選

バラが咲くと思う必ず薔薇は咲く　西宮市　奥田みつ子
毒を盛るつもりはないが皿はある　八尾市　村上ミツ子
秋の天　思い違いはせぬように　藤井寺市　高田美代子
非常袋の中の季節が狂い出す　尼崎市　春城　年代
紫陽花のプロセス枯野から見つめ　岡山県　矢内寿恵子
キャベツ真っ二つあくまで白い真実　熊本市　永田　俊子
大胆なポーズはお止し曼珠沙華　和歌山県　小倉　アサ
恋成った蟬の死骸と思いたい　羽曳野市　芦田　絢子
仮の世も辛いことには違いなし　島根県　松本　文子
鳥たちが相談ごとをする月夜　米子市　政岡日枝子
しなやかにどんな風にも揺れてみる　富田林市　藤田　泰子
疑いを晴らす修正液がある　今治市　塩路よしみ
私は何かのタマゴだと信じ　鳥取市　石上　悦子
秋風よ会いたい人に会ったよう　吹田市　栗谷　春子
火をつけて藁はみるみる神になる　米子市　青戸　田鶴
秋風に人間くさい背を晒す　鳥取市　羽津川公乃
わたくしの中で厳しい坂が増え　米子市　木村　春枝
生き急ぎ仮面が少しずれてくる　和歌山市　田中　輝子
定位置にこだわる朝の一番電車　堺　市　桜沢あか里

透明になろうと円盤がまわる　鳥取県　吉田孔美子
回想のページは海へ沈めよう　名古屋市　藤井　高子
舟虫にならい見事に四散する　寝屋川市　宮崎　菜月
辞書と鈴　冬の旅にも手放せぬ　米子市　野坂　なみ
秋風よ他にも道はあったろに　和歌山市　榎原　公子
厨房に入る男を誉めそやす　倉敷市　小野　克枝
月に匿され帰れない私の手紙　和歌山市　野々　圭子
かくれんぼ誰も探して欲しくない　米子市　茂理　高代
弦が切れふいに始まる女の戦　和歌山市　木本　朱夏
老いること少し汚れて新しく　富田林市　片岡智恵子
わたしいまダッシュかけたら挫折する　兵庫県　倉垣　恵美
音のない老母はガラスの部屋が好き　米子市　石垣　花子
雲百熊ながめて飽きぬ物思い　寝屋川市　坂上　高栄
うぬぼれかがみから突然に悪寒　寝屋川市　森　茜
北枕に寝てから咳が出はじめる　大阪市　中村　淳子
私の死角で蜘蛛が生き延びる　鳥取県　岩崎みさ江
二の腕に一気の力　種を蒔く　米子市　林　風子
交番に警官がいて珍しい　横浜市　清水　潮華
宇宙からいずれ返事がくるだろう　大阪市　神夏磯典子
未来永劫手の鳴る方へ行かせない　米子市　光井　玲子
噂好きの街に私も住んでいる　和歌山市　古久保和子
友として何をなすべきこんな時　西宮市　宮口　克子
影長しわたし私が先に出る　羽曳野市　牧渕富喜子
キャベツ剝ぐ一枚ずつの自虐かな　和歌山市　吉川　寿美
タヒチの蒼い海から人買いがくる　岩本美智子

満月の裏で古傷なでている　大阪市　鍛原　千里
遠い日は香水ビンの中で枯れ　米子市　中井　ゆき
私の後先にある風の渦　出雲市　石倉芙佐子
一通の手紙が甘い乱を生む　西宮市　西口いわゑ
火遊びを覚えた毬は帰らない　和歌山市　山口三千子
シャム猫に弱音を見せたことがある　米子市　木村富美子
踏切りの向こうも私気づいてる　茨木市　堀　良江
仕合せが逃げそう紐を巻きつける　米子市　田中　亜弥
ひょっとこ面あとの人生笑いましょう　八尾市　宮西　弥生
しなやかに礼節を知る竹の箱　米子市　林　瑞枝
錆びついた頭に子守唄がある　鳥取県　田村きみ子
順番をおもえば肩が軽くなる　米子市　寺沢みど里
秋立つや千体仏の眉しずか　弘前市　佐治千加子
象さんの団体が好きお供する　米子市　金山　夕子
賞味期限　腕の振るいの見せどころ　和歌山市　福本　英子
涙から遠のいているわたし見る　米子市　白根　ふみ
岸辺から離れる勇気持っている　鳥取市　坂田和歌子
萎えていく脅え紛らす砂時計　八尾市　高杉　千歩
若者よ君にも老いがすぐに来る　米子市　新　正子
カナリアは詩を忘れていなかった　鳥取市　小谷美ッ千
人ごころ揺れていびつになった城　米子市　鹿島　繭
スカートはすこし緩めに萩ききょう　和歌山市　福井　桂香
負けて勝つこころの波を高くして　鳥取県　土橋　睦子
大切な木には少しの水をやる　芦屋市　黒田　能子
お隣が相続税を気になさる　広島市　森田　文

蹴とばしたはずのボールにたたかれる　米子市　澤田　千春
友だちとおもっていたのがまちがいだ　八尾市　高橋　夕花
無言電話ふと雑念がわいてくる　寝屋川市　籠島　恵子
十五夜に昔話を信じよう　香川県　川崎ひかり
君のすべてわが大脳を占拠する　柏　市　上鈴木春枝
ひまわりが私に向いて咲いている　東京都　山口　新子
嫡やかな昔の文と落ち合った　米子市　服部　朗子
サクラサク我が家氷河期乗り越える　横浜市　川島　良子
紫苑咲く家のまわりにごみはなし　守口市　結城　君子
ペアルック寡黙になって草を引く　堺　市　神原　文
ふる里の関所と思う墓の草　鳥取県　石谷美恵子
力瘤入れると笑う昼の月　岡山県　土居ひでの
過労死の前に叱って欲しかった　唐津市　浜本　ちよ
沙羅双樹私もここに咲いている　松江市　佐野木みえ

奥田みつ子さんの句はきっぱり「薔薇は咲く」と言い切ってありますのに、妙にさびしく聞こえます。信じなければ咲いてはくれぬと、揺れながら必死に思いこんで、我とわが心に暗示をかけ直して生きる。自信で断定するのではなく、そう書かずにいられない調べが響いてきます。**村上みつ子**さんの皿。決して毒を使うことはないと前置きしながら皿を用意しているという怖さ。心の裏側を抉って、ぬけぬけとさらさらと、小気味よく拍手したくなります。**高田美代子**さんの秋の天への視点は真実を優しく説かれています。それは次なる季節をいとおしんでの神の恩寵でしょうから。おぼろげな不安を祈りに替えて底にひそむものを思い違えぬようにと天は秋を澄みます。**春城年代**さんの非常袋には全身が震えました。声を殺した慟哭が淡々と書いてあるだけにいっそう心に届きます。そうですね。あれから春、夏そして秋。袋の中身は一巡しても、凝結した思いがこもっています。

噂

西口いわる選

しょせん噂されど噂という怖さ　ちかし
噂など馬の耳だよシャボン玉　ミタ
二三軒向こうで噂倍になり　あきら
村の噂に　にこにこしてる地蔵様　佳雲
かすみ草噂ばなしを聴き飽きる　精子
彼女とは噂が結んでくれました　蕗児
いいわけの利かぬ噂が噴火する　年代
社の噂みんな聞いてる縄のれん　よし津
そっときた噂はそっともらっとく　一風
小便小僧に私の噂聞いてみる　杜的
噂立つころがよかった若かった　南奉
頂上に立つと噂の風起こる　俊路
左遷地へ先に届いた飲む噂　英子
噂の死角で月に一度の逢瀬です　たず子
噂など軽くいなして実力派　英壬子
空深し噂を空へ溶かし込む　あずき
コスモスも噂ばなしを待っている　隆
真相に遠いが面白い噂　満秋
伝えてほしい話を噂として流す　シマ子
ヨガをするエリート白い目で見られ　恭昌
噂立ちいよいよ絆深くなる　よしみ
パスポート未婚の母になる噂　正剣
銀行の不安噂が噂呼び　甚一
良い方の噂は誰も聞いてない　不二
消し壺の蓋から漏れてきた噂　高夫
噂ではとてもきれいな花という　艶子
転ぶたび噂に強くなっていく　芳郎
誇らしく亡父の噂を聞いている　富美子
美容院噂の種に辿りつく　典子
秋が来て海は噂をしなくなる　ミツ子
風の噂風に返してしまいましょ　こころ
黒い噂町の天狗の鼻を折る　忠男
七十五日済んでペースをとり戻し　重人
おまけだと思えば耐えられる噂　保州
古傷の噂を突く出世坂　俊子
気にかかる噂に無花果が落ちた　富喜子
出家したそうなオウムにいるそうな　勝

佳

途中下車しばらく噂するだろう　美代子
噂など気にせぬ男太い眉　武庫坊
一喝で散った噂のシャボン玉　あやめ
噂って寒がりなのね着ぶくれる　正子
歳月がうすむらさきにした噂　希久子

人

生きる章死ぬ章噂つきまとう　京子

地

白百合のように噂の中に立つ　日枝子

天

恩人の噂を隅で聞いている　小池しげお

軸

噂にもならぬはかない恋だった

束縛

白石春嶺選

ヘッドギアはずして笑顔いつ戻る　晴子
束縛の倖せ朝のレモンティー　英壬子
単身赴任妻のリモコンから逃れ　恭昌
束縛があってバランスとれている　日枝子
ご先祖の田畑が街の灯を拒む　芳郎
束縛から逃げて近所のワンルーム　正雄
束縛をしてはならない豆の蔓　蕗児
叱られる気配に猿の芸つづく　勝

こころ

「おーいお茶」が居るから今日も出られない　一風
塩砂糖酒に束縛されてます　満秋
掌の線に未来を縛られる　彩子
束縛を断ち切る鋏研いでいる　典子
束縛の中で真直ぐな樹が育つ　宵明
妻ある日自由要求してパート　ミツ子
仕来りと言う名の綱に縛られる　よしみ
束縛はしない子亀よ波が呼ぶ　水煙
束縛をすればするほど娘が跳ねる　あずま
横文字の街でしがらみ解き放つ　豊
束縛を受けた男の心電図　伊津志
束縛が好きな真珠のネックレス　洋
あの時は枷と思ったたいい絆　甚一
晴耕雨読やっと自由になりました

束縛をされぬ別姓説を取る　義男
縛り目がボチボチ緩くなる九条　ただし
束縛はせぬが意見はする積り　久仁於
束縛を解かれ一気に滝の水　佳雲
どこまでが自由か電話よくかかる　年代
束縛をされて鋳型にはめられる　新造
乱れ出す私を縛る杭を打つ　富美子
束縛を解くと自由な空がある　公乃
束縛が解ける呪文が見付からぬ　芳水
妻の持つ見えないひもにおよがされ　山久
背信の罪良心に縛られる　清史
ある日から一つの影を放せない　艶子
愛の名に隠れた鎖鍵がない　ツネ
束縛をされて女は脂肪過多　時弘
蜘蛛の巣のような愛から逃れたい　あやめ

佳

束縛がとけるとぼけるかも知れぬ　南奉
人間をがんじがらめにする時計　正剣
子を産んだ日からぐるぐる巻きになる　あずき
束縛も愛だとわかる長い刻　富喜子
縛られに行く吊皮にぶらさがる　重人

人

しがらみを捨て風となる山頭火　強一

地

束縛へアンネの日記泣いている　京子

天

ドアチェーン鬼一〇〇匹を束縛す　小池しげお

軸

容れられぬ恋の背後にある家風　典子

添える

小林妻子選

ひとことを添えて情けに血が通う　正子
添え木する明日の命の脇役に　ツネ
添い遂げる約束だった三年目　正雄
次の世も添える絆の米を研ぐ　権悟
釣銭に笑顔も添えて小商い　高夫
商魂の添えもの妻が踊ってる　帆雀
脇役の姿で添うたかすみ草　重人
ごめんなさいだけを添えればいいものを　洋
黄昏て添える言葉のない夫婦　希久子
お値段がつく添え書きのある名刺　四郎
添え状の名刺がいやに肘を張る　高明
シャンペンに添える言葉を選っている　正剣
マヒの児の添え木に母の年がない　美代子
近況を添えて欠席和らげる　通彦
赤ちゃんがママに添い寝をしてあげる　和枝
親馬鹿と言われ付き添い役が好き　克枝
妻を添えてから刺身が生きてくる　雅城
生涯を添い遂げて来た花の彩　玉恵
影だけが無冠の私に添うてくる　俊子
連れ添うた傘の広さへ惰眠する　寿美

螢

お見舞に添える五七五の詩　宵明
父からもよろしくとだけ書いてある　英子
五十年連れ添うて目が物を言う　杜的
添削の赤字いっぱい背負てくる　保州
添寝して唄うてやりたい老母の顔　艶子
何よりの見舞は添えてある手紙　あき
独り酒妻の思い出添えて飲む　ちよ
良妻が何時も刺身のケンで座し　しげお
女とは刺身のつまの如きもの　日枝子
巻き添えの猫も数日帰らない　雄々
花束に添える言葉は決めてある　恭昌
追伸の中に決心添えておく　清芳
軽い嘘添えて政治家らしくなる　寿恵子
見舞客やさしい嘘も添えている　幸夫
幸せに添ったと書こう遺言書　武庫坊
口の端に添えるひと言から和む　日枝子
添い遂げた老妻静かに数珠を揉み　年代

佳

一筆を添えると鯉が生きてくる　ふさ子
添花をしながら先祖とも話す　可住
影の形に添うごとく萩の寺　雄々
真心の外には添える物もなし　遠山可住
お料理を習いパセリがちょんと乗り　年代

人

割れもののよう百歳に手を添える

地

思い出してと一行添えてあるはがき

天

ばあちゃんの知恵がこそっと添えてある

軸

添い遂げた金婚の老妻まぶしかり

初歩教室

題 ― 元気

吉岡美房

。電話から父母の元気な声を聞く

これと同じ句が三句もありました。同じ着想でも様々な方向から見ることも必要です。

それでは添削句から発表します。

老妻の入れる茶元気の特効薬　睦子
（元気出るお茶を老妻入れてくれ）

元気かと母に聞かせる父がいる　悦子
（元気かを母に聞かせる父である）

鰻食べ夏ばてせずに元気です　美寿子
（好きなもの食べて元気な老い二人）

お陰様元気な妻に引きずられ　三重
（妻元気いまだに僕をリードする）

一巡り元気な妻に秋が来た　瑠美子
（季が巡り妻の元気に秋を見る）

お元気ですね言われる齢となり　一典
（お元気ですね素直に聞けぬ齢となり）

吾が取り柄元気印と言った筈　幸次郎
（若い日の元気印を見失う）

薬より金より元気願ってる　信敬
（金 名誉 要らぬ元気がほしいだけ）

傷負うて元気な頃を悔んで見　美恵子
（若い日の元気ときどきいとおしむ）

元気だと馴れぬ運動して捻挫　(中)弘子
（過信した元気捻挫の足を見る）

朝顔の朝の元気が私好き　文子
（朝顔の朝の元気と響き合う）

好き嫌い無くて元気に太る夏　幸枝
（食べただけ太る元気が怖くなり）

久々に元気を湧かす夫の顔　郁子
（元気出る銚子一本よけいつき）

元気です見栄も脂肪も捨てました　和歌子
（見栄捨ててしっかり食べて元気です）

叱られてはだしとび出す元気な子　君江
（叱られてそこらに居ない子の元気）

日焼け顔元気とやる気校門へ　俊一
（真っ黒に焼けて二学期皆元気）

夏終り元気な子等の黒い顔　三津子
（新学期元気溢れる通学路）

通学路元気な声が頓もしい　宏章
（学校も慣れて元気なランドセル）

熱帯夜一人居寝莫蓙はばからず　隆
（大の字の昼寝の元気子の寝顔）

やさしさの中程に居る元気達　ひでの
（中程のやさしさでよし孫元気）

保育器の宝元気にのびをする　ますみ
（保育器で私の宝元気です）

貧しいが宝は家族みな元気　志華子
（家中の元気宝とする我が家）

貧乏の子沢山なれど皆元気　ミツオ
（子沢山家に合わせて皆元気）

疎遠なは元気で暮す証です　克美
（子の疎遠元気だからとあきらめる）

元気だよ葉書の余白息子の字　こころ
（元気だと息子の便り素っ気なし）

元気かいみな元気よと母の声　辰男
（電話して母の元気を確かめる）

背伸びして見送る老母元気です　タツヱ
（見送ってくれる元気な里の母）

元気な親が居て何よりも嬉しいよ　侑里
（この齢で元気な父母が居てくれる）

唸り節湯舟の父はまだ元気　彩子
（湯で歌う父は音痴のまま元気）

棘のある姑ますます元気です　佳典
（いつまでも元気な姑で棘があり）

秋風が幸せ運び病逃げ　トヨ子
（秋風とともに元気がよみがえる）

元気でも一病は持つ年頃だ　多哥由
（一病をなだめて生きている元気）

病院に元気な自分が恥かしい　太郎
（お見舞いに行ける元気に感謝する）

天高しやっと元気の出た胃腸　武治
（天高くますます元気出る胃腸）
検診の結果が元気なくさせる　まさと
（検診に一喜一憂する元気）
あの頃は元気に旅をしてたのに　ふみえ
（去年まだ元気に旅をしてた友）
わたしより元気な友に先立たれ　ふさ子
（一番の元気自慢が先に逝き）
私の元気はウロの袋が呉れてます　円女
（新しい元気貰った退院後）
何にでも挑戦したい空元気　素子
（空元気何と言おうと挑むもの）
ドリンク剤飲んで元気の気を出させ　露芳
（信じたらドリンク剤で出る元気）
正確な古いぼんぼん掛時計　弘雄
（三代を元気に動く掛時計）
シャボン玉笑顔を写し元気でね　康裕
（シャボン玉元気な顔がうつってる）
ぼんやりが祭のときは元気もん　日出子
（のんびりが急に元気になる祭）
空元気ライバルだけに見せていた　(藤)弘子
（意地張って怪我しただけの空元気）
秋日和元気な声が山登る　忠男
（秋日和元気こぼれる登山道）
朝歩き元気ですねに励まされ　一乗
（ジョギングの元気仲間に励まされ）
自然との共存学ぶ元気村　方子
（環境がつくる元気な長寿村）
核実験反対するも元気なし　真一
（核実験反対政府元気なし）

着想・表現ともに立派な句

元気出す百になるにはまだ遠い　崇
秋風とともに元気な虫の声　旭
まだ元気好きなゴルフで確かめる　勝巳
元気だけ取り柄に感謝して生きる　一壺
元気だとたった一言子の便り　アキ
秋風が吹くと元気になる案山子　鐘造
生傷の絶えぬ孫です元気です　玲子
三人も元気で曽孫会えた幸　(大)静子
八十路まだ曽孫と遊ぶこの元気　志重
八十の元気曽孫と口げんか　絢子
ふるさとへ鮭の元気が溯る　強一
古希控え夫婦元気でいれる幸　義男
ふる里を元気な母で出たがらず　八重子
よく笑う元気な老母に励まされ　剛治
風の子は塾で元気をもてあます　ミツ子
元気かを確かめ友と長電話　よし子
元気元気それだけでよい父八十路　康子
病院へ行ける元気があればよい　芳水
これでもと昔を語る祖父元気　正
家忘れ元気を買いに旅に出る　孝子
目出度さは夫婦で元気競い合う　タミ
くわがたの元気な順に背番号　幸夫
日焼けした元気な子等のいない街　りつえ
夏ばてを叱咤している蟬しぐれ　幸子
恩がえし元気なうちのボランティア　ルイ子
茶柱の立ったくらいで出る元気　碧
明日への元気さがして縄のれん　春枝
まだ元気靴に暗示をかけている　君枝
地車の元気は恐いほど溢れ　とし子
宅配で母の元気が届けられ　(坂)静子
子の元気襖の穴が埋まらない　ツネ
まだやんちゃ出来る元気を溜めている　(津)武春
波乱万丈抜き手を切っている元気　めぐみ
まだ元気満期の保険通り越す　さち子
病床で元気なときの夢を見る　美子
弾けとぶ元気がほしい鳳仙花　淳子
元気だが笑顔もほしい末娘　木管
お隣がお医者さんだが皆元気　黎之助
アルバムは元気な頃の顔ばかり　行子
途中下車母の元気に触れたくて　キヨエ
筆跡に元気な父が生きている　高栄

私の句

超元気命を賭けた日もあった

◇

題「愛」　11月15日締切り（1月号発表）

宛先　〒583　藤井寺市道明寺2丁目11—4　吉岡美房

花地物語

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

堺川柳会（前月分）　河内　月子報

うっかりと自分を晒す痩せた風　美代子
花には触れず蝶は斜めに翔んだだけ　みつこ
野晒しのなさけが丸い顔にする　泰子
体調の不覚はビールだけで酔い　文時
地ビールのホップは自我を押し通す　森子
好きだとは言えずビールの泡になる　美子
企業献金　法に触れぬと言うけれど　ダン吉
さらし餡こねてる母の小さくなり　冬虹
うっかりと猫のサヨナラ聞きもらす　昭子
乾杯のビールは泡も残さない　二南
手を触れた余韻は夜更けまで続く　洞庵
金のことらし本筋に触れず去に　紀美女
本心に触れたい席の箸枕　勇太
ビアガーデン提灯も泣くにわか雨　頂留子
猫のひげ見ればいたずらしたくなる　東雲
胸許に触れるな危険と書いてある　彰
種袋　期待が大き過ぎないか　半銭
生きたくて命半分晒さない　楓
枇杷の種大きな顔をしすぎます　かりん
わが人生末摘花と柿の種　岳人
二三日猫も夫も帰らない　鬼遊
嫁姑　種も仕かけもありました　春香
お隣の猫のトイレがうちにある　摩耶
猫のお土産を忘れず買って行き　梓
天の川今夜ビールで乾杯ね　文
いつからかわたしを晒す腹が出来　満州
弱点を晒すと世間渡りよい　天笑
種のないぶどうと男見比べる　月子

堺川柳会　河内　月子報

被災地のテントを思うこの暑さ　小雪
引き算がゼロになる日がもう近い　彰
あっさりと負けてスタミナ残しとこ　楓
生きるのは大変だなあ　炎天下　扶美代
陽が沈む人生ドラマ見るような　昭子
子を産んだ痛みはとうに忘れてる　美代子
ロボットにあっさり職を奪われる　摩耶
飛ぶことを忘れた絨毯干している　美子
すててこの好きな父さん元気です　冬虹
雨が好き真っ赤な傘がさせるから　喜代子
あっさりとバツ一ですと胸を張る　寿美
引き算を嫌い上手に溜めている　寿恵子
好きだった人も主人も同じ趣味　菁風
古里も大変なんだ過疎の波　妻子
あっさりとかわされてから考える　春香
帆船はじっくり風を待っている　星子
海に出てあっさり彼を許せそう　洞庵
船よりの花火大きく海に咲き　春蘭
今聞いたお名前さえもすぐ忘れ　満州
最後まで聞いて大変だと悟り　一二三
下手やけど拍手いちばん多かった　天笑
袖を引く妻の瞳が物を言う　勇太
八月の汗を終生忘れまい　金太
いつまでも下手で先生よろこばす　梓
アイデアを引き出すお茶を立てている　文
線ばかり引いて世間が狭くなる　泰子
好きな人をいつも遠くから見てる　紀美女
勲章が一杯ついた服が好き　照
あっさりと引くしたたかな魂胆で　半銭
母さんを奪う小さな弟だ　かりん

尼崎いくしま川柳会（前月分）　春城年代報

人妻を愛すカンナの街昏れて　正一
灼熱に恋は捨ててもカンナ咲く　一笛
甲子園の球音遠く聞くカンナ　紫香
あの雲は世界の裏を知った雲　夢之助
霊能の世界さ迷うサイコパスの幻覚　義芳
私をまだ描ききれぬ絵の具皿　澄子
わたしの中の悪魔がノラにさせたがる　石舟
出不精な私の影が欠伸する　伊三郎
海が好きテトラポットも私も　(松)芳子
三面鏡知らぬ私を見付け出す　武庫坊
行間に私を伏せて置くことに　年代
人の死をいくつも重ね私の八月　薫
からっぽの私を隠す深目の帽子　正治
もう一人の私がいつも謀叛する　まさお
五十年あの日と同じ蟬時雨　杜的

バシー海峡風ぎて敵潜より逃げる　吉太郎
霊山に昨日の顔を置いてくる　歌子
生きのびて洗い晒しのシャツを着る　喜美子
ブルーシート漸くとれた鬼瓦　比ろ志
人形ぶりお七が浮ぶ鹿の子百合　正子
他愛ないことも暑さで気に障る　渉
八月の雲は哀しい色に染まる　源一
蛍火のもえて消えたり無縁墓地　光穂
あるときは童女となりぬ火の麒麟　(河)芳子
文もなく心の届く送り物　キク子
夏の花つぎつぎ咲いて夏はゆく　求芽
雨の日は雀が窓へ来て覗く　すみ
交際が深くて言葉飾らない　白渓子
戸籍係はちょっと猫背で島に老い　水聲
ソバ枕暑い暑いを聞き飽きる　鹿太

川柳クラブわたの花　片上　英一報

言い過ぎを詫びて人間まるくなり　一風
ふたつ三つ人間もっている仮面　ますみ
上下左右斜めにうしろ試着室　隆
子の家で父は小さく住んでいる　友甫
お客さん部屋片づけてもういない　泰成
茶の間兼書斎で便利しています　剛治
犬がいる部屋でケーキに手が出ない　まさと
なにもかもまあそれなりにワンルーム　英一
片づいた部屋で却って落ち着かぬ　ミツ子
時差ぼけが部屋の鍵までかけ違い　トシエ
隠れ部屋わが家だったら何処にしよ　実希子
子が巣立ちやたらと広い部屋になる　幸子
ここだけの話に部屋へ通される　幸枝
三世帯嫁の息抜く台所　君江
雑然と整頓されて一人居る　春子
決心をさせたあなたの片えくぼ　じゅん子
この辺で決心しよう妥結する　明子
この地球亡びる火種人作る　龍
頼られる親でありたい欲がある　朝子
子に頼る心を妻に見透かされ　美津留
お見舞の花が明るい男部屋　鬼遊

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

母の愛汲めども尽きぬ深い井戸　清芳
押しつけの善意断わり気が重い　留吉
うだるよな暑さ蹴とばし西瓜割る　弘直
お祭りに履く靴箪笥の上にある　喜美子
寝たきりも祭り囃子に血が騒ぐ　欣史子
汽車遠く聞える夜は亡母と居る　シマ子
とうに無くなった本当の汽車の旅　香住
ほっと一息手足だんだんだるくなる　能子
だるさなど言うてはおれぬ黒を着る　田実子
極楽の蓮池に座すだるい日よ　あずき

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

手を貸して損も一緒に背負い込み　くに子
過労死か蟻が一匹死んでいる　あきら
損しても笑って居れる親心　かおり
仏壇を締めて再婚話する　マツエ
まだ少し我がまま言える老母がいる　ひかり
熱帯夜羊の数も役立たず　放任
人生の器に盛った損と得　マサエ
虫籠を提げてあの日の風に逢う　くに子
若い気でいても鏡は正直な　治延
千円の会費ぐらいは呑んでくる　吟笑
ビール漬色艶さえて食すすむ　文仙
欠伸しても一緒に過ごす夫婦仲　いさむ
バーゲンに吊られて財布空になる　正雪
主流からそれて情けが身に滲みる　ふみ
ドン底でも損して得する事もある　中2なみ子
肩並べ亡母と見た日の遠花火　はつ恵
八十年生きて一クセ直らない　チカエ
パチンコで家買うほどに精を出し　坊太郎

富柳会（前月分）　池森子報

枯すすきあっさり夫婦しています　冬虹

佳句地十選（10月号から）

仁部四郎

ランドセルの汗へ西瓜が冷えている　シマ子
玄関の花知ってます舞台裏　路子
一位泣き二位さばさばと表彰台　つよし
種まき五日もう合掌の芽がのぞく　みつ子
朝市の語る歴史も買うてくる　一風
若い日を塗り直したい戦中派　はる子
人間を語り明かして通夜の席　英一
僕の影背中少うし曲ってた　萬的
主義主張通しピンチに気付かない　正治
あれが青春腕組みあった労働歌　千秀

オウム教貧しい教育考える　紅　月
母の吹く笛を素直に聞いてやり　紅紫朗
から元気はた迷惑にならぬよう　宗　一
ささやかな倖せ掴む網を張る　鐘　造
淡々と被災の友は死を語る　ア　キ
蜘蛛の網トンボ観念したようだ　トシエ
口だけはハイ元気です薬づけ　登　子
遺言状書いて元気で旅に出る　昭　水
辞令一枚男は軽くとばされる　昭　子
風の掟で軽いものから吹きとばす　美代子
ローン完済身軽になった時は老い　智　久
銭勘定忘れてまへん風見鶏　柳　太
八十を元気に花の匂いする　花　梢
百点をもらった帰路の軽い足　(田)勇
真夏の夢鯨とる網編んでいる　(伊)勇
吉野屋を出ると元気になりました　岳　人
別れた日の涙が網にひっかかる　森　子

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

平和への千人針を語り継ぐ　彰　一
焦る気は無いのに針目揃わない　よ志子
針の穴私も齢を取りました　重　人
華やかにバラが持ってた赤い針　萬　的
葬送の傘の雫が乾かない　英　一
点滴のしずくに乾きほだされる　稲　子
舌の根の乾かぬうちにばれる嘘　二　南
それなりに愛の乾きを知る夫婦　茶の子
母病んで漬物石が乾きだす　〆　女
加減したら男はすぐに付け上がる　波留吉
手加減をした愚かさを悔いている　澄　子
仕舞風呂明日の加減を聞いて居る　静　江
バランスを保つ夫婦の塩加減　諷云児
手加減をされて訣れだなと思う　しげお
気配りが足らぬ夫婦のかけ茶碗　マツエ
気配りをしない気配りだってある　庸　佑
気配りもせねば見れない週刊誌　獏　沓
気配りのいらぬ同期で貴様おれ　東　雲
気配りが空の銚子をすぐ集め　白渓子
一言で和む気配りありがとう　(松)芳　子
桔梗一輪老母のこころを和ませる　恵美子
何気ない気配り嬉し蒸しタオル　武庫坊
気配りの一人歩きが穴に落ち　秀　夫
梯子酒忘れて帰る土産物　克　治
主流よりそれて情けが身に沁みる　ふ　み
夏の陽の恵み近所へ茄子胡瓜　ルイ子
ササヤカな残り火燃えて風を呼ぶ　あきら
屍をせみのようには晒せない　艶　子
無我の境卒寿の寝顔美しい　杜　的
またの世のことは幻万燈を抜ける　薫

東大阪川柳会　森下愛論報

月冴えて街が恋しくなった魔女　湖　風
遠雷のひとつに魔女は目をつぶる　真　柳
尾行する魔女は優しい爪を研ぐ　東　雲
エリートが揃い酸素の薄い部屋　信　治
妻と気が揃って墓地を買いに行く　一　志
子沢山靴揃えても揃えても　度
出揃った稲穂にキラリ風薫る　弘　直
チグハグな意見まとめる苦労人　頂留子
チグハグなファッション歳に笑われる　たもつ
チグハグな夫婦になった七年目　晋　吾
チグハグに着て出迎える不意の客　愛　論
初孫をこわれぬように胸に抱く　賢　子
胸のすく啖呵を切ってみたい朝　シマ子
土壇場で胸算用がくずされる　三重子
手刀を切って西瓜を取る息子　雅　文
さあ買った買ったと西瓜叩かれる　孤　舟
井戸水に吊す西瓜の人を恋う　隆
見張り番西瓜畑に異常なし　良　伸

岸和田川柳会　田中文時報

子作りに励んだ昭和十五年　文　時
揚げ花火屋台は励むカキ氷　苑　子
人柄が滲み出ている話し振り　朝　一
人柄は言葉の端に見え隠れ　倫　子
人柄を見込んで頼む纏め役　盛　之
人柄を偲ぶ長蛇の野辺送り　一　斉
お人柄だけでは縁談決めかねる　呂　万
肩書きが取れて人柄丸くなり　ひ　で
人柄に釣られてついつい騙される　勝　晴
人柄に触れて一層美味い酒　白光子
人柄を買われて損な役がつき　萬　的
添え書きの一筆胸にぐっと来る　鹿太郎
良い俳句俳画の筆で生きている　信　博
割り箸で筆の代りに描く色紙　東　雲
太い筆平和と書いた十五日　ダン吉
あの女と逢える嬉しさ絵筆もつ　一　弥

能筆の勿体つけて書き渋り　柳宏子
変化する野茂の球には神宿る　敏光
立ち会いの変化たのしい舞の海　昭二
教養へ変わる世代のマンガ本　辰郎
嫁が来てがらり変った故郷の家　甚一
伝統を守り変化のない老舗　通彦
一線を引けば吹く風凪いでくる　洞庵
アルバムに変化に富んだ過去がある　二南
褒めてやれば子供は変化してくれる　金太
頬づえで見る病窓の外は秋　洋
頬っぺたを引っぱたきたい人が居る　路子
頬伝う母の涙で立ち直る　健太
愛らしいエクボに惚れたのが誤算　冨志子
頬笑みが観音様のお母さん　狸村

南大阪川柳会　金井　文秋報

面白半分みたいな身の上相談欄　柳宏子
茶を入れて夫婦二人の夜を持つ　秋子
ご機嫌の斜めビールが冷えてない　柳伸
いらいらの心鎮める登山靴　悟郎
身の上が夜な夜な変る夜の蝶　章久
美男子も汚れた靴を履くだろう　千里
出発のベルが鳴ってる見えぬ友　東雲
山越えるたびに立派になる尻尾　楓楽
身の上に触れられ少女口ごもり　頂留子
美男ではないが寅さんよくもてる　萬的
身の上はみな孤児院に置いてある　良
飴一つ口に入れるとほっとする　智子
身の上話大きな嘘にのせられる　凡子
留守電に母の小言が入ってる　志華子
入りくんだ話きいてる膝の猫　寿美
美男だったはずの夫も総入歯　真砂
蟬しぐれ嬉しく入る露天風呂　度
男には過去を脚色して話す　重人
趣味持って遅い夫も気にならず　文秋
立派な人だったと絶交して思う　恒明
見る人が見れば立派さ分かる壺　庸佑
責任を立派に終えた衣紋かけ　シメ子
個性派と言われ美男に縁遠い　三男
自分史を書けば修飾語が多い　公一
最後まで騙し続けるとは立派　千梢
六十路でもアランドロンと旅したい　日出子
祭神は美男に在す山の寺　久峰
美男子にしっかり者の妻が居る　智久
イライラと眠れぬ夜の蚊がうるさい　ハル子
身の上を語ればドラマ長くなる　勝美

溝口町川柳会　小西　雄々報

プライドを捨てて磨きが光りだし　正光
老いてなおうるおい欲しい肌磨く　久子
秋風に磨いた心ゆれている　智恵子
あの星を磨いて妻に送りたい　信敬
靴磨き七人の敵けちらそう　鈴枝
墓石を磨き先祖へ話しかけ　静江
糠袋で磨いた分校いまはない　信敬
床磨き母と会話をしています　弘子
ピカピカに磨いてばかりカーマニア　久子
人叱る前に自分を磨かねば　雄々

竹原川柳会　時広　一路報

三日間効果はなしのダイエット　高1史　子
紫外線麦わら帽子でカットする　中2千　枝
石一つ積む淋しさはなんだろう　蘭幸
自然石今は立派な庭の主　千年枝
ひめゆりの最後を知るや風化石　喜美子
石投げるつもりの海が蒼すぎる　栄恵
山頂の風化善意の石運ぶ　蝸牛
民謡の石切り唄に汗が無い　菁居
盆が来る墓石洗うも恋しゅうて　喜久恵
原石のままでも光る星の屑　正宏
別れたらあかんと石の苔を剝ぐ　螢
つまずいた石を忘れないように　静風
石仏と禅問答をして消夏　節夫
パラソルに蟬も日陰を借りに来る　淑子
お互いに暑いですねとすれ違い　房子
セミしぐれ暑いと思うのは大人　笑子
アルプスの絵を背に暑い暑い日よ　一枝
夏休み遊びの夢の子供達　清水
二日酔い喉もとすぎて飲んでいる　笹舟
飲む仲間逝きてわれひとり呑んでいる　夏喜
還暦が来たと言っては飲む父で　規代
人間のはかなさ酒が止められぬ　勲
よっぽどのことだ下戸が一気にほすビール　静佳
一日が始まる朝の水を飲む　一路

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

朝々にプチトマト採る老いの幸　ちよ

コスモスでも咲けば嬉しい庭の花　紀一
被爆者の名簿干される度に増え　ふさ子
休日と知ってか病魔動き出す　治幸
夏休み塾満喫の受験生　タミ
地価下落されどホームは夢の夢　幸夫
羽搏けば六十余州爪の下　久仁於
カステーラ切れ端添えて古のれん　實
観客のないショーに散る汗涙　晴子
書いてあるとおりで親はすまされぬ　四郎
病床で苛立つ夫は本を投げ　高明
プロの目が七光りする甲子園　あき
ゴミ袋中味をかくす新聞紙　圭
五十年目でベートーベンのデスマスク　虹汀
子が進む墨へ犠打うつ親の脛　正剣

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

ひめゆりの映画拳にある涙　吟平
句の種もつきてあくびのペンをおき　伊久栄
蟬しぐれ暑さ一入身にしみる　久子
この照りに農政とあれ稲の出来　光水
アデランス付けて見たい古希はまだ　ただし
酷暑でも虫の音も聞き盆送り　秀香
炎天を我が世と稼ぐ蟻の列　禅心
自慢ではないが通訳孫が居る　千代女
はるかなる異国の地にも花をつけ　すみれ
道草はできぬ妻子とメニュー待ち　善代
草取れば石の下から母の声　甫正
杖をつく足へやさしい芝の草　亜矢
手ばなした子牛ちらつく草を刈る　志重
五十年泣いて笑うて別れけり　富士野
城跡に昔を知らず茂る草　知世

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

頬杖の窓かなしみを知りつくす　みつ子
窓際にわたくしだけの海がある　諷云児
宿の窓　漁火遠く額になり　キク子
過労死の夫に曇る棺の窓　嘉代子
心の窓にこびりついてる戦火の哀　武庫坊
この先を暗示するかに腕の萎え　澄子
ビーナスの腕をさがしているのです　正坊
名人の腕は謙遜ばかりする　柳宏子
腕組みの男に秋が忍び寄る　富喜子
腕組みの父の返事を待っている　能子
両腕をひろげて座席とっている　涼子
チゴイネルワイゼンらしい孫の腕　道胤
言葉の裏返せば修羅が見えてくる　ふじ子
神さまにいつかお返しする命　佐江子
引き返す勇気も欲しい登山靴　鹿太
自問自答波打ち返す如くいる　美智子
人生の岐路勇気を出して引き返す　ルイ子
雲悠々わたしも旅に出たくなる　いわゑ
悠々と日向の匂いする暮らし　曙蝶
ステテコで何処へ行くにも悠々と　春蘭
水鳥に似た悠々でひとりいる　義子
悠々と煙草燻らすとこが欲し　紫香
悠々自適そんなつもりで辞めたのに　重人
悠々と昇る太陽　血が燃ゆる　江美
試練幾度　悠々父の深い海　哲子
罹災地の息吹き見ている赤とんぼ　まさお
一念発起して毎朝の山登り　泰子
身を入れて聞く気なかった老母のぐち　てる
季はめぐる　更地の隅に彼岸花　トミエ
梅酒一パイ喧嘩相手も弱くなり　たず子

川柳塔きやらぼく　政岡日枝子報

顔ゆがめソーラー重いと屋根の愚痴　すみゑ
老い猫がゆっくり歩くトタン屋根　紫布
蒲団干しゆっくり屋根と話する　和歌子
山小屋の屋根に登って下界見る　一夫
屋根よりもさし木のつばき高く咲く　富美子
気軽には笑ってくれぬ大屋根だ　荒介
日課から離れて久し足を病み　てい子
万歩計つけて日課の象がゆく　千春
早朝のコール日課を狂わせる　春枝
五七五つくるよろこび日課です　保子
般若経同じ時間に祖母の声　弘子
日課となって宗教論をたたかわす　千代
終電にとび乗る日課くり返す　亜弥
ありふれた日課ころがしつつ生きる　瑞枝
素晴らしい日課で今日を振り向かぬ　美月
お日さまに日課になった手を合わす　繭
夫婦の日課をあまり吹聴するでない　日枝子
仏壇に線香薫り朝が来る　天雀
時間だよ犬に呼ばれてする散歩　寿々子
寝坊して日課が二つふいになる　正子
太陽の同じ日課に追われだす　ふみ
毎朝の鏡私に訓示する　晶子

崩れそうな塀を支えるのも日課　花子
朝一番花と話をして回る　ゆき
手を合わす事も大事な日課です　恵子
大屋根に数えきれない恩がある　玲子
青春をつないで歌う古賀メロディー　朗子
つないでた紐がだんだんゆるくなる　八重子

三幸川柳教室　三宅　保州報

恨みごと引く波へ捨て梅雨あける　美智子
波に乗る子らの艫綱解いてやる　三千子
分別を欠いた一言波紋呼ぶ　武春
過去の傷洗い流して波が引く　初子
心電図の波がときどき謀反する　朱夏
あたたかい波が再起の背なにある　町子
波うちぎわ病んだピエロの歌つづく　圭子
未だ波高し不惑の血が騒ぐ　公子
巻き貝を耳にあてると波のうた　かず子
砕け散る波は男の性に似る　高夫
国境のない宇宙へと飛ぶ平和　当代
ぬるま湯の中で叫んでいる平和　百合子
ハンドルは妻にまかせている平和　鉄治
毎日がコップの中の平和かも　正雄
平和だね卵に黄味が二つある　親路
風向きに脆い平和の灯がゆらぐ　章子
私のダイヤは星に預けてる　和子
肚決めてから見る星の美しさ　孝子
一時の生命預けて住む地球　美子
ソマリアも日本も同じ星の下　秀男
プラネタリウムの星は渇きを癒せない　保州

またたく星よ自己陶酔は見苦しい　千秀
満天の星は地球を爪弾き　嘉平
人生を星占いで狭められ　一郎
賞味期限すぎても女様子する　和代
あの様子きっと話がついた仲　満州子
お疲れのご様子と見た回り椅子　みね
風向きの様子で分かる母の勘　めぐみ
吉宗に政治の様子学びたし　桂香
その意見様子見てから考える　さち子

川柳塔わかやま吟社　宮口　克子報

友庇う夫のうそがあたたかい　淳太郎
父の樹が突然揺れる風の向き　精子
片思いでした遙かな人でした　金太
一字ずつ丁寧に書く目を病んで　英子
点字読む指に心が躍り出す　武春
不自由な手で書く文字にこもる意地　由美子
達筆の嘘を見ぬいている余裕　裕美
人生に突然というプレゼント　重治
或る日突然一人で旅に出る運命　正
突然に二十歳になれる玉手箱　栄美子
溜めていた言葉突然つっ走る　誠子
突然の沈黙足の蚊をたたく　晶子
突然にしてはよすぎるタイミング　年子
突然に花の咲く道とざされる　紀美女
遠雷になって別れる刻が来る　三男
縄文の遠さに触れる奈良遺跡　千寿子
字の乱れ遠い面影追いながら　さち子
関白の宣言遠く地に堕ちる　冨美子

ファミコンの世界民話は遠くなる　好笑
名月へ月の距離など思うまい　紀久子
友情が堅い紙縒りのような仲　豊太
病む友が皆元気かときいてくる　和重
友達のその友達も肌に合い　美羽
友情が涙つぼから湧いてくる　めぐみ
笑ったら笑ってくれる友が居る　幸
友が病む星の綺麗な夜なのに　輝子
心おきなく話せる友とアンパンと　稚代
信頼の友へ心を開け渡す　和子
友達の友達が来てよく食べる　紫香
泣きながら突然演歌唄い出す　克子

城北川柳会　吐田　公一報

難聴のちぐはぐ返事叱られる　春蘭
観音の眩しい光　身が締まる　美代子
いつまでも今の夫婦で行きたいな　千尋
捨てにきた浜で涙をまた拾う　静子
娘くれそれは即答できかねる　史風
北の旅会話が弾む母と子と　登美子
踊りの輪浴衣と下駄がからみ合い　トヨ子
たっぷりとお水供えて夏の墓　達子
裏切りの友の命の四捨五入　とし子
面舵取り舵一人選んで行く航路　満津子
アルバムをひらくと回る走馬灯　白峰
旅立ったショックも消えず三回忌　秀夫
島影に入日眩しい瀬戸の海　政子
内閣が誰になろうと今日も閑　扇帆
あの人にまた逢えるかも坂の道　久留美

走馬灯ゆっくり回るひとり旅　純子
母の握る鈴には愛がこぼれてる　一枝
危なげなワイングラスと五十年　典子
人類愛説く裏側で核実験　倫子
したいことしとく命の先が見え　柳影
愛してる墓も一緒で眠りたい　八重
波風を立てた茶碗をみがいとく　高栄
パブロフの犬鎖から離れない　昭子
夫と子の五十回忌の蟬しぐれ　あい子
結納を終えて無言の帰り道　睦子
被災地に哀しきほどの蟬の声　公一

川柳ささやま　酒井靖子報

夾竹桃の紅　戦争も忘れがち　純子
別居してとどかぬとこで育つ孫　とよ子
いつからか別居の夢を抱きつづけ　恵美
冷や飯になれた仏の愚痴を聞く　とみ子
ペン先で四季を拾うて風の詩　つや子
鼓動までぴったり合うた深い仲　和子
土いじりぴったりモンペ離れない　ヒサ子
慟哭のあと一筋の愛に生き　八重子
一筋に生きた男に嘘がない　市三
生き仏になれぬ邪念が消えなくて　素水
言いすぎの言葉を丸う拾う母　美智子
街角の話題を拾う立ち話　末野
忍一字亡母の戒め一筋に　芳の
茶柱に一すじの夢見たものの　多美子
ぴったりとくっついてます影法師　すず子
千円の時計がぴったり合うている　可住
一筋の煙に母の匂い追う　靖子

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

地球儀をまわしてみては考える　保子
地下水が清く冷たくあたたかい　茂
地の底にマグマ大使がいるという　みさ子
潔く地に還りたい沙羅の花　ひろ子
地下水のはるかな旅を汲んでいる　よしえ
地虫なくひとりぼっちに耐えかねて　宣子
啼き終えた蟬の骸を地にかえす　節子
罪深き秋に情念もやされて　明美
壁ひとつの距離で生死のすれ違い　幸枝
地獄への距離は極楽より近い　隆風
庇い合い二人三脚崩さない　弘子
庭石が上手に庇い合っている　はるお
今言った言葉がすぐにはね返る　八重子
今からは猫を被って座ります　あづま
今年から馬鹿でかしこく生きようよ　菊乃
いい音色今のチャイムで腹が減る　智恵子
幸せという今を大事に米を研ぐ　きみ子
瞬間の今長い時間かけた　今　汲香
このところ妻の寝言で起こされる　早苗
父さんが家を建てると寝言いう　常代
母さんの寝言ストレスかも知れぬ　くに子
暁に時に素直な寝言いう　三千代
号令のような寝言は父の癖　睦子
おめでたい日には寝言もはしゃいでる　和子
寝言まで言った大役無事に終え　実満
月見草の寝言聞いてる合歓の花　孔美子
子の青春と共に歩いた夢ノート　富久江
遺言を書いたノートの置き忘れ　房子
おぼえ書きノートいのちの盛衰記　諷人
暗号のローマ字ノートから呻く　螢

川柳塔まつえ吟社　恒松町紅報

秋風へ洗濯物を高く干す　早苗
靴の色シックに替えて秋の風　茂美
秋風が吹いて思わぬ訃の報せ　満江
秋風が本のページをめくり出す　一葉
パレットへ秋風の色出してみる　陽子
嫁ぐ娘の幸せ運ぶ秋の風　ひふみ
背伸びして一流校で挫折する　清子
背伸びして不覚にはまった水たまり　多賀子
今日も無事明日へ大きく背を伸ばす　房子
まだ九十思い切りよく背伸びする　長三
背伸びをしても兄さんには負ける　みえ
背伸びなど出来ないちびた靴でいる　与根一
無駄口の中から駒が飛び出した　登志子
無駄口は軽くあしらうことにする　きみえ
無駄口をたたく茶の間の評論家　登美子
無駄口が言えて嬉しい病みあがり　敏子
無駄口の多い花から散り始め　寿美子
無駄口をたたく悩みのない顔で　静恵
わが影におびえて走るカニの泡　章峰
六十路坂無駄な走りも心得る　畔
走り書き留守番頼むと旅に出る　米子
歩いても走っても追ってくる野犬　静江
小走りの母がやすらぐ仕舞風呂　桂子

おみくじが凶と出てから走り出し　義良
貫禄はないが小金を貯めている　鶴丸
胸深く言葉ひかえている貫禄　佳江
貫禄がつくと自説がどもり出す　太泡
貫禄も相手が孫じゃめろめろだ　友子
貫禄がついて芽を出す庭の松　文子
貫禄が出来て鴨居が低くなる　叮紅

ほたる川柳同好会　井上　直次報

燃焼のリズムを煽るゴッホの黄　ただし
リズム良く人の心を摑む人　明光
鶴次郎小唄の間合いに酔いしれる　純次
カラオケのリズムに背きマイペース　馬洗
秋風へリズム乱れる蟬しぐれ　竹二
高らかにサンバのリズム　カーニバル　清史
出る時はリズム通りでないお金　英子
延長戦リズムにのって表裏　恭子
ワンテンポ遅いリズムが性に合い　昭子
年の差がネックになってきたリズム　保子
トントントン妻の調子はいいようだ　桂子
「じじ」「ばば」のリズムが狂う夏休み　しずえ
リズムよく朝から回る夫婦独楽　瀧小
つんとした女のようなメロン買う　福一
株買って値上りしても売り抜けず　吉太郎
冷やかしの積りが骨董買わされる　正安
売り言葉解っちゃいるけど買って出る　祥風
寂しくてつい買いました売り言葉　喜美子
また買った当らぬくじでも夢がある　久子
近頃の医者は薬屋みたいです　博史

禁じられた遊びに効くと言う薬　万之助
すらすらと言えた嘘なら知れている　直次
慰謝料が決まりすらすら離婚劇　方郎

川柳岩出　小倉　アサ報

浅知恵を拾い集める一行詩　和子
化粧する違う私になれるから　精子
ひと時を女に戻る薄化粧　綾子
洗い髪やさしい風を待つゆとり　幸子
病む友に話す言葉を化粧する　愛子
口笛を合図にデート紅を引く　春子
程々のゆとり見付けて趣味の輪に　昌子
集まると笑い袋の口ゆるむ　保子
ゆとり出来なぜか寂しい風が吹き　千鶴子
もう少しゆとりが欲しい狭い部屋　ふみえ
風むきが化粧ひとつで温みおび　智恵子
道連れにゆとり持ちたい長い旅　英子
同窓会自慢話で夜が明ける　哲雄
責任を果たしてやっとゆとり出来　重徳
乗り換えにゆとり取りすぎ土産ふえ　良一
わざわざと人の集まる場所へ旅　紳一郎
湯あがりの妻を見直すうす化粧　悦男
烏合の衆何回寄っても纏まらず　忠雄
集まりの中に確固たる自分　与呂志

ローズ川柳会　山崎　君子報

引揚げの生家夏ぐみ熟れていた　てる
釣人のびくともしない夏帽子　ミサヲ
三つ編みに少女は愁い編みこんで　みつ子

夏祭芸能人の生の顔　藍
再放送できぬドラマのヒロインだ　哲子
薄くなりアデランスなどほしくなる　トミエ
髪だけの遺骨還らず五十年　まさお
下駄を履く足の先だけ秋になる　武庫坊
八月や夫婦の思う別なこと　年代
宿題は二の次先ずは遊べ夏　貴代子
夏姿女が更に美しい　いわゑ
白髪になってようやく獄を出る　はつ絵
髪セット化粧濃くして家事休む　民平
夏たのしあさがお市もやってくる　君子
髪束ね細き首なる新盆は　義子
僕の夏蟬の抜け殻見た日から　薫風

翠洋会（前月分）　米田　恭昌報

粋筋が変わり宗右衛門町の雨　鬼遊
並木道削って伸ばすバス道路　光子
子が帰る辻に尾灯の消えるまで　絹子
似合わないひげ伸ばしてるけど他人　さと美
消息がまたひとつ消え流れ星　千梢
落日の影はだらりと伸びたまま　希久子
脚が伸びことば短くなる息子　ひろ子
心配はPL花火ぜいたくな　東雲
ふるさとの絆だんだん遠くなる　凡子
伸びて来た誘惑の手に乗ってみる　蛙
消息がとだえるばかり老いの日々　澄子
倦怠期愛が消息不明です　楓楽
大阪のもめごと銭でケリがつき　久峰
王将も飛車角もいる新世界　英一

したたかに生きて背伸びが大嫌い　千歩
月光に過去から伸びる影法師　みつ子
道修町薬匂わぬビルばかり　正雄
待ち惚けたむろしている紀伊国屋　佳秋
戻る灯を信じ神戸に遠くいる　宏子
デパートで品定めして井池へ　叡子
夜汽車から見る灯のいま昔　春子
太閤さんの目に地味すぎるツインビル　英壬子
消息が途絶えてからの胸の風　真砂
留学の子の消息を待つポスト　志華子
もう背伸びすることはないループタイ　正坊
退社後の消息不明午前様　みずき
聞き上手話の中に灯をともす　宣司
猪飼野の活気あふれるチマチョゴリ　恭昌

サークル樺樣　小林一夫報

大ぜいの死者にかこまれ生きている　正坊
毬を一途に蹴って少年期を満たす　千代
踊りつづけた夫婦茶碗の軽いひび　智恵子
魂を売ります安うしときます　楓楽
秋の陽を背に我が道を行くひとり　希久子
わが骨の育ちきらずにかぶと虫　薫
海に抛ればかなしく融ける僕たちの骨　一夫
照れている案外人はいいのかも　房子
ガラスの壺抱いていつまで生き延びる　みつ子
ガラス戸の雨粒　電話鳴っている　たか子
影のないガラスですこし物たりぬ　いわゐ
すこしニヒルになってガラスの城にいる　喜美子
ガラス砕けて静寂を取り戻す　智子

尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

耳元へ孫の可愛い悪企み　紫香
補聴器を外すと海が凪いで来る　定人
幸せそう耳にホクロのある娘　向西
遠い耳噛み合わぬ話老い二人　末貞一
派手を着てちょっと気になる他人の目　夢之助
倦怠期だろうか妻の他人顔　弘治
漫画文字書いたあの娘が嫁に行く　十四郎
誠実な男の文字は崩れない　鹿太
達筆を表に出さぬ筆不精　尚利
恋文に返事が来ない金釘流　勇次郎

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

月光が未だとどかない冬枕　森子
満月へ何度もレンズ藤井寺　祥一
月の光浴びて伽藍の鬼笑う　弘直
義理ひとつ済ませて帰る月の道　ますみ
長月の月から逃げる恋一つ　鎮彦
満月に遠い懺悔が白くなる　美幸
ふところの火種はまさかまで見せぬ　一風
消えかかる火種を老妻は吹きつづけ　柳宏子
だーれにも見せぬ火種を囲う恋　欣之
火種大事に綴り続けた女の詩　洋
割り算の余りの中にある火種　祥文
悔恨の火種チロチロくすぶって　賢子
怖い人いつも火種を持ち歩く　春堂
煩悩と手を取りあってかせぐ父　頂留子
煩悩を断つ梵鐘を強く打つ　とみお

撮られてるビデオは父の子煩悩　東川
愚息なりふびんさまして追銭す　宏
雀百まできっちり耐えている火種　柳伸
打楽器で一気に払う悩みごと　泰
煩悩を消せぬ水車の空まわり　シマ子
風にゆらゆらみの虫きっと哲学者　たもつ
時刻表虫が見ている無人駅　度
シャンソンのとっても好きな秋の虫　透太
古い殻捨てると虫は恋に燃え　美津留
よく踊るのど仏だね　父のひざ　朝子
紙魚ついた本がまだある亡妻の書架　三男
のど仏男であった日の証し　宏子
酔いざめの水に唸ったのど仏　夕花
のど仏うそもまこともお見通し　隆

川柳高知　川竹松風報

正論と思えど舌が言わせない　幸泉
老妻の舌があみ出すかくし味　功幸
同じ舌持っているのに無調法　孝雄
老友の祝辞が舌を噛みそうだ　快風
毒舌の裏に確かな愛がある　竹萌
小休止コーン鴉と分けて食べ　菊野
仕合せで亡夫の事などつい忘れ　有佳
前歴は良妻賢母痴呆症　佳風
八月の大地にうめき声がある　千鳥
スタミナが余っています翔んでます　子龍
清流をスタミナにした鯉ながし　圭風
スタミナがあるから悪い事をする　松風
スタミナをつけております休んでる

京都塔の会　松川　杜的報

釣り舟のどれもが目指す沖の岩　求芽
鮎釣りの忍者のように岩渡る　〆女
岩を背に対話の欲しい摩崖仏　百合子
あなた次第砂丘にもなる岩になる　礫
岩避けるたび声上がる川下り　倫子
注連縄に思い通わす夫婦岩　庸佑
エプロンが母の姿で干してある　諷云児
暑いなあぐっと飲み干す大ジョッキ　波留吉
子が帰る物干し竿もカラフルに　芳子
たとう紙の妻生きかえる土用干し　巨詩
先生が来たと背中をつつく鉛筆　紫香
鉛筆の芯が折れている手帳　白渓子
鉛筆と仲良しでいる老いの日々　年代
鉛筆に叱られている答案紙　武庫坊
被災地へ画家4Bを忘れない　杜的
子らの夢色鉛筆がかき立てる　英一
4Bのかすれぐらいは残る過去　ただし
鉛筆の一人歩きの白い闇　薫
無事を見て無事か無事かと尋ね合う　福子
カラタチの垣根変らず里の家　てる
グルメからオウムへ話小半時　達子
槌の音赤いカンナに励まされ　美穂
ハルマゲ丼だれが食べに行くのだろ　水客

川柳後楽吟社　従野　建一報

風のうわさをたよりに深い森に行く　健一
パントマイムの声が楽屋に落ちている　義親
妻のぐちながながつづく熱帯夜　桃風
見えぬ子の姿照らせよ盆提灯　幸子
蟻の列今日も本音で生きている　美智子
セールスに年金の日の靴の音　佐加恵
湯上りのビールを注ぐ遠花火　青銅
仏壇も風を入れてる熱帯夜　金吾
夏まつり九十路の老母も輪の中に　玉水
大胆な構図に齢は首を振る　たけ志
一期一会返せぬ恩の数いくつ　柳五郎
亡母恋し迎え火ゆらりゆらゆらり　まさお
逆転打出ぬままに少年の夏終る　拓治
トイレの行列に近付かない駅長　道博
クーラーに犬猫人と昼寝する　照路
広島の夏が燃えてる夾竹桃　哲郎
初盆が十指に余るわれ老いぬ　吟平
続編はもうない夏を裏返す　正秀
策一つ心に残して盆踊り　博友
死に急ぐ蟻が飛び込む盆提灯　邦季
魂を売らず異色に生きている　吉則
点滴の追加看護婦さん無言　鮫虎狼
住所録また追加する友が増え　秋月

川柳ねやがわ　江口

墓買うて生命線が伸びている　冬葉
亡父の顔知らぬ子供と墓洗う　小路
一人言お墓に立てばつい長居　高栄
父の墓家族の知らぬ花があり　恵子
奇麗な女が毎月父の墓へ来る　礫
院号も墓も出来てる母白寿　雅文
亡父の背を流すつもりで墓洗う　吉之助
山水画掛けて聞こえる滝の音　かすみ
魁夷の絵滝の轟き聞こえそう　菜月
真っ白な滝に浮世をふと忘れ　たもつ
滝壺に民話静かにねむってる　博泉
滝で身を清め裁きの庭に立つ　波留吉
花嫁の涙のわけを知るベール　澄子
ユーモアもまぜてベールをはぐ祝辞　英壬子
ベールの中で見えぬ誠意も企みも　文秋
夜のベールおりると元気湧いてくる　一風
ベールはぐそのときめきと不安感　頂留子
それ以上覗かぬ方がよいベール　亜成
焼け石に水とは言わず義援金　一途
大文字今宵すず虫鳴き止まぬ　とし子
思慕深く焼ける女の修羅の面　朝子
残り火に身を焼き尽くす火の女　ルイ子
高野山うなぎが眠る供養塔　静江
廃船を焼いてる漁夫の深い皺　紫香
縫い終る頃にようよう戻る勘　あやめ
つくつくぼうし秋の尻尾が見えてくる　度
矢田寺に老母背負いて今年また　勇太朗
森の中目立ってみたい毒キノコ　洋
山の子を海遊館へつれ歩き　光子
夾竹桃と蟬が仏を出迎える　時弘

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

年金に涼しさくれるところてん　ツネ
相思相愛仲人の名を借りに行く　生恵子
深海魚二度と溺れることはない　寿久

スタミナも切れて無策なところてん　銀波
千金の藁を摑むと溺れない　順三
挫折して酒に溺れる月の暈　花匠
一升びん君に溺れてしまいそう　雅城
昼寝する河童溺れた夢を見る　ふさゑ
大臣が来るぞ大きなバスも出る　井蛙
知に溺れ詐欺師の道を止められず　一光
根回しが効いて喋らぬ石となる　黙人
シナリオの通り幾度もリハーサル　一花
砂浜の水着に溺れているトンボ　花峯
さそり座の女と食べるところてん　五楽庵

富柳会　池森子報

吾が庭と思う大河に網を打つ　冬虹
一寸した軽い言葉で国がゆれ　紅月
蜘蛛の網トンボ観念したようだ　トシエ
美女二人その背後には捜査網　昭水
定刻に目線気になる電車待つ　登子
軽い気で捺したハンコが命取り　(田)勇
網棚に愛のみだれが少しある　花梢
夢願望網にかかった人魚姫　岳人
泥舟に乗せられたのは軽い舌　森子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

望まれて結婚したかと孫は聞き　信子
恋一つ捨てて若者脱皮する　博丈
今日も無事それから上は望むまい　一浪
突然の左遷理由はあれらしい　善政
破れ靴ごくろう様と捨てに出る　佳女

瓢箪の突然変異おもしろい　帆雀
突然に履く白足袋に義理がある　雄々
懐が寒いと音頭とりづらい　喬水
ナマリより重たい寝たきりの人間　石花菜
プライドを捨てたら楽になった屋根　よしえ
ヤヤヤヤまた体重が増えちゃった　きみ子
梅一輪音頭忘れて狂い咲く　玲子
音頭とりが転んで右往左往する　節子
お望みとあらば残らず進ぜよう　幸子
ポイ捨てになっても悔いのない首だ　とみお
少しみだらな音頭にのって咲きました　季芳
私の望みは天が知っている　喜与志
大往生望むいのちが汗をかく　螢
捨てたのでなくてきれいなまま別れ　勝見
神さまに見捨てられたらおしまいだ　かつみ
川柳に望みかけてる顔が好き　弘朗

川柳塔おおとり　上田俊路報

一色が出せないままに未完の絵　千秋
絵を描くと澄んだ心になってくる　真一
絵はがきを買っていい旅しめくくる　宏章
絵に書いた餅で庶民を票にする　幸次郎
真っすぐに伸ばす添え木が強すぎる　孝子
添えるなら心も身をも任せます　崇
歩き初め母が手を添え笑顔添え　由多香
バックしても一度別れ惜しみたい　登美
スケジュールに膨らむバッグ持ち歩く　艶子
通信簿に夢を添え足すお母さん　余志身
若い娘がバッグを肩に風を切る　奨

各地柳壇担当者へお願い　今月号は、当月分と（前月分）を投稿されたのが四句会もあり、富柳会は九句も同じ句がありましたので削除しました。こういう誤りが起らぬよう、二か月分を同じ月に投稿することはお控え下さい。（編集部）

酔いどめもバッグに入れてフルムーン　みさを
バックからささえる妻の手が温い　俊路

川柳大阪　坊農柳弘報

家族仲間の声援浴びて今日があり　太元
時間かけ服装チェック初デート　推高
拍手浴び初戦敗退我が母校　喜楽
自らをポアする勇気ありますか　酔照
幕が開き浴びる視線に舞い上がり　叭笑
フランスよ浴びたくはなし核の灰　多香
小男が浴びせ倒しで勝つ土俵　河南子
両親が花嫁候補にチェック受け　青道
チェックする箇所の多さよ五十年　柳昌
チェックする責任重いこの仕事　美花
戦争を知らない人が多すぎる　良花
五十年もう戦友の夢は見ぬ　しげお
チェックのいらない水が里にあり　洛酔
大手術おわりて空は茜雲　和子
原爆のページ封印したまんま　ダン吉
旅支度チェックするたび荷が増える　かよこ

放射能浴びた恐怖は語り継ぐ　鉄心
健康のチェックへ酒はかかせない　まつお
喝采を浴びてゆっくり幕を引く　笑風
チェックしたことにしとくと太い腹　一歩
沸騰点近い男をチェックする　美津留
予想外妻にてこずる腕相撲　川童
悲劇でも喜劇にかえる五十年　比呂志
夫婦茶碗欠けたくはない五十年　重人
核実験世界を甘く見ちゃあかん　本蔭棒
五十年父と母とを信じてた　与呂志
喝采を浴びる背中へ矢もまじる　希久志
有難う父は下町ナポレオン　司
五十年りんごの唄はまだ新鮮　金太
都会っ子森林浴で生きかえる　柳弘

翠洋会　米田恭昌報

ひっかけ橋引越をする二色浜　東雲
関空に行って来たよと自慢する　正坊
梅田かいわい映画の梯子しています　良江
違法駐車で名も売っている北新地　ひろ子
颯爽と助っ人悪を懲らしめる　光子
イキイキと恋も余生もものにする　久峰
好きなこと告げず提灯持ちました　叡子
颯爽と紅ひきながら胸算用　千梢
一心寺両親おわす骨仏　正雄
りんどうのちょっとさびしい恋をする　宏子
犯人は外国にもぐってする欠伸　綾子
逝ってから貴男あなたと恋しがり　志華子
潜水艦海の藻屑となりしまま　真砂
ポケットにティッシュがたまるアベノ橋　鬼遊
恋人の目になる十年目のダイヤ　英壬子
風景画恋のひととき想い出す　春子
旅三日明日には妻のお味噌汁　絹子
颯爽と今日もお出掛け姑の知恵　みずき
もぐりたい穴をひそかに掘っている　蛙
キタの水甘いばかりやおまへんで　宣司
往きだけは颯爽として新の靴　みつ子
さっそうと歩けば風が従いてくる　楓楽
マディソン郡の橋を観ている烏龍茶　英一
銀橋をくぐるボートの血が若い　さと美
鶴橋に来ればオモニに逢えそうで　恭昌

はびきの市民川柳会　榎本吐来報

嫌味でも優しい顔で聞くゆとり　さとみ
医者の言う通り生きても味気ない　和風
免許証　母の心配また増える　聡
外出着　不思議に変わる妻の顔　一壺
戦友眠る護国の宮に蟬しぐれ　四三郎
メガネなしで確かめたいよ妻の顔　美喜
この歌は誰に恋した時だっけ　辰子
年金があるから捨てられずにいる　ダン吉
夕立をだしに飛び込む縄のれん　志洋
すき焼きは苦い思い出戦中派　金太
秋風がすき焼きの香を連れて来る　えみこ
すき焼きは遠慮するほど味が良い　二南
そわそわと早目の身支度初デイト　敏子
お見合いへそわそわしているのは男　利武
再会の時間が迫る大時計　重人
同門と知れて弾んだ懐古談　晋
横文字の門札バラの花が見え　洞庵
門番にならぬ小犬が鳴いてくれ　与呂志
門札はそのままにして寡婦守る　希代司
同窓会廃校の門なでている　敏
山門をくぐって信者の顔になり　まつお
わたくしのミイラと逢うた歯科の椅子　みつこ
青春にブレーキかけたレントゲン　かつみ
レントゲンまことしやかな嘘もつく　絢子
天国へ知らせるレントゲンの結果　扶美代
懐に入れたばかりに飛んだ首　たけし
懐手思案投首無為無策　昇
懐に静かに眠る火種持ち　りつえ
懐手酸いも甘いも知っている　吐来
懐を当てにされてる内が花　伴子

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

天気予報台風の目よ何処へ行く　正子
台風の過ぎた田圃に母も立つ　ひろ志
台風の気配感じて虫動く　紫香
台風が裏切り秋が乱れだす　瀧小
台風が来ない今年の窓洗う　伊三郎
迷走台風人のエゴまで見透かして　正治
台風の進路に寒い地図がある　鹿太
台風のつめあと波及する米価　歌子
台風が来るとお芋が欲しくなる　年代
台風に教えようか正しい進み方　求芽
閉店のどさくさに来た夏の虫　一笛
幽玄の流し灯籠夏閉じる　義芳

夕顔がそっと囁き闇揺れる　まさお
スランプが続く何時抜けられる闇　キク子
暗闇に手を貸す人がいてくれる　(松)芳子
闇があり青空があり強くなる　正一
戦後を五十年生きていまだ闇　千恵
てのひらを太陽に曝す　じんじん闇　薫
事もなく過ぎてしまった私の　夏　澄子
記録破りの暑さへ思考ゼロになる　すみ
炎暑記録途絶えてホッと今朝の秋　渉
ついたちに体重計にのるいのち　正坊
秋刀魚焼くブッセの詩集ポケットに　光穂
無位無冠我が信念は汚すまじ　源一
鼓笛隊が運ぶ秋風待っている　武庫坊
萍の流れに逆らうとき激し　(河)芳子
万灯会から戻りどっと水を飲む　智子
くに訛りどっぷりつかる盆三日　昌子
老犬が何時の間にやら主人顔　吉太郎
リンゴの唄で青竹踏んでます　杜的

川柳藤井寺　高田美代子報

話すのはやっぱりやめとこ留守電話　史郎
留守電へ敬語でものを申しあげ　正一
さては上司はっと言葉もあらためる　敬一
電話から少し明日は見えてくる　修六
夕方の電話は出ないことにする　キミ子
涙腺が切れると何もかもゆれる　扶美代
右へ左へ揺れて自分を見失う　花梢
自信ゆらゆら男の値札軽くなる　和樹
煙ゆらゆら父が一番つらかった　しげお

余白には花の種でも蒔こうかな　昭水
子を思う母の手紙にない余白　悦子
寄せ書きの余白達者な筆で埋め　六点
日記帳余白の方が多かった　三郎
余白そのまま疎外されたか淋しいか　宗一
好きですと余白に書いて切手はる　敦子
人生の余白きっちり埋めていこ　みよ子
人生の余白へ似合う画布を張る　吸江
人生の余白を満たす妻が居る　愛子
もうひと花咲かす余白はとってある　かつみ
母の文余白にお酒ほどほどに　志洋
人生の余白は花で飾りたい　昭子
自分史の余白に残す顔を選る　美房
余白には真っ赤なバラを描くつもり　絹子
どうせなら大きな虹を描く余白　美代子
狂わない時計と余白もてあます　元紀

とっとり川柳会　武田帆雀報

炎天に親の汗知る夏休み　よしお
炎天が続く夕焼け雲赤い　多哥由
炎天に汗散る健児インターハイ　崇
炎天の鳴き砂喉が渇いてる　明美
炎天下蟻行列を乱さない　銀嶺
炎天に西瓜ばかりがよく太る　行男
炎天の匍匐前進忘れない　喬水
熔接の火花ビル組む炎天下　帆雀
親戚の揉めごとこちら評論家　粗粒
親戚の子よりも早く歩き出す　悦子
親戚のお陰で碑が光る　喜与志

親戚へお金の無心だけはせぬ　侑里
長老が逝き親戚輪がゆるむ　一京
親戚が来ても職人手を止めず　舎人
妻たちへ親戚重いとも思う　ひろ子
日本人みんな天皇家の親戚　石花菜
住職はうちの子供の先生だ　輪多朗
袈裟たたみ住職人の子にもどり　孝男
住職の白い眉毛が動かない　茂
古寺の住職狸かも知れぬ　一瑶
焼肉の匂い本堂立ち込める　和歌子
住職の法話が毛穴から入る　一枝
住職が院号やると言い出した　螢
住職が今暇だよとそっと言う　圭一郎

倉吉川柳会　谷口次男報

恋進む特別室でもてなされ　喜美子
気位が特別高い胡蝶蘭　御前
三代の夫婦特別渡りぞめ　小生
特別と言われすっかり気を許す　美由紀
特別室というのにゴキブリ這いまわる　日枝子
特売日でないとスーパーには行かぬ　秋女
特別と今日も禁酒の紐が切れ　秋草
特別なことがなければめしふろテレビ　石花菜
特別な扱いきらう再生紙　雄々
特別好きな虫はウスバカゲロウです　菩句
特別室がまだ空いている気にかかる　玲子
特別の人間は無し法律書　次男
院長が特別室に入院する　よしえ
特別という名のついた菊の紋　独歩

特別な関係ですとうす笑い　天雀
夫婦でも同時に発てぬ旅がある　(小)康子
久し振り逢うと同時にしゃべりだす　智子
プロポーズ同時が今に残す悔い　柳風
同時には無理だと時計屋の時報　秀峰
入信と同時に金が要るらしい　螢
同時では亀の負担が重すぎる　(山)康子
おじいさんからおとなの本を取り上げる　完司
あと一つ残して取ろうお菓子皿　和枝
なまくらになる同情はするでない　かつみ
善になる悪玉になる酒をのむ　とみお

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

唇が渇いてなかなか切り出せぬ　ちよえ
少女の心にもどったうろこ雲　恵美子
肩の荷を降ろしてくれた娘の電話　英子
休業の裏には言えぬ修羅があり　はるみ
自信過剰とうとう折れた足の骨　鈴江
補聴器をつけたらどうかとからかわれ　歳栄
たるんではおれぬ米寿は遙かなり　かつ子
あの峰へ渇く心を捨てにいく　聖子
俎の上で手を切る気のたるみ　好栄
ガムテープ貼って休業しています　博利
順番が近づきやたらに喉渇き　清泉
線路までたるむ暑さよ稲の出来　白汀

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

辞めてから見れば会社がやせている　一閑
新聞を隅まで読んでああ無職　勇次郎
そして秋　ベルトの穴が一つ増え　すみ
セミの殻　転がる森の独り言　美智子
妻が吹く進軍ラッパに背を押され　まさ
出発進行　前途になにがあろうとも　昌子
前略と敬具の中の虎話　六浦
タイガース負けても燃える旗を振る　ハツエ
原点は朱に交わらぬ角砂糖　登子
お座りが上手な犬で憎らしい　向西
母さんが重ねた苦労座りダコ　末貞一
黙秘して座ると重い妻の尻　弘治
床柱親爺座って恙なく　十四郎
被災跡胡坐かいてる亡父の影　夢之助
説法を聞く座布団が薄すぎる　正治
駅ウラに座り心地のよい飲み屋　鹿太

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

昔を慕う女ひとりの糸車　〆女
顔に皺増やす阪神大地震　博史
石畳　昔の音が残ってる　蕗児
下駄の音　旅の土産を選りながら　きく子
聞き慣れぬ音へ眼鏡がずってくる　ただし
音一つたてぬ女のストライキ　福一
嘆くのはもう止めました桔梗咲く　つえ子
嘆きつつ追いかけごっこしてくらす　瀧小
秋なれば水は嘆きの音で落つ　薫
セロテープ使い補修の僕の辞書　圭坊
岸壁を離れ船出のテープ切る　一笛
万一のことはテープに言うてある　重人
すぐばれる嘘だとテープ知っている　芳子
ポチという僕が犬とは知らなんだ　明光
森の中でじっくり深く掘り下げる　悟郎
淋しさを隠しきれない草書体　武庫坊
定年は自分で決めるモンブラン　正坊
胃に悪い薬　胃薬ついている　英子
フランスは青いサンゴを泡立てる　計光
夫婦して買物下手でロげんか　吉太郎
恐竜の骨欲しそうに骨粗鬆症　杜的
立ち上がる街にコスモス乱れ咲く　知香子

京都塔の会吟行
真如堂・黒谷句会

とき　11月18日（土）午前10時半
集合　地下鉄「丸太町」①出口
　—随時、タクシーに分乗して
　真如堂正門へ
吟行　真如堂・黒谷（金戒光明寺）
句会場　黒谷塔頭　永運院
課題　灯・短い・自慢・当日雑感
　（各題3句）
会費　5000円（食事・タクシー）
申込　11月10日までに都倉求芽または
　松川杜的へ
投句　80円切手3枚同封、都倉へ

第一回　川柳塔まつり

今回、初の試みとして実施された第一回川柳塔まつりは、9月30日・10月1日の両日にわたって盛大に開かれた。このまつりは平成7年度同人総会と路郎賞はじめ6賞の表彰式と記念句会、さらに前日の前夜祭を含めた総合的な行事で、本社・地方同人が交流する一大カーニバルとなった。

前夜祭

前夜祭（懇親宴）は、9月30日午後6時からアウィーナ大阪（なにわ会館）で、川柳大阪の協賛により開かれた。河内天笑氏の司会で開宴、橘高薫風主幹があいさつ、「今年は荒ぶる年で、阪神大震災などの事件があり、川柳塔社でも西尾栞名誉主幹のご不幸もあったが、地方のみなさんのご協力により本社と地方、地方相互の親睦・交流を図るこの歴史的な催しを開くことができた」と述べた。

つづいて社団法人全日本川柳協会・番傘川柳本社および川柳塔唐津支部田口虹汀氏からの祝電が披露され、本社相談役の東野大八氏が「この川柳塔まつりは、かつて川柳雑誌社の主催で開かれた川柳カーニバルの再現だと思う。私はこの時、路郎先生と初めてお会いし、すきやき鍋をつつきながら『川柳雑誌』への投稿を約束し、以来二十余年にわたって書き続けたが、先生は後にこの書きとばした原稿をまとめて『人間横丁』として出版して下さった。そして川柳ひとすじに生きた先生の死去により『川柳雑誌』は四六〇号で廃刊、翌年、『川柳塔』が生れた」と、この催しにふさわしい意義深いおはなしを行った。

やがて宴もたけなわとなった頃、川柳大阪会員の川内屋叺笑さん一行による河内音頭が三味線と太鼓の伴奏により華やかに演じられて会のふんい気を盛り上げ、作品の下五を示して句と作者名をあてる川柳クイズの趣向もあり、参加者がそれぞれテーブルを回って歓談し、親睦の実をあげた。

平成7年度同人総会

10月1日午前10時
アピオ大阪

平成7年度の川柳塔社同人総会は10月1日午前10時から、アピオ大阪（大阪市立労働会館）で例年を上回る76名が参加して開かれ、報告・提案の後、活発な論議が展開された。

総会は川島諷云児氏の司会で開会、高杉鬼遊氏の開会の辞の後、橘高薫風主幹を議長に選出して議事に入り、河内天笑氏が別項のとおり平成6年度の事業経過報告を行い、続いて春城武庫坊氏の決算報告、吐田公一氏による会計監査報告が行われた。

前年度総会における要望もあって、今回は

じめて新年度の事業計画・同予算案の提案が行われた。事業計画については河内天笑氏が提案、同人名簿を発行してから一年経ち、その間、かなりの異動があるので11月に補正表を作ること、平成8年1月の新春おめでとう会は定例本社句会を兼ねて実施すること、平成8年5月15日は栞名誉主幹の一周忌にあたるので『定本西尾栞句集』を発行すること、川柳塔社勉強会は今年、震災のために中止されたが、来年度は平成8年6月ごろに実施すること、年間を通して同人・誌友の拡大に努めることとし、そのための具体的な手だてを

検討することを提案した。なお、予算案は新会計部長の榎本吐来氏が提案したが、特に同人・誌友の拡大による収入増が緊要であることを強調し、西田柳宏子氏から役員の新任について提案した。

これらの報告・提案をめぐって出席者から質疑応答と意見発表が行われ、林荒介氏はじめ7名が発言した。その内容は、同人名簿、各賞の表彰、受賞者への通知、本社句会への投句、投句用紙など多岐にわたり、それぞれ担当常任理事から答弁を行った。それによって直ちに諒解を得られた問題、替否両論があって早急に結論が出せない問題、今後、検討を要する問題などがあり、正午ぎりぎりまで討論が続いたが、終りに議長が全議案の採決をはかり、満場の拍手で採択、小出智子さんが閉会の辞を述べた。

■事業経過報告

〈事　業〉

6年10月2日　平成6年度同人総会を阿倍野市民学習センターで開催

同　11月1日　川柳塔社同人名簿を刊行

同　11月3日　川柳ねやがわ20周年記念川柳大会（市立総合センター）

同　11月12日　川柳塔碑合祀追善法要（高野山大霊園）

7年1月15日　新春おめでとう会（大成閣）

同　7月7日　路郎忌本社句会

同　7月23日　西尾栞名誉主幹追悼句会（八尾グランドホテル）

同　8月6日　川柳塔わかやま300号記念川柳大会（JA会館）

◎1月17日の阪神大震災により神戸市・阪神間在住の同人・誌友が多数被災したため、義援金を募金し、災害見舞金を贈った。

〈受賞・表彰〉

菱田　満秋　平成6年度路郎賞

弘津　柳慶　同　準優秀作第1席

池　森子　同　準優秀作第2席

永田　暁風　平成6年度川柳塔賞

榎原　公子　同　準優秀作第1席

森田　文　同　準優秀作第2席

藤田　芳郎　平成6年度銀河系賞

西出　楓楽　同　茴香の花賞

本田　忠男　同　一路賞

野瀬　昌子　同　各地柳壇賞

木本　朱夏　同　本社句会月間賞永久保持

辻　白渓子　高槻市教委から文化功労賞

岸和田川柳会　大阪府知事から表彰

〈選者交代〉

平成7年1月号から「川柳塔」は橘高薫風、「水煙抄」は高杉鬼遊、「銀河系」は「渺湖抄」と改題、小出智子、「茴香の花」は西出楓楽に交代、9月号から「水煙抄」は西田柳宏子、「茴香の花」は八木千代に再交代

〈句碑建立〉

木村あきら・工藤吟笑　平成6年11月20日、

香川県白鳥町立中央公園内

〈句集刊行〉

工藤　甲吉　『甲吉川柳』
瀬戸まさよ　『冬木立』
故松永すすむ遺句集『みちづれ』
藤井　正雄　『私の百句』
故谷垣史好　『谷垣史好句集』
滝北　博史　『なにわ川柳』
合同句集『あおい海』第3集
谷口　次男　『「モー六」の戯れ言』

〈物故者〉

浜本　義美　平成6年10月4日
高橋千万子　同　11月14日
植村客遊子　同　11月18日
保西　岳詩　平成7年2月21日
村田　善保　同　5月9日
西尾　栞　同　5月15日
西森　花村　同　6月22日
大矢　十郎　同　8月19日

■新同人（26名）

亀岡哲子・菊池トミエ・山本義子（西宮市）小倉藍（宝塚市）山本半銭（堺市）大河未佐子（大阪市）西山幸（和歌山市）奥田良子（大阪市）金崎峰子（池田市）飯田昇（天理市）諏訪柳々（青森県）嵯峨根保子（宝塚市）高橋夕花（八尾市）湯浅馬洗・月原方郎・稲葉眞郎（豊中市）井齋一齋・長谷川呂万（岸和田市）玉置英子（大阪市）島ひかる（富山市）牧渕富喜子・池田善守（西宮市）小熊江美（伊丹市）島元ふみ（茨木市）前たもつ（枚方市）松本よしえ（倉吉市）

■新役員

相談役　工藤甲吉・月原宵明・本田恵二朗
理　事　山本希久子

〈同人総会出席者〉西出楓楽・西田柳宏子・高須賀金太・小出智子・黒川紫香・月原宵明吉村一風・江原とみお・木本朱夏・森田熊生奥谷弘朗・中原諷人・中原汲香・奥山美智子武田帆雀・橘高薫風・奥田みつ子・高杉鬼遊山本希久子・鍛原千里・田辺灸六・大坂形水玉置重人・野村太茂津・小西雄々・藤村〆女政岡日枝子・新家完司・山下美津留・土橋螢林荒介・林瑞枝・春城武庫坊・小林由多香・吐田公一・榎本吐来・天正千梢・西原艶子・籾山隆・小池しげお・松本文子・吉岡美房・前たもつ・波多野五楽庵・笠原吸江・塩満敏宮崎シマ子・桜井千秀・楊井二南・小島蘭幸小林妻子・矢内寿恵子・山本玉恵・八木千代白根ふみ・板垣草丘・吉岡きみえ・恒松叮紅舟木与根一・福浦勝晴・田中正坊・仁部四郎園山多賀子・牛尾緑良・坊農柳弘・阿萬萬的藤井一二三・河内月子・河内天笑・上田柳影川島諷云児・東野大八・辻白渓子・西口いわる・宮本欣史子・本間満津子（76名）

六賞表彰記念句会

今年度から路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞をまとめて表彰することとなり、10月1日午後1時からアピオ大阪で表彰式と記念句会が開かれた。今回の各題選者は本社二名・地方四名という多彩な顔ぶれで、受賞者も代理出席を含めて全員が参加、出席者一七〇名というかつてない盛会で広い会場を埋めつくした。

まず表彰式は板尾岳人氏の司会で始まり、各地柳壇賞をかわきりに受賞者10名がそれぞれ橘高薫風主幹から賞状と記念品を受与、関係句会代表から花束を贈られ、大きな拍手を

浴びた。つづいて記念句会に移り、午後2時から各題五五句入選の披講が行われ、月間賞は芳地狸村氏（岸和田市）に輝いた。

（記名―月子・森子）（清記―希久子）

兼題「姿」　小出智子選

川柳祭り杖つく姿をはばからず　勝美
姿からはみ出てしまう水鏡　五楽庵
ヴィーナスの形に少女立ってみる　瑞枝
時どきはうしろ姿を確かめる　朱夏
虫を聞く姿で月の縁に座す　紫香
右へ傾くわたくしの影法師　冬葉
み仏の姿で亡母は居てくれる　妻子
生きてきた姿は恥じることばかり　ルイ子
前向きの姿勢向日葵からもらう　寿美
髪洗うしろ姿にある迷い　岳人
盛装は今日一日の驕りなり　悟郎
どう見ても踊る姿は古希でない　白渓子
振り出しで姿勢正して考える　(奥)美智子
爪を剪る父の姿を見ています　たず子
姿焼き人間さまの得手勝手　吐来
忙しくビデオを回す晴れ姿　重人
すくすくと育った孫の立ち姿　正坊
おぼろおぼろな老母の姿を守りぬく　シマ子
拝まれているとは知らぬ母の背な　宵明
生き下手な父の姿が枯れてくる　叮紅
晴姿父と母とを自慢する　しげお
蟷螂の枯れて羅漢という姿　洋
容姿より人柄選ぶ確かな目　恭昌
リラックスしろと姿見に言われ　ダン吉
姿見に妥協出来ない老いがある　房子
花好きの亡母の姿は花の陰　幸生
やさしさはせみを葬る子の姿　朝子
定年後の姿をかい間見るゴロ寝　恵子
合掌の姿に神も味方する　夕花
弱点をきっちり姿見がうつす　ふみ
つぎはぎの姿で佇っている私　みつ子
姿見の前だんだんとこわくなる　いわゑ
ゴキブリの姿ゴキブリ関知せず　完司
アルバムに亡母の姿を閉じ込める　鹿太
せっかちなうしろ姿も父に似る　由多香
惨敗の姿で駅の水を飲む　帆雀
見苦しい姿はみせぬ壺の花　桂香
これが私の姿立っても座っても　文子
亡き妻が居そう姿見に立てば　礫
茄子胡瓜の姿わるいが無農薬　素子
ハイド氏に変る瞬間見てしまう　君子
美しい姿のままの紫よ　蘭幸
人を恋う姿時雨の中にいる　恵子
森を離れ森の姿をたしかめる　とみお
姿見の中で女は涸れていく　夕花
一本杉に亡父の姿を見てしまう　輝子
りんご完熟　花嫁姿目に浮かぶ　日枝子
縞がすり母の姿に隙がない　花梢
日本のすがた世界に問われてる　金太
無になれば風の姿が見えてくる　楓楽
働いてる姿しかない亡父の記憶　希久子
笑ってた母そっくりにどっこいしょ　南奉
人　荒介
襟立てておとこは街を出て行った　地
ハンガーに何時まで掛けてある父よ　鬼遊
踏み台が亡母の姿のまま残る　天　寿恵子
まなうらに一人の姿とどめて　秋　智子
軸

兼題「明るい」　牛尾緑良選

抜群の明るさ採用されました　まさよ
明るさを取り戻すのに要る時間　桂子
童顔に返り明るいクラス会　実男
棘秘めたバラが明るい演技する　多賀子
明るい方へ伸びて開いた秋の薔薇　輝子
口づけを明るい場所でする若さ　瑠美子
救助船海が明るくなってくる　鬼遊
てっちり屋明るい話して帰る　熊生
天高し明るいことをしてみたい　とみお
イチローを肴明るい夜にする　憲太郎
終電車明るい顔は酔うている　美房
この話するには外が明る過ぎ　みね
新人が明るい風を連れてくる　天笑
小さくとも明るさ探す虫めがね　昭子
悟り切った明るい顔で手話と手話　杜的
ためらわず明るい方へ芽を伸ばす　みさ江
明日はまだ明るいものが述べやすい　諷人
明るい個性引き出す球をころがして　維久子
妊婦スイミング明るい顔がならんでる　露児

周りみな明るくさせてサクラサク　満秋
明るさを条件にして墓地をきめ　絹子
てんてまり明るい方へはずみ出す　寿子
急に明るくなってドギマギしてしまう　ミツ子
ひまわりの明るさほどをさしあげる　朱夏
道化師の明るさ奥を聞かぬよう　英子
道化師の明るさ何処へ眠る顔　はつ絵
法律に明るい友を持っている　正坊
六法に明るい隣　訳があり　与根一
明るさに惚れて余生の今日がある　計光
残り火が炎えて明るい余生なり　艶子

明るい人やなあと褒めてる訳でない　礫
明るい人と明るい話して別れ　いわゑ
結論は明るい人の方にする　日枝子
太陽の顔で分娩室を出る　花梢
七分粥妻の明るい顔と食べ　太一
笑い袋をかげで繕う妻がいる　たず子
窓が明るい亡妻よ今宵は満月だ　柳影
太陽の次に明るい母の顔　颯云児
明るくて母の鏡はくもらない　岳人
明るくが口ぐせ母の笑い皺　鹿太
ひまわりの種蒔きながら母が逝く　森子
芒野の明るさ亡母に逢えそうな　みつ子
母さんの空は明るいままにある　ダン吉
もう一度明るくなってから悩む　茜
朱を足して今日を明るく過さねば　荒介
北側の窓で明るいジョークなど　月子
平成七年明るいニュースで終りたし　寿恵子

佳

仲直りしよう思いきっておはようさん　真知子
玄関が明るい許されたらしい　希久子
上澄みを飲んで明るく生きている　みさ江
言いたいこと言うて明るくなってきた　蘭幸
涙を拭いて明るさに慣れてきた　螢

人

嘘ひとつ明日を明るくするために　楓楽
地
足許の明るいうちに嘘をつく　しげお
天
堪忍袋　仰山もって明るいよ　妻子

軸

とりあえず明るく笑うことにする　緑良

兼題「昇る」　林荒介選

ありがとう朝日が昇るうちの屋根　かすみ
太陽が山から昇る村に住む　白渓子
揚花火ピンからキリをたのしませ　冬葉
気球は昇るここは高級分譲地　雄々
高層はエレベーターを信じきり　満秋
昇りつめるまで呪文をかけておく　重人
昇りつめそこは孤独という掟　みね
殺すもの多く頭に血が昇る　艶子
日は昇る虫も芥もみな光る　いわゑ
御来迎を拝んでからの人生観　はつ絵
豆の木を昇った友が帰らない　五楽庵
昇進の椅子に転がる栗のいが　英子
月が昇ると虫の音楽隊がくる　和子
天国に昇る準備は出来ている　礫
全力で走るぞ今日の陽が昇る　はつ絵
昇り切ったか神さまの声近くなる　輝子
昇り坂生涯続くはずがない　あやめ
初日の出　今年は一人増えました　てる
やがて昇る頂上の風たしかめる　颯云児
期待担って今堂々と陽が昇る　剛治
昇り降りしてやっと和らぐ棺の中　恭昌
昇天に蓮の台が空けてある　ルイ子
藁焼いて天まで昇れ亡父の顔　一風
パンドラの箱を覗きに昇る月　隆
陽が昇るホルスタインは咆哮す　とみお

面白い話にしよう陽が昇　日枝子
竹光で斬られた首が昇華せず　勇太
ライバルを有頂天まで昇らせる　完司
昇進に小者が肩を聳やかす　剛治
わたくしをみつめるために木にのぼる　天笑
昇天へ等身大の絵を残す　しげお
樹に昇る皆より上におりたくて　蕗児
階段を降りては昇る稽古する　螢
糸を張る空の広さを悟る凧
一直線に昇る少女の陽よ風よ　雅文
陽が昇ればきっと何とかなるだろう　維久子
落葉はらはら昇りそこねた椅子だった　恭昌
昇天の梯子いちだんずつ踏んで　日枝子
上昇気流に乗ってしまった落下傘　艶子
陽が昇る街が戦の貌になる　瑞枝
昇って昇って男は踊り上手になる　花梢
明日昇るために沈んでゆく夕陽　弥生
上昇気流乗ったつもりのシャボン玉　保州
日は昇る秋は山から降りてくる　美房
赤い陽が昇るわたしは母になる　慶子
小心な僕を昇降機に拾う　文
月昇る纏うものなど何も無い　諷人
昇天をする人間の籍にいる　千代
太陽が昇ると見えるバラの棘　諷人
太陽が昇る太郎は寝ておれぬ　岳人
昇るまで待ってる父のちびた靴　四郎
おろおろと昇ろうかげろうのように　熊生
人　礫
自分史の縄は天国へと昇る　俊平

地
鰯雲あたりでこころ遊ばせる　完司
天
陽が昇り人は等身大になる　楓楽
軸
極限にまだ気付かないバルーンたち　荒介

兼題「会う」　仁部四郎選

会う度にお辞儀ばっかりしています　太茂津
新世紀に会う意気込みの祖父の眉　光子
会う人がみんな綺麗に見える　秋　金太
わたしの中の他人と会っている夜中　千代
会う度にあなたと齢の差がひらく　鹿太
大臣に会う手続きが邪魔くさい　雄々
会うてからの言葉は皿に盛ったまま　一風
正直な自分に出会う夢の中　みつ子
極楽でたたらを踏んで鬼に会う　いわゑ
漏してはならぬ謀議の目が出会う　帆雀
会って来た余韻が歩幅弾ませる　千秀
オルガンの調べの中で姉に会う　荒介
会う人があるのと妻は出ていった　礫
職安で会い公園で会う背広　正雄
いいわよと軽い返事で会うふたり　雅文
会いたいといつも最後に書いてある　蘭幸
偶然と言うはあやしい出会いよう　〆女
次の世の会う場所妻と決めておく　南奉
神に会いお礼言いたいことがある　ミツ子
会うだけの約束だけは断らず　螢
会いたさは百も承知の母だった　妻子

軽く会い軽く別れた駅時計　希久子
ほんとうの自分に会った大地震　てる
化かされることを承知で会いにでる　とみお
出会う人みんな善人そうな村　保州
向うからボクの鬼門がやって来る　寿美
耳底で母のことばに会っている　叮紅
面会へ忘れずハンカチ持って行く　白渓子
夢で会う人が大勢いる老婆　宵明
曼珠沙華今年も亡母に会いました　たもつ
会う場所をいつも彼女にリードされ　素子
適合の因子にいのち拾われる　久峰
てのひらに会える時間を溜めておく　桂香
会うたびに大きくなったのはわたし　森子
酒提げて会えば親方貸してくれ　太一
再会の握手むかしの掌が温い　灸六
会えぬとも知らず約束して地震　哲子
お仲人会うてみるだけとは本気　瑠美子
霊界で会おうとひとつあくびする　英壬子
会うた日の翌日会うて立話　瑠美子
再会の友ミヨちゃんのままに居る　楓
どん底でこそ会えました仏さま　はつ絵
会者定離もう振り向かぬことにして　文子
会うたんび母さんの頬こけている　ダン吉
誰に会う兆しか今朝の鱗雲　完司
無口な妻が見合の席で喋り出す　和歌子
とにかく会おう君の誤解をとくために　み ね
会う度に太った痩せたとやかましい　草丘
会うてから君に逮捕をされたまま　文秋
美房

久しぶり会えば千円返される　満秋
みんな寝てから父と会うコップ酒　熊生
人
あす会える絵の具をみんな使いきる　ふみ
地
国訛り三十年をすぐ埋める　たもつ
天
嘘すこし盛って愉しく会っている　朱夏
軸
極楽で会う約束の七回忌　四郎

兼題「結ぶ」　恒松町紅選

川柳塔まつりで結ぶ太い綱　由多香
そろばんも男結びも下手で老い　たず子
点と点結ぶと見えてくるこころ　朱夏
老いた母あきれさせてるたて結び　恵子
たて結び男のロマン秘めてある　かりん
結び目に父と母とが居てくれる　しげお
前向きの風と結んでいるいのち　森子
結び目がかたくてちちの血が匂う　瑞枝
おたいこ結び疲れて帰る秋祭り　洞庵
キリストの結んだ糸がもつれ出す　とみお
靴紐を固く結んでいる決意　金太
一周忌男結びも慣れました　多賀子
結び目の固さに妻の意地がある　鹿太
表ではけんか裏では手を結び　甚一
喪があけておんなひとりの固結び　鬼遊
元結いを紙縒りで結ぶ無位無冠　俊平
それからは口を結んだ隙間風　冬葉
作戦の内で敵とも手を結ぶ　与根一
何にでも効く温泉で結ばれる　美房
節目節目で結び直している絆　芳子
結び合う帯賑やかな控え室　太一
口きゆっと結び少年決意みせ　ミツ子
根性を男結びにしておこう　しげお
虚と実の真ん中辺で手を結ぶ　いわる
一番高いところにおみくじを結ぶ　蘭幸
男結びも覚えて女ひとり住む　玉恵
いい話逃げないように結んどく　いわる
結び目がときどき緩む赤い糸　剛治
指に結んだこよりがちゃんと覚えてた　絹子
点と点結ぶと野心浮きあがる　諷云児
逆風へ男結びがきいてくる　満秋
結んだもの確かめあっている夫婦　文子

楓

蝶結びのリボン美しく叛き　房子
一文字に結んで決意ゆるがない　智子
結び目が解けてサンマを焼いている　楓楽
ふところが寒くて愛が結べない　きみえ
いくたびか結び直してダイヤ婚　紫香
和解して結ぶ両手があたたかい　重人

螢

結び目がだんだん固くなる絆　桂子
解けないように結んで欲しかった　正坊
結べない縄一本に意地がある　千秀
結び目が解けないままに冬に入る　荒介
華麗さを誇らぬ花が実を結ぶ　宵明
眷属を結んで余る紐の丈　たもつ
しっかりと結んでからの縄電車　諷人
小包へ老母の達者を結んでる　佳
低飛行しながら結び合っている　完司
長所だけ見るようにして手を結ぶ　昭子
結び目をスパッと切ったのは女　ダン吉
ほどけない結び目今も抱いている　寿美
結ぶ手を何時かは放す縄電車　弘朗
結ぶのに親の名前が引っかかり
人
結び直した跡がいくつもある夫婦　寿美
地
結び目で母と解った置土産　みさ江
天
結んだらほどけぬ縄を父は綯う　雄々
軸
細胞も男結びもゆるみだす　叮紅

兼題「祭り」　橘高薫風選

ワッショイワッショイ川柳塔のお御輿だ　千秀
川柳塔まつりに誓い新たにす　柳宏子
深ぶかと拝む祭神知らずとも　ルイ子
方言にやすらいでいる秋祭り　君子
秋祭りの采配を振る粗大ゴミ　吐来
お祭りも欠かさず医者へ寄ってくる　白渓子
松枯れの鎮守の森も秋祭り　吸江
この山車へ一年生きる祭り好き　たもつ
祭りには帰ると少し大人らし　妻子
なれずしで酌む熱燗の祭り酒　勇太
獅子頭三代かむる祭り好き　帆雀
祭笛　忍者の里は霧の里　哲子

ギャル神輿おんなが光る膝小僧　炎六
鉢巻きのままダンジリの娘が帰る　英子
長男が戻って祭りらしくなる　和子
祭り客毎年同じ人がいる　(宮)一夫
救急車も神社で待機する祭り　保州
毒消しは売ってはいない祭りの灯　雄々
一匹の男に還る火の祭り　弥生
観光客もコタンも一緒イヨマンテ　公一
子に託す火祭りの火が燃え盛る　緑良
秋祭り笛吹く人らかくしゃくと　一風
祭り笛古い太鼓もたいせつに　俊平
埴輪の目がすがし大和の秋祭り　萬的
父ちゃんの肩の高さで見た祭り　諷云児
肩車までもソーリャーソーリャーと　ダン吉
こめかみを今だんじりが駈け抜けた　荒介
喧嘩祭り自粛する気はさらになし　文秋
だんじり祭り済んで星座に気付く夜　勇太
だんじりが終ると屋根を葺きかえる　ふみ
秋祭り雪の覚悟はできている　五楽庵
屋上のお稲荷さんにもある祭り　杜的
貸し借りは問わぬ祭りの一日だ　帆雀
お祭りで出会った妻とお祭りへ　天笑
男子誕生祭りの寄付を弾むなり　一二三
御祭礼仁王も今日は晴れやかな　いわる
祭りですここで成る恋成らぬ恋　敏
トラックでみこしを運ぶあかんたれ　南奉
合格通知　家族で小さい祭りする　蘭幸
四畳半ひと間二人の祭りかな　由多香
新刊書ならべてボクの祭りだな　たず子

病院の待合室も祭りかな　日枝子
生ありて祭りいのちを炎やさばや　千代
浦島さんがコーヒー飲んでいる祭り　瑞枝
カラオケに神楽が負けた秋祭り　美津留
同窓の出世ばかりを聞く祭り　君子
余所者にここの祭りはおもしろい　智子
佳
毎日がまつりのような街で生き　月子
まつり笛太平洋はおだやかに　岳人
秋祭り感無量です一揆の碑　蕗児
祭囃子と母の俎板ひびきあう　隆
そんな話はお祭りが済んでから　重人
人
曼珠沙華おんなのまつりかもしれぬ　桂香
地
最高の祭りわたしのお葬式　みつ子
天
教室が祭りの顔になっている　狸村
軸
お祭りの観覧席の鰯雲　薫風

祝い金

第1回川柳塔まつりに対し、次の方々から祝い金として金一封を拝受しました。

オール川柳社・うみなり川柳会・川柳塔まつえ吟社・川柳塔わかやま吟社・川柳塔鹿野みか月・川柳塔きゃらぼく・土橋螢・岩崎みさ江・東野大八・山本翠公・平田実男・園山多賀子・林荒介、瑞枝・寺尾俊平・中原諷人・奥谷弘朗・月原宵明（敬称略）

川柳塔社常任理事会（10月3日）

▽第1回川柳塔まつりの反省について。
▽同人総会における要望事項とその対応について（本社句会投句廃止・同人名簿の内容各賞受賞者への通知・各賞選考方法など）
▽路郎賞・川柳塔賞の選考方法について改善意見があり、再検討を行う。
▽岩崎みさ江（鳥取県）松岡久留美（豊中市）酒井一壺（羽曳野市）の3氏の同人承認。

全日本柳人写真名鑑
平成5年版・A5判520頁
特価2500円（〒380円）

平成柳多留
第1集・A5判96頁
特価1000円（〒240円）
第2集・A5判244頁
特価1000円（〒310円）

〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1—11
ステップイン南森町702
㈳全日本川柳協会

柳界展望

★番傘川柳本社ではかねて「番傘川柳之碑」建立基金の募集を行っていたが、桜井市の安倍文殊院の境内に完成、**9月23日**、関係者が参列して除幕を行った。

★第7回兵庫のまつり・ふれあいの祭典'95の川柳発表大会は**11月5日**午前十時半から相生市民会館4階中ホールで開かれ、入賞作品の発表・表彰を行う。なお、当日の課題と選者は、羅漢＝中塚礎石▽力＝和田恭子▽願う＝赤井花城（各題2句）、優秀作品を表彰。

★第30回岡山県川柳大会は**平成8年1月28日**、邑久町立中央公民館で開く。兼題と選者は、宝＝橘高薫風▽姿＝藤本静港子▽歩＝小松原爽介▽笑＝寺尾俊平▽石＝浜野奇童▽恋＝田中好啓（各題2句）、席題当日1題、特別席題当日1題。会費1500円）、投句は500円を添え、**1月26日**までに岡山県邑久郡邑久町山手1116・嘉数幸枝へ。

★竹原川柳会は**平成8年9月8日**、たけはら美術館内「文化創造ホール」で創立40周年記念川柳大会を開く兼題と選者は、頭＝林荒介▽虫＝三浦宏▽愛＝寺尾俊平▽海＝石原伯峯▽森＝橘高薫風（各題2句・投句拝辞）、特別課題「酒」小島蘭幸謝選・**8月20日**までに到着するよう事前投句。会費2000円。

★第11回国民文化祭とやま'96は**平成8年9月28日**から富山県で開催されるが、文芸祭（川柳大会）は9月29日（日）、大沢野町民文化会館で開かれる。

▽出　版△

■『なにわ川柳―朝日なにわ柳壇入選句』（滝北博史B6判44頁）橘高薫風・片岡つとむ序文。約8年間の入選句を集録。

ちちろ虫階下に妻という他人

■『創立90周年記念自選合同句集』（柳樽寺川柳会発行・B6判128頁・価2500円）会員98人の各10句と物故川柳人の名句抄を収録。米寿を迎えた大石鶴子さんの句から―

一人減り二人減りいくさを話す人

新同人紹介

松岡久留美（くるみ）
―公一・典子・達子推薦

酒井一壺（いっこ）
―薫風・鬼遊・吐来推薦

岩崎みさ江
―薫風・紫香・諷人・螢推薦

▼訂　正▲

■**10月号**＝P99下段・豊中もくせい川柳会5句目「盆すぐで…」→「盆すんで」▽P108下段1行目（9月句会）「いじめっ子…」の句の作者「義子」→「美子」▽P114上段18行目（柳界展望）「若者にどよめき」作者「政岡日枝子」→「林荒介」

▽お詫び△

本社同人の佐治千加子さん（弘前市）の作品が10月号の水煙抄欄に誤って掲載されました。事務上のミスによるものですが、ご本人に対し、深くお詫び申し上げます。

（編集部）

■各地句会だより

岩出川柳会

小倉アサ

紀の川を眼下に、岩出川柳会はここ根来地区公民館で呱々の声を上げてちょうど八年を過ぎました。岩出町文化協会の活動の一環として二十三名のやる気が協力し合いながら現在に至っております。

発足に際し、野村太茂津先生の側面からのご助力、そしてちょうどこの時期に、児島与呂志先生が岩出に転居してこられたことも重なり、少人数からのスタートでしたが、土台は充分出来上がっていたと聞いております。ローカル色豊かな地で、月に一度の笑顔の交換は、当句会独特のカラーとして誇りに思っています。

かたくなに町文化協会の城を守り、会員は岩出町住民に限り、手作りの句会を築きあげてまいりました。会を長く持続させる秘訣として、すべて自分たちの手で何もかも賄うのを主旨として、今日を迎えることが出来ました。見方によっては〝井の中の蛙〟とも取れますが、そこはやる気の集まり、あちこちに投句したり、他所の句会に参加しながら、ちゃっかり会を盛り上げております。しかし、当地はもとより周囲のご援助に守られることが多く、温室育ちに甘んじているのが現状です。

「ねんね根来のよう鳴る鐘はよー、一里聞こえて二里響くよー、バイバイ」、この歌詞は当時に伝わる「根来の子守歌」の一節ですが、春ともなれば桜、秋はもみじと、徐々に観光客も増えている兆しの中、先日、「川柳塔わかやま」三百号記念大会で川柳塔社主幹橘高薫風先生にお会いすることが出来ました。その感激もさることながら、先生がこの「根来の子守歌」を口に出された時、背中をそっと押された不思議な気がいたしました。県外の方々にも知られている地、もっと足元の良さをうまく取り入れ、手足を羽ばたかねばと思い知らされたような気がします。

ひと言のご縁、また、目に見えぬご縁を含めた数々の出逢いが、「川柳岩出」の杖となり、足跡となっているのは言うまでもありません。もうすぐ百号を迎えるに当たり、根を下ろす時期から根を張る時期への節目として、今後とも皆様方のお力添えあっての岩出であり、より一層のご指導をお願いします。

輪の中へようこそお待ちしています　綾子

右を合言葉に、岩出住民の入会者を迎える笑顔は、大切な一つの灯を守り抜く心意気でもあります。その結果、若い入会者が増えているという明るい材料にも恵まれ、四十六の瞳がそろってたすきを掛け直しながら、燃えに燃えているこの頃です。

豊中市民川柳大会

と　き　**11月23日**（祝）正午開場
ところ　豊中市立中央公民館１階集会室
（阪急宝塚線曽根駅東200ｍ）
宿題と選者（各題２句・午後１時締切）

「　空　」　梶川 雄次郎 選
「　心　」　木野 由紀子 選
「　味　」　小出 智子 選
「　絵　」　塩谷 幸子 選
「　渦　」　高杉 鬼遊 選
「　力　」　波部 白洋 選
「　結　」　前田 芙巳代 選

席　題　（当日発表）　上野 多恵子 選
会　費　1000円（記念品・発表誌進呈）
賞　豊中市長賞ほか　各題に賞進呈

主　催　豊中川柳会

大阪文化祭川柳大会

と　き　**11月18日**（土）午前11時開場
ところ　大阪府中小企業文化会館
（地下鉄「谷町９丁目」下車徒歩７分）
宿題と選者（各題２句・午後１時締切）

「越える」　久保田 元紀 選
「流　れ」　田中 新一 選
「　坂　」　前田 芙巳代 選
「番　号」　河内 天笑 選
「　乱　」　清水 斗升 選
「時事雑詠」　柏原 幻四郎 選

席　題　当日２題発表
会　費　1000円（作品集代含む）
◎各題秀句に「川柳賞」贈呈

主　催　大阪府・大阪市府・市教育委員会

創立５周年記念
「大阪川柳」川柳大会

と　き　**12月２日**（土）正午開場
ところ　アピオ大阪（大阪市立労働会館）
宿題と選者（各題２句・午後１時締切）

「新　聞」　梶川 雄次郎 選
「残　る」　小出 智子 選
「　斧　」　墨　作二郎 選
「熱　い」　高杉 鬼遊 選
「　鼻　」　波部 白洋 選
「忘れる」　森中 恵美子 選

事前投句「　歌　」　磯野 いさむ 選
◎所定用紙に２句連記、**10月31日**までに枚方市釈尊寺町28-4-301・足立淑子へ
会　費　2000円（合同句集・小川速水遺句集）
懇親宴　6000円（申込制）

主　催　大阪川柳の会

『川柳万画』刊行記念句会

と　き　**11月19日**（日）正午開場
ところ　伊丹市立生涯学習センター
（阪急伊丹線稲野駅から西600米）
おはなし　高杉 鬼遊 氏
兼題と選者（各題２句・午後１時締切）

「マンガ」　牛尾 緑良 選
「未　来」　川島 諷云児 選
「笑　う」　田中 正坊 選
「魅　力」　小出 智子 選
「清　い」　西田 柳宏子 選

事前投句「情　け」　黒川 紫香 選
◎欠席投句は葉書で**11月15日**までに〒661尼崎市武庫町１－47－15　黒川紫香へ
会　費　2000円（「川柳万画」・発表誌）

主催　「川柳万画」刊行委員会
後援　尾浜川柳会・小園川柳会
西宮北口川柳会

11月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	2日(木)午後1時から 姿・ラスト・戻る・垢	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑
川柳ねやがわ	3日(金・祝)正午から **寝屋川市民川柳大会**	寝屋川市立総合センター　本文P45参照 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
尼崎いくしま	3日(金・祝)午後1時から 積む・石・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－14　春城年代
川柳塔まつえ	4日(土)午後1時から 闇・転ぶ・一発	松江市雑賀町雑賀公民館. 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
富柳会	5日(日)　正午から **富田林市民川柳大会**	富田林中央公民館　本文P45参照 〒584 富田林市南大伴町4－1　池　森子
八尾市民川柳会	12日(日)　正午から **八尾市文化祭川柳大会**	八尾文化会館　本文P75参照 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
川柳塔わかやま	12日(日)午後1時から 箱・素人・洗う	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
西宮北口川柳会	13日(月)午後1時から 奥・渡る・かすか・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市段上町6－6－2－202　奥田みつ子
ほたる川柳同好会	14日(火)午後1時から 混む・配る・ジンクス	豊中市立螢池公民館　阪急螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3－10－28　井上直次
高槻川柳サークル卯の花	16日(木)　正午から 担ぐ・出口・数える・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8　川島瓢云児
南大阪川柳会	17日(金)午後6時から 英気・形勢・背負う・手本	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋
京都塔の会	18日(土)午前10時半集合 灯・短い・自慢	**秋の吟行句会**　本文P105参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル　都倉求芽
岸和田川柳会	18日(土)午後1時半から 広い・振り出し・便宜・誇り	市立福祉総合センター　南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村
もくせい川柳会	20日(月)午後1時から 読む・しみじみ・大役・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
東大阪市川柳同好会	25日(土)午後6時から 幸福・店・それぞれ・息子	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	26日(日)午後1時から 拝む・再起・マラソン・期限	羽曳野市立陵南の森公民館　近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★作家の山口瞳氏が8月30日、死去した。『江分利満氏の優雅な生活』で直木賞を受賞、『血族』『家族』など一族の生涯を描いた私小説を発表後、十年前から〝定年〟を理由に小説を書いていない。特別の知己ではないが、硬骨のエッセイストとしての一面を敬愛していた。

★「亀井勝一郎とか清水幾太郎とか、あるときは左翼、あるときは日本の古典に逃げる。また、あるときは日教組のアジテーター、その次は自衛隊礼賛。つまりどんな時代になってもベストセラーを書いてしまう人を僕は許せないと思っていました」―『職業としての小説家』と題する同氏のエッセイの一節。

★九月号の「川柳こぼれ話」に書いた『一月一話』の匿名筆者、淮陰子の本名が判った。私は中国の古典にも精通した英文学者とあたりをつけていたが、朝日新聞の読書欄によると、元東大教授で十年前に八十一歳の高齢で病歿した中野好夫氏であった。昔、比えい山で開いた夏季大学に招いて話を聞いたことがあるが、いかにも荒法師といった風容であったことが懐かしく思い出される。

★最近よく見かけるものに自転車の一本足スタンドがある。なるほど一台の車体を支えるだけならそれで事足りる。しかし、自転車置き場では迷惑な存在、反対側から押すとすぐ倒れ、他の車も巻き添えを食う。一本足は、必要条件には適うが、十分条件は満たしていないことになる　（正）

ひとこと

日川協見解に思う

全日本川柳協会はこのほど「川柳についての日川協見解」をまとめた。全文を紹介する。

1、川柳は、人間の心や社会の動きを五・七・五の十七音字でつづる短詩型文芸です。

2、川柳は、人の心に強く訴える内容を、できるだけ平易な言葉で表現することをめざします。

3、川柳は、くつろぎの文芸ですが、文字遊びや語呂合わせではありません。

4、川柳は、作者の個性を大切にします。ふざけた雅号や匿名はやめましょう。

文句をつければきりがないが、まあ妥当なところで、特にサラリーマン川柳などの似而非川柳がはびこる昨今、3・4の指摘は緊要だと思う。　（島江　一夫）

☆阪神大震災から九ヶ月余り経った。今なお、壊れたままの家、ショベルカーで壊している家、覆いをして修理中の家に混じって新築もボツボツ建ち始めたが、大部分が更地のままである。

☆更地に我が物顔に茂っていた夏草も色褪せてきている。駅前など、仮設店舗が数軒できてはいるが、商店街とは程遠い。荒涼とした空地の片隅に、五時四十六分を指した小さい時計台が傾いたまま残っている。

☆落下した新幹線の高架は逸早く復旧し、支柱が大分太くなっている。お陰で高架下にあった駐輪場は狭くなったが、もう二度と落下の心配はないであろう。

☆この街で被災して、転居を余儀なくさせられた大勢の人々はどうしているのだろうか。商店街にあった魚屋さんは〝可愛いかわいい魚屋さん　ママゴト遊びの魚屋さん〟とスピーカーで童謡を流して車で回ってくる。皆それぞれ傷手から立直るべく懸命なのである。

☆残った家、壊れた家の運不運を思う。ただ〝人間万事塞翁が馬〟だから何が幸いするか分からない。これからなるべくプラス思考でゆきたい。楽しく明るいことを考えると、体も疲れにくいそうである。　（み）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**1月号**）　地名　　雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人　・　**誌友**　マルで囲んでください。

「川柳塔」への投句について

① 川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。

② 両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。

③ 渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。

④ 各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

本社11月句会

とき　11月6日（月）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター3F
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
おはなし　黒川紫香

兼題「除く」　宮崎シマ子選
「いつも」　榎本吐来選
「ひずみ」　安藤寿美子選
「ひとこと」　野村太茂津選
「無視」　橘高薫風選

席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円

本社12月句会　7日（木）予定
兼題　「破る」「汚い」「客」「ごめん」「万歳」

作品募集

1月号発表（11月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　西田柳宏子選
渺湖抄（3句）　小出智子選
茴香の花（3句）　八木千代選
「夢」　平田実男選
「日記」　桑原道夫選
「迎える」　安藤寿美子選

課題吟（3句）
初歩教室「愛」（3句）　吉岡美房担当

2月号
課題吟「景色」「飾る」「みかん」
初歩教室「許す」

NHK川柳作品募集

課題「歩く」　河内天笑選
ハガキに3句　11月10日締切
投句先
〒540-01　NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表　11月25日（土）午前11時5分からラジオ第1放送（予定）

夜市川柳募集

第6回「木」　木野由紀子選
ハガキに3句　11月末締切
投句先　〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

西日本文字放送作品募集

課題「留守」　橘高薫風選
ハガキに3句　11月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2—20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料76円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成七年十一月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六五一—六九一四番
振替　〇〇九八〇—五—三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成七年十一月一日発行（毎月一日発行）

川柳人待望の月刊総合誌12月1日創刊！

川柳総合誌 月刊 オール川柳

これ一冊で全国の川柳界の動向が分かる！
有力柳人を文壇へ送るオール川柳賞創設！

創刊特集：こんな句が抜ける－投稿投句必勝法
創刊特集：全国一流作家競詠！斎藤大雄、橘高薫風ほか
【読者柳壇募集中】選者・大木俊秀、八木千代、山本翠公

◆六ヶ月予約購読料 ／ 4980円（送料込）◆一ヶ年予約購読料 ／ 9960円（送料込）
直接予約購読には数々の特典があります。お申込みは下記へ、電話、葉書、ファックスで。
全国有名書店でもお求めになれます。

〒556 大阪市浪速区恵美須西2-9-15 オール川柳社
電話06－634－5548 ファックス06－636－3832

●川柳・俳句・短歌集 ●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー ●故人を偲ぶ追悼誌
●創業・喜寿を祝う記念誌 ●郷土史

各種本（製作専門）

■少部数の本も
取り扱っています。
■ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
電話 06-659-5514(代)
FAX 06-652-2928
ジェイ出版
電話 06-658-8741(代)

雑誌 05703－11